

サルトキハ此限ニ在ラス

第二 生命若クハ健康ヲ保險ニ付シ又ハ付セシメタル者カ契約上負擔シタル義務ニ違反シ又ハ放蕩、粗暴其他故意ノ所爲ニ因リテ生命ヲ短縮シ若クハ健康ヲ毀損シタルトキ

第三 死亡若クハ病傷カ重罪若クハ輕罪ニ付テノ有罪判決ノ執行ニ因リ若クハ其執行中ニ生シ又ハ重罪若クハ輕罪ヲ犯シタル直接ノ結果トシテ生シ又ハ決闘其他故意ノ所爲ニ因リテ生シタルトキ

第六百八十三條 總テ保險無効ノ場合ニ於テハ保險契約ヲ以テ此場合ノ爲メニ約定シタル額若シ約定ナキトキハ少ナクトモ被保險者ノ爲メニ既ニ積立テタル貯金ノ半額ヲ被保險者ニ償還スルコトヲ要ス但被保險者カ詐欺若クハ惡意ニ因リテ自ラ無効ニ至ラシメタルトキハ此限ニ在ラス

第六百八十四條 契約ノ無効ハ保險者カ契約ノ無効ヲ致ス情况ヲ知リタル後尙ホ契約ヲ被保險者ト繼續シタルトキハ保險者ヨリ被保險者ニ對シテ之ヲ主張スルコトヲ得ス

第六百八十五條 死亡若クハ病傷ノ時ノ外尙ホ契約ニ依リ或ル年齢若クハ期限ニ至リタル時ヲ以テ被保險額支拂ノ時ト爲スコトヲ得又被保險額ノ支拂ニ換ヘテ年金ノ支拂ヲ約定スルコトヲ得

第六百八十六條 年金保險ハ保險者カ或ル金額ヲ受取りテ被保險者ニ又ハ其死亡ノ後ハ其保險ニ與カリタル人ニ終身間又ハ或ル期間ノ満了ニ至ルマテ年金ヲ支拂フ義務ヲ負フ契約タリ

第六百八十七條 年金受取ノ權利ハ被保險者ニ属スルト同一ノ範圍及ヒ條件ニテ第六百四十一條ノ規定ニ從ヒテ被保險者ヨリ之ヲ他人ニ轉付スルコトヲ得

第六百八十八條 總テ生命保險、病傷保險及ヒ年金保險ノ場合ニ於テハ被保險者若クハ其權利承繼人ハ正當時期ニ豫告ヲ爲シタル後保險契約ニ從ヒ若クハ第六百八十三條ニ從ヒ自己ニ屬スル償還金ヲ

受ケテ契約ヲ解除スル權利ヲ有シ又ハ豫告ヲ以テ償還ヲ求ムルコトヲ得ヘキ利息附ノ預ケ金ニ其契約ヲ變換スル權利ヲ有ス

保險料ノ不拂ハ保險者ニ於テ之ヲ契約解除ノ豫告ト看做スコトヲ得

第六節 保險營業ノ公行

第六百八十九條 保險會社ハ官許ヲ受グルニ非サルハ其營業ヲ爲スコトヲ得ス

第六百九十條 保險會社ハ保險料其他ノ收入金ノ中ヲ以テ年々積立ヲ爲シ何時ニテモ年々支拂フ可キ被保險額ノ少ナクトモ平均二倍ニ滿ツル準備金ヲ設クル義務アリ此準備金ハ十分安全ニ利用シ其證券ヲ裁判所ニ寄託スルコトヲ要ス但之ヨリ生スル收入ハ會社ニ歸ス

第六百九十一條 保險會社ハ少ナクトモ毎年一回其年ノ收支一覽表及ヒ貸借對照表ヲ作りテ之ヲ公告シ且各社員及ヒ各被保險者ニ送達スル義務アリ

第六百九十二條 裁判所ハ何時ニテモ被保險者ノ申立ニ因リ保險會社ノ保險業ノ現況、取引ノ實況、貸借ノ關係及ヒ會社カ保險業ヲ營ム原則ヲ一人若クハ二人以上ノ鑑定人ヲシテ検査セシメ其検査ノ結果ヲ被保險者ニ通知シ且公告スル權アリ其検査及ヒ公告ノ費用ハ裁判所ノ見込ヲ以テ右申立ヲ十分ノ理由アリトスルトキハ保險會社之ヲ負擔スル行政官廳ハ亦其職務ヲ以テ検査ヲ行フコトヲ得

第六百九十三條 一部類ノ保險業ノ外ニ尙ホ他ノ部類ノ保險業ヲ營ム會社ハ各部類ノ保險業ヲ各別ニ營ミ又其各部類ニ生スル收入ハ專ラ其部類ノ爲メニ之ヲ積立テ及ヒ使用スルコトヲ要ス此規定ハ保險會社ノ破産ノ場合ニモ之ヲ適用ス其殘餘ノ財團ハ第四百四十五條ノ規定ニ從ヒテ之ヲ分配ス可シ保險業ノ外ニ他ノ業ヲ營ム會社ハ亦前項ニ準ス

第六百九十四條 保險會社カ第六百九十條乃至第六百九十三條ノ規定ニ背クトキ又ハ被保險者總員ノ

○商法

承諾ヲ得シテ同業若クハ他業ノ會社ト合併スルトキ又ハ被保險者ニ告知シタル保險業ノ原則ヲ變更シ若クハ事實上之ヲ犯ストキハ各被保險者ハ豫告ヲ爲スコト無クシテ何時ニテモ保險ヲ解止シ其拂込ミタル現支拂期間ノ保險料總額ノ償還及ヒ拂込ミタル日ヨリノ法律上ノ利息ヲ求ムル權利アリ

第六百九十五條 保險會社カ將來ノ義務ヲ履行スル能ハスト豫知ス可キ取引ノ實況ニ至リタルトキハ其會社カ未ダ支拂ヲ停止セスト雖モ被保險者ハ破産宣告ヲ求ムル申立ヲ爲スコトヲ得

第六百九十六條 保險會社ニシテ其本店ノ所在地外ニ於テ代辦人ヲ以テ保險契約ヲ取結フ者ハ其代辦人ニ與ヘタル權限ノ如何ニ拘ハラズ其契約ニ關シテハ代辦人ノ營業所ノ地ヲ管轄スル裁判所ノ裁判權ニ服從シ且其裁判所ニ差出ス可キ裁判上ノ代人ヲ定置ク義務アリ若シ之ヲ定置カサルトキハ其代辦人ヲ裁判上ノ代人ト看做ス

第十二章 手形及ヒ小切手

總則

第六百九十九條 手形ハ或ル金額カ相違ナク支拂ハル可キ旨ヲ明記シ指圖式又ハ無記名式ニテ發行スル信用證券ニシテ合法ノ原因ヲ當然含有スルモノナリ

第七百條 商ヲ爲スコトヲ得ル各人ハ爲替義務ヲ負フコトヲ得

第七百一條 手形ニ爲替無能力者ノ署名アルモ其他ノ署名ノ効力ハ此カ爲メニ妨ケラレルコト無シ

第七百二條 手形ノ要件ヲ外觀ノ爲メニノミ記入シタル手形ハ其情ヲ知りタル者ノ爲メニハ之ヲ手形ト看做サス

第七百三條 他人ヨリ特ニ委任ヲ受クルコト無ク又ハ代理ノ事實ヲ明記スルコト無クシテ他人ノ爲メニ手形ニ署名スル者ハ此ニ因リテ自己ニ責任ヲ負フ

第七百四條 手形ノ受取人ハ直チニ提出人ニ對シ又其後ノ各所持人ハ其前者ヲ經由シテ提出人ニ對シ番號ヲ記シタル同文ノ手形數通ノ交付ヲ求ムルコトヲ得

手形ノ各所持人ハ需用ニ應ジテ自ら手形ノ謄本ヲ作ルコトヲ得

第七百五條 手形ハ其旨趣ニ因リテ直接ニ義務ヲ負ハシム但法律又ハ商慣習ニ依リテ例外ト爲ス可キモノハ此限ニ在ラス

第七百六條 法律上ノ要件ヲ拘ケサル手形又ハ其要件ト共ニ違法ノ事項ヲ拘ケタル手形又ハ旨趣カ互ニ抵觸シ其抵觸ヲ法律ノ許セル方法ヲ以テ取除クコトヲ得サル手形ハ無効ナリ

第七百七條 手形上ノ重要ナラサル附記ハ法律上ノ要件ニ適スル手形ノ旨趣ノ効力ヲ妨クルコト無ク又爲替上ノ義務ヲ生セシムルコト無シ

第七百八條 偽造又ハ變造ノ手形ハ手形トシテ其効力有ス然レトモ偽造、變造ニ因リテ義務ヲ生スルコト無シ但一旦生シタル義務ハ變更セサルモノトス

偽造、變造ニ付テノ異議ハ其偽造、變造ヲ爲シタル者又ハ其情ヲ知りテ手形ヲ取得シタル者ニ對シテ之ヲ起スコトヲ得

第七百九條 爲替義務ハ其負擔ニ關シテハ手形ニ記載シタル地ノ法律ニ從ヒ若シ其地ヲ記載シタルトキハ債務者ノ住所ノ法律ニ從ヒテ之ヲ定メ又其履行ニ關シテハ履行ヲ爲ス可キ地ノ法律ニ從ヒテ之ヲ定ム

○商法

爲替上ノ權利ヲ行使シ及ヒ保全スル爲メニスル行爲ハ其行爲ノ地ノ法律ニ從ヒテ之ヲ爲スコトヲ要ス但手形ニ其他ノ地ヲ記載シタルトキハ此限ニ在ラス

第七百十條 手形又ハ小切手ノ占有者ニシテ正當ノ方法ニ依リ且甚シキ怠慢ニ出テスルヲ取除クタル者ハ其手形又ハ小切手若クハ其代金ノ引渡ノ請求ニ應スル義務ナシ但占有者カ手形又ハ小切手ノ引渡ヲ求ムル際チ起シタル場合アルニ當リ之ニ對シ抗辯ヲ爲シ得ヘキ事實ト同一ノ事實ニ因リテ請求セラルルトキハ此限ニ在ラス

第七百十一條 盜取セラレ又ハ紛失シ若クハ滅失シタル手形及ヒ小切手ニ付テハ第四百三條ノ規定ヲ適用ス

第七百十二條 爲替手形ノ引受人又ハ約束手形ノ振出人ニ對スル爲替上ノ請求權ハ滿期日ヨリ起算シ三ヶ年ヲ以テ時効ニ罹リ又所持人若クハ裏書讓渡人ヨリ振出人若クハ前裏書讓渡人ニ對スル償還請求權ハ拒證書ヲ作りタル日若クハ請求ノ通知ヲ爲シタル日ヨリ三ヶ年ヲ以テ時効ニ罹ル時効ハ既チ起シ其他各箇ノ裁判上ノ手續ヲ爲スニ因リテ中断セラレ又裁判所ノ判決ニ依リ又ハ書面ニ明示シテ債務ヲ承認シ新債務ト爲シタルニ因リテ消滅ス

第七百十三條 一覽拂又ハ一覽後定期拂ノ手形ニ在テハ時効ハ呈示ニ付キ規定セラレタル期間ノ満了ヨリ始マル但其満了前ニ呈示ヲ爲シタルトキハ此限ニ在ラス

第七百十四條 手形ヨリ生スル請求權時効ニ因リ又ハ法律ニ規定シタル行爲チ取リタルニ因リテ失ヒタル者ハ其失ヒタルニ拘ハラヌ支拂人、振出人又ハ裏書讓渡人ニ對シ此時ノ者カ支拂ハサル爲替資金若クハ取戻シタル爲替資金ニ因リテ已レテ利シタル限度ニ於テ右請求權ヲ主張スルコトヲ得第七百十一條ノ場合ニ係ルモノト雖モ亦同シ

第七百十五條 總テ手形ニ署名ヲ爲シタル者ハ此ニ因リ連帶シテ義務ヲ負擔ス然レトモ此連帶義務ハ各義務者ニ於テ特立ノモノトス
爲替ノ脈ハ其職員ニ對シ又ハ其一人ニ對シテ之ヲ起スコトヲ得

第一節 爲替手形

第一款 振出

第七百十六條 爲替手形ニハ左ノ諸件ヲ明瞭詳密ニ記載スルコトヲ要ス

第一 振出ノ年月日及ヒ場所

第二 爲替金額但文辭ヲ以テ記ス可シ

第三 支拂人ノ氏名

第四 受取人ノ氏名又ハ其指圖セラレタル人若クハ所持人ニ支拂フ可キ旨及ヒ滿期日並ニ支拂地

第五 爲替手形ト引換ニテ支拂ヲ爲ス可キ旨

第六 振出人ノ署名、捺印

第七百十七條 振出人ハ爲替手形ヲ自己ノ指圖ニテ振出シ又ハ振出地ニ非サル地ニ於テ支拂ヲ爲スコトヲ得
キトキハ自己ニ宛テ振出スコトヲ得

第七百十八條 爲替手形ノ金額二十五圓以上ナルトキハ無記名式ニテ振出スコトヲ得

第七百十九條 滿期日ハ定マリタル日又ハ日附ノ後定マリタル期間又ハ一覽ノ時又ハ一覽後定マリタル期間ニ於テ之ヲ定ムルコトヲ得

第七百二十條 爲替手形ニ滿期日ヲ記載セサルトキハ其手形ハ一覽ノ時ニ滿期ト爲ル

第七百二十一條 支拂人ノ住地又ハ其他ノ地(他所爲替手形)ハ支拂地トシテ之ヲ記載スルコトヲ得他

○商法

ノ地ヲ記載シタル場合ニ在テ爲替手形ニ支拂ノ爲メ他人〔他所拂人〕ヲ明記セザルトキハ支拂人、其
記帳シタル地ニ於テ支拂ヲ爲スコトヲ要ス

第二款 裏書

第七百二十二條 爲替手形ノ受取人及ヒ其後ノ各所持人ハ若シ其手形ニ反對ヲ明記セザルトキハ裏書
ヲ以テ之ヲ他人ニ轉付スルコトヲ得

第七百二十三條 裏書ニハ其年月日、場所、裏書譲渡人ノ署名、捺印及ヒ裏書譲受人ノ氏名アルコトヲ
要ス然レトモ白地ニテモ裏書譲渡ヲ爲スコトヲ得

第七百二十四條 裏書ニハ其日ヨリ前ノ日附ヲ爲スコトヲ禁ス之ニ違フトキハ偽造、變造ノ刑ニ處ス

第七百二十五條 無記名式ニテ振出シ又ハ白地ニテ裏書譲渡ヲ爲シタル爲替手形ハ交付ノミヲ以テ之
ヲ轉付スルコトヲ得

第七百二十六條 爲替手形ハ満期後ト雖モ裏書譲渡ヲ爲スコトヲ得又代理若クハ擔保ノ爲メ裏書譲渡
ヲ爲スコトヲ得

第七百二十七條 支拂ノ爲メニスル呈示及ヒ拒證書ノ作成ヲ事情ニ因リテ正當時期内ニ爲スコトヲ得
サル爲替手形ノ裏書譲渡ハ満期後ノ爲替手形ノ裏書譲渡ニ同シ

第七百二十八條 満期後ノ爲替手形ノ裏書譲渡ハ其裏書譲渡人ノ權利及ヒ義務ノミヲ裏書譲受人ニ轉
付スルモノトス然レトモ裏書譲受人ハ満期後ニ爲替手形ノ裏書譲渡ヲ爲シタル各人ニ對シテ如何ナ
ル方式ニモ請求セラレヌ且獨立シタル債權請求權ヲ取得ス

第七百二十九條 代理ノ爲メ又ハ擔保ノ爲メニスル裏書譲渡ハ其目的ヲ爲替手形ニ記載セザルトキハ
第三者ニ對シテ眞ノ裏書譲渡ナリ

第七百三十條 代理ノ爲メニスル裏書譲渡ニシテ其目的ヲ記載シタルトキハ其裏書譲受人ニ裏書譲渡
人ノ權利及ヒ義務ヲ行フ權限ニ更ニ眞ノ裏書譲渡ヲ爲ス權ヲ付與スルモノトス但其手形ニ眞ノ裏書
譲渡ヲ爲スコトヲ得サル旨ヲ記帳シタルトキハ此限ニ在ラス

第七百三十一條 擔保ノ爲メニスル裏書譲渡〔買入爲替手形、寄託爲替手形〕ハ其目的ヲ記載シタルト
キト雖モ眞ノ裏書譲渡ナリ然レトモ各爲替債務者ハ爲替手形ヲ以テ擔保シタル債務ヲ支拂ヒ又ハ其
ノ方法ヲ以テ之ヲ消却シタリトノ抗辯ヲ裏書譲受人ニ對シテ爲スコトヲ得

第七百三十二條 裏書譲渡ハ各裏書譲渡人ノ順序カ裏書譲受人ニ至ルマテ間斷ナキトキニ限リ裏書讓
受人ノ爲メ効力アリ又代理又ハ擔保ノ爲メ裏書譲渡ヲ爲シタル爲替手形ハ裏書譲渡人ニテモ裏書
譲受人ニテモ更ニ裏書譲渡ヲ爲スコトヲ得

第七百三十三條 裏書譲渡ノ法律上ノ効力ハ爲替手形ニ裏書譲渡ヲ禁スル旨ヲ記帳シタルカ爲メ之ヲ
失フコト無シ但之ヲ禁シタル者ニ對スル債權請求權ハ此カ爲メニ消滅ス

第三款 引受

第七百三十四條 爲替手形ノ所持人ハ其手形ニ別段ノ記載ナキトキハ満期日前ニ引受ノ爲メ支拂人ニ
之ヲ呈示スルコトヲ得若シ支拂人其引受ヲ爲サハルトキハ其翌日拒證書ヲ作ルコトヲ要ス

他所拂爲替手形ノ振出人ハ所持人ニ於テ引受ノ爲メ其手形ノ呈示ヲ爲ス可ク若シ爲サザルトキハ債
權請求權ヲ失フ可キ旨ヲ記スルコトヲ得

第七百三十五條 一覽後定期拂ノ爲替手形ハ別ニ短キ呈示期間ノ記載ナキトキハ日附後遑クとも二個
年内ニ引受ノ爲メ之ヲ呈示ス可シ若シ之ヲ呈示セザルトキハ振出人及ヒ裏書譲渡人ニ對スル債權請
求權ヲ失フ

○商法

支拂人カ方式ニ依レル引受ヲ拒ミ若クハ引受ノ日附ヲ爲スコトヲ拒ムトキハ其翌日拒證書ヲ作ルコトヲ要ス此場合ニ於テハ拒證書作成ノ日ヲ以テ呈示ノ日ト看做ス若シ拒證書ヲ作ラサルトキハ満期日ハ呈示期間ノ末日ヨリ起算ス

第七百三十六條 引受ハ支拂人カ爲替資金ヲ受取リタルト否トナ間ハス爲替手形ノ所持人ニ對シテ満期日ニ爲替金額ヲ支拂フ義務ヲ支拂人ニ負ハシム又所持人ニ引受ノ旨ヲ記シタル爲替手形ヲ還付シタル後ハ贖身又ハ詐欺ノ場合ヲ除ク外之ヲ取消スコトヲ得ス

第七百三十七條 引受ハ支拂人カ爲替手形ニ引受ノ旨ヲ記シテ署名、捺印ヲ爲シ又ハ署名、捺印ノミヲ爲スニ因リテ成ル此方式ニ依ラサル引受ノ効力ハ第八百五條ノ規定ニ從フ

第七百三十八條 即日ニ引受ヲ爲サス又ハ條件若クハ其他ノ制限ヲ以テ之ヲ爲シタルトキハ引受人ハ其引受ノ爲メ當然購束セラルルモ所持人ハ之ヲ拒ミタリト看做スコトヲ得若シ爲替金額ノ一分ニ付テノミ引受ヲ爲シタルトキハ他ノ部分ニ付テハ其引受ヲ拒ミタリト看做ス

第七百三十九條 支拂人カ引受ノ全部若クハ一分ヲ拒ミタルトキ又ハ第七百三十七條及ヒ第七百三十八條ノ規定ニ依リテ引受ヲ拒ミタリト看做スコトキハ所持人ハ拒證書ノ作成ヲ遲延ナク振出人又ハ裏書讓渡人ニ通知ス可シ若シ此通知ヲ爲ササルトキハ之ヲ受ケザリシ者ニ對シテ償還請求權ヲ失フ

又右ノ通知ヲ爲シタル所持人ハ振出人又ハ裏書讓渡人ニ對シテ爲替金額及ヒ拒證書ノ費用並ニ戻爲替ノ費用ヲ満期日ニ支拂フコトニ付テノ擔保ヲ求ムル權利ナ有シ各裏書讓渡人ハ自ら擔保ヲ爲シタルト否トナ間ハス前者ニ對シテ右同一ノ權利ナ有ス但拒證書ノ交付ヲ受クルニ非サレハ擔保ヲ供スル義務ナシ

當事者ノ一人カ爲シタル通知及ヒ其受ケタル擔保ハ其後者總員ノ爲メニモ効力アリ

第七百四十條 振出人及ヒ裏書讓渡人ハ擔保ヲ爲スニ換ヘテ前條ニ掲ケタル一切ノ金額ヲ即時ニ所持人ニ支拂ヒ又ハ即時ニ供託所ニ寄託スルコトヲ得

第七百四十一條 擔保又ハ寄託ハ後ニ至リ爲替手形ノ引受アリタルトキ又ハ爲替金額若クハ償還金額ノ支拂アリタルトキ又ハ所持人カ時効若クハ懈怠ニ因リテ爲替手形上ノ權利ヲ失ヒタルトキハ其生シタル費用ヲ引去リテ之ヲ還付スルコトヲ要ス

第七百四十二條 第七百四十二條ノ規定ニ從ヒテ爲替金額及ヒ費用ヲ所持人ニ支拂ヒタル者ハ其所持人ニ對シテ裏書讓渡ヲ求メ且爲替手形ト共ニ受取證ヲ記シタル償還計算書ノ交付ヲ求ムルコトヲ得

第四款 榮譽引受

第七百四十三條 支拂人カ引受ヲ拒ミタル爲替手形ニ同地ニ於ケル豫備支拂人ヲ掲ケタルトキハ其爲替手形ヲ拒證書ト共ニ引受ノ爲メ遲延ナク豫備支拂人ニ呈示ス可シ

第七百四十四條 豫備支拂人ヲ掲ケサルトキト雖モ支拂人及ヒ第三者ハ拒マレタル爲替手形ヲ振出人又ハ裏書讓渡人ノ榮譽ノ爲メニ引受クルコトヲ得然レトモ所持人ハ此ノ如キ參加ヲ許諾スル義務ナシ

第七百四十五條 二人以上ノ參加人アルトキハ最も多數ノ義務者ノ榮譽ノ爲メニ引受ヲ爲ス者ヲ以テ榮譽引受人トス若シ榮譽者ヲ記載セサルトキハ振出人ヲ榮譽者ト看做ス

第七百四十六條 豫備支拂人ノ引受其他所持人カ許諾シタル參加人ノ引受ハ榮譽者及ヒ其後者ニ擔保ヲ供スル義務ヲ免カレシム

第七百四十七條 榮譽引受ハ支拂人カ支拂ヲ爲ササルトキニ於テ參加人ニ満期後爲替金額ヲ支拂フ義務ヲ免カレシム

○商法

務ヲ負ハシム

丙百十六

第七百四十八條 榮譽引受ハ参加人爲替手形ニ之ヲ記載シテ署名、捺印シ且拒證書若クハ其附箋ニ之ヲ記載スルコトヲ要ス

第七百四十九條 拒證書ハ拒證書費用ノ雜費ヲ受ケタル上之ヲ参加人ニ交付シ参加人ハ返ケトモ拒證書作成ノ翌日受榮譽者ニ榮譽引受ヲ爲シタル旨ヲ通知シテ拒證書ヲ送付スルコトヲ要ス若シ此事ヲ怠ルトキハ此ニ因リテ生スル損害ニ付キ責任ヲ負フ

第七百五十條 受榮譽者及ヒ其前者ハ擔保ヲ求ムル權利ヲ有ス然レトモ所持人ハ第七百四十四條ニ依リテ榮譽引受ヲ許諾セサルトキニ非サレハ之ヲ有セス

第五款 保證

第七百五十一條 爲替手形ニ於テ爲替債務者ノ署名ニ自己ノ署名ヲ添フル第三者ハ其債務者ト連帶シテ義務ヲ負フ

第七百五十二條 前條ノ義務ヲ負擔スルニハ別ニ書面上ノ陳述ヲ以テスルコトヲ得

第七百五十三條 爲替保證ノ義務ハ明示ノ契約ヲ以テ之ヲ制限スルコトヲ得然レトモ其制限ハ契約ヲ爲シタル當事者間ニノミ効力アリ

第六款 支拂

第七百五十四條 爲替金額ハ爲替手形ニ記載シタル貨幣ヲ以テ之ヲ支拂フ可シ若シ特ニ貨幣ノ種類ヲ表示セサルトキハ支拂地ニ於テ商人間ニ流通スル貨幣ヲ以テ支拂ヲ爲ス意思ナリト推定ス

第七百五十五條 支拂ハ第七百七十八條ノ場合ヲ除ク外ハ支拂人カ引受ヲ爲シタルト否トテ問ハス満期日ニ支拂人ノ方ニテ之ヲ受クルモノトス

支拂恩惠期日ハ之ヲ許サス然レトモ其地慣習ノ支拂日ハ之ヲ遵守スルコトヲ要ス

第七百五十六條 満期日カ一般ノ休日ニ當ルトキハ其後ノ業日ヲ以テ支拂日トス

第七百五十七條 一覽拂爲替手形ハ呈示ノ日ニ満期ト爲ル若シ日附後二年内ニ呈示ヲ爲ササルトキ又ハ二年内ノ呈示期間テ其手形ニ定メサルトキハ日附後二年内ヲ以テ満期ト爲ル若シ正當ノ時期ニ呈示ヲ爲ササルトキハ所持人ハ振出人及ヒ其書證渡人ニ對スル償還請求權ヲ失フ

第七百五十八條 債權者カ爲替金額ヲ満期日ニ受取ラサルトキハ支拂人ハ債權者ノ費用及ヒ危険ニテ其金額ヲ供託所ニ寄託スルコトヲ得此場合ニ於テハ支拂人ハ甚シキ怠慢ニ付テノミ責任ヲ負フ

第七百五十九條 債權者ハ満期日前ニ支拂ヲ受クル義務ナシ若シ満期日前ニ支拂ヲ爲シタルトキハ債務者其危険ヲ負擔ス

第七百六十條 債務者ハ満期ノ時又ハ後ニ所持人ニ支拂ヲ爲スヲ以テ其責ヲ免カル但其際債務者ニ甚シキ怠慢アリタルトキハ此限ニ在ラス

第七百六十一條 支拂ハ受取證ヲ記シタル爲替手形ノ交付ト引換ニ非サレハ之ヲ受クルコトヲ得ス債權者ハ一分ノ支拂ヲ拒ムコトヲ得ス但一分ノ支拂ノ場合ニ在テハ爲替手形ニ其支拂ヲ記入シ且其支拂ニ付テノ別段ノ受取證ヲ債務者ニ交付ス可シ

第七百六十二條 爲替手形ヲ數通ニシテ振出シタルトキハ債務者ハ其中ノ孰レニ依リテ支拂ヲ爲スモ此ニ因リテ其責ヲ免カル然レトモ裏書アル一通又ハ支拂人ノ引受ヲ記シタル一通ヲ所有者トシテ占有スル第三者ノ權利ヲ妨ケス

第七百六十條及ヒ第七百六十一條ノ規定ハ一爲替手形ノ數通ノ引渡及ヒ喪失ニモ之ヲ適用ス

○商法

丙百十七

タル上ニ非サレハ支拂ヲ爲ス義務ナシ引受ヲ記シタル爲替手形數通アル場合ニ在テハ之ヲ合シテ引渡ササルトキモ亦同シ若シ擔保ノ提供ヲ爲スニ拘ハラズ引受人カ支拂ヲ拒ムトキハ所持人ハ拒證書ヲ作ルコトヲ得

第七百六十四條 満期ノ時又ハ後ニ於テ爲替手形上ノ正當ノ所持人ニ爲ス支拂ハ其所持人カ破産宣告ヲ受ケタル場合又ハ第七百十條及ヒ第七百十一條ノ場合ニ限り裁判所ノ命令ヲ以テノミ之ヲ差押フルコトヲ得

第七百六十五條 支拂ニ對シ前條以外ノ方法ヲ以テスル故障又ハ債務者ノ知ラサル人ニ爲ス支拂ニ付テハ第四百條ノ規定ヲ適用スルコトヲ得

第七百六十六條 第七百十條及ヒ第七百十一條ノ場合ニ在テハ爲替手形ニ付キ自己ノ所有權ヲ證明シ且裁判所ノ命令ヲ得タル者ハ判決ノ確定前ニ擔保ヲ供シテ爲替金額ノ支拂ヲ求メ又ハ擔保ヲ供セスシテ爲替金額ヲ供託所ニ寄託スルヲ求ムルコトヲ得此寄託ノ場合ニ在テモ第七百五十八條ノ規定ニ適用ス

第七百六十七條 支拂人カ正當ノ理由ナクシテ満期日ニ爲替金額ノ支拂又ハ寄託ヲ拒ムトキハ所持人ハ其次ノ業日ニ拒證書ヲ作り且所持人カ償還請求ヲ爲サント欲スル者ニ拒證書ノ作成ヲ通知スルコトヲ要ス然レトモ所持人ハ爲替手形ニ明記アルニ因リテ拒證書作成ノ義務ヲ免カルルコトヲ得

第七款 榮譽支拂

第七百六十八條 拒マレタル爲替手形ハ提出人又ハ裏書讓渡人ノ榮譽ノ爲メ榮譽引受人、支拂人又ハ第三者之ヲ支拂フコトヲ得

第七百六十九條 豫備支拂人其他ノ参加人ノ引受ヲ記シタル爲替手形ハ拒證書作成ノ後直チニ榮譽引

受人ニ支拂ノ爲メ之ヲ呈示ス可シ

第七百七十條 榮譽支拂者クハ其拒絶又ハ其提供ハ何レノ場合ニ於テモ之ヲ支拂拒證書又ハ其附屬ノ記載ス可シ

其拒證書ハ爲替手形ト共ニ拒證書費用ノ辨償ヲ受ケタル上之ヲ榮譽支拂人ニ交付ス

第七百七十一條 榮譽支拂人ハ引受人、提出人及ヒ裏書讓渡人ニ對シテ所持人ノ權利ヲ承継ス但其權利ヲ主張スルニハ所持人ト同一ノ義務ヲ履行スルコトヲ要ス

第七百七十二條 榮譽支拂ハ受榮譽者ノ後者總員ヲシテ責テ免カレシム

第七百七十三條 榮譽支拂ヲ提供スル者二人以上アルトキハ支拂人ヲ以テ榮譽支拂人トシテ之ニ次テハ最も多數ノ義務者ヲシテ責テ免カレシムル者ヲ以テ榮譽支拂人トス

第七百七十四條 所持人ハ榮譽支拂ヲ受クルコトヲ拒ムニ因リテ受榮譽者及ヒ其後者ニ對スル償還請求權ヲ失フ

第八款 償還請求

第七百七十五條 支拂人カ満期日ニ爲替手形ノ支拂ヲ爲ササルトキハ所持人ハ提出人及ヒ裏書讓渡人ニ對シ爲替金額及ヒ其利息並ニ不拂ニ因リテ生シタル一切ノ費用ニ付キ償還請求權ヲ有ス

第七百七十六條 所持人ハ爲替手形ヲ満期日ニ支拂ノ爲メ呈示ス可シ若シ支拂ヲ爲ササルトキハ満期日ノ次ノ業日ニ支拂拒證書ヲ作ル可シ但第七百六十一條第二項ニ掲ケタル一分ノ支拂ノ場合ニ於テモ亦同シ

第七百七十七條 支拂拒證書ハ既ニ引受拒證書ヲ作りタルトキニモ債務者カ死亡シ又ハ破産宣告ヲ受ケ又ハ其所在ノ知レサルトキニモ之ヲ作ル可シ

○商法

第七百七十八條 引受人ニ對シテ爲替權利ヲ保全スルニハ滿期日ニ於ケル呈示及ヒ拒證書ノ作成ヲ要セス然レトモ他所拂爲替手形ハ他所拂人若シ他所拂人ノ記載ナキトキハ支拂人ニ其爲替手形ヲ支拂フ可キ地ニ於テ支拂ノ爲メ之ヲ呈示ス可シ若シ支拂ヲ爲ササルトキハ同地ニ於テ拒證書ヲ作ル可シ

第七百七十九條 引受人カ破産宣告ヲ受ケ其他資力ノ確ナラサルニ至リタル場合ニ於テ爲替支拂ノ爲メ十分ナル擔保ヲ供セサルトキハ所持人ハ滿期日前ニ支拂拒證書ヲ作リテ償還請求ヲ爲スコトヲ得

第七百八十條 所持人ハ振出人及ヒ專書譲渡人ノ各員又ハ總員ニ對シ償還請求ヲ爲スコトヲ得

請求ヲ受ケタル專書譲渡人ハ其前者ニ對シテ同一ノ權利ヲ有ス

第七百八十一條 償還請求ヲ爲ス者ハ第七百三十九條ノ規定ニ依リテ引受拒證書作成ノ通知ヲ爲シタルニ拘ハラス尙ホ其償還請求ヲ爲サント欲スル前者ニ書面ヲ以テ其請求及ヒ支拂拒證書作成ノ通知ヲ爲スコトヲ要ス其通知ハ所持人ニ在テハ拒證書ヲ作リタル日ノ翌日、專書譲渡人ニ在テハ通知書ヲ受取リタル日ノ翌日之ヲ爲可シ但專書譲渡人ノ通知ハ其後者ノ爲メニモ効力アリ

第七百八十二條 前者ニ對シテ償還請求ヲ爲シタルモ此カ爲メニ其後者ハ償還義務ヲ免カレス

第七百八十三條 拒證書作成ノ義務免除ニ因リテ拒證書作成ノ權利及ヒ償還請求權ハ消滅セス然レトモ此場合ニ於テ其免除ヲ爲シタル者ノ後者ニ在テハ其免除ヲ爲シタル者ニ對シ際本ヲ以テ爲替手形ノ送付ヲ爲スト同時ニ書面ニテ償還請求ノ通知ヲ爲スヲ以テ足レリトス

第七百八十四條 償還請求ノ訴ハ償還請求權ヲ得タル者ヨリ償還請求ヲ受ク可キ者ニ對シ時効期間中何時ニテモ之ヲ起スコトヲ得

第七百八十五條 償還請求權ハ支拂人カ爲替資金ヲ受取リタリトノ抗辯ノ爲ニ効力ヲ失フコト無シ然レトモ爲替資金ヲ供スル義務アル者ニ對シテハ其者カ爲替資金ヲ供セザリシトノ抗辯ヲ爲スコトヲ得

得

第七百八十六條 償還請求ハ左ノ額ニ付キ之ヲ爲スコトヲ得

- 第一 爲替金額及ヒ滿期日ヨリ起算シタル年百分ノ七ノ利息
- 第二 拒證書ノ費用其他必要ナル立替金
- 第三 戻爲替ヲ提出シタルトキハ其費用

第七百八十七條 償還請求權ヲ得タル者ハ償還義務者ニ對シ償還金額ヲ限トシテ其動産ノ假押ヲ裁判所ニ申立ツルコトヲ得然レトモ償還請求ノ訴ヲ十四日內ニ起ササルトキハ其差押ハ無効ト爲ル

所持人ハ引受人ニ對シテ右同一ノ權利ヲ有ス

第七百八十八條 償還義務者ハ爲替手形、拒證書及ヒ受取證ヲ記シタル償還計算書ノ交付ヲ受クルニ非サレハ支拂ヲ爲ス義務ナシ

第七百八十九條 爲替義務者ハ償還金額ノ支拂ト引換ニテ受取證ヲ記シタル爲替手形及ヒ支拂拒證書ノ交付ヲ所持人ニ求ムル權利アリ

第九款 拒證書作成

第七百九十條 拒證書ハ裁判所ノ役員又ハ公證人之ヲ作ルモノトス若シ其地ニ此等ノ人ナキトキハ被拒者ニ於テ證人二人ノ立會ヲ以テ之ヲ作ル可シ但其證人ハ成年ノ男子ニシテ成ル可ク商人タルコトヲ要ス

第七百九十一條 拒證書ハ拒者ノ營業場若シ營業場ナキトキハ其住居ノ内若クハ傍ニ於テ之ヲ作ル可シ但拒者不在ナルトキ又ハ臨席ヲ肯セス若クハ來入ヲ拒ムトキト雖モ亦同シ

若シ已ムヲ得サル場合アルトキハ裁判所又ハ公證人役場ニ於テ拒證書ヲ作ルコトヲ得

○商法

第七百九十二條 拒者ノ營業場及ヒ住居ノ知レサル場合ニ於テ支拂ノ官署ニ問合テ爲スモ尙ホ知ルコトヲ得サルトキハ拒證書ハ其官署内ニ於テ之ヲ作ルコトヲ要ス

第七百九十三條 法律上定メタル場所ノ外ニ於テハ拒者ノ承諾アルモ拒證書ヲ作ルコトヲ得ス

第七百九十四條 一般ノ休日ニハ拒證書ヲ作ルコトヲ得ス然レトモ通常ノ取引時間外ニ於テ之ヲ作ルハ妨ナシ

第七百九十五條 拒證書ニハ左ノ諸件ヲ記載スルコトヲ要ス

第一 爲替手形ノ全文但最後ノ裏書ニ至ルマテ遺漏ナク記載ス可シ

第二 拒者ノ臨席又ハ不在

第三 引受、支拂又ハ擔保ノ要求及ヒ拒絶並ニ拒絶ノ理由

第四 右要求及ヒ拒絶ノ日並ニ場所

第五 榮譽引受又ハ榮譽支拂アルトキハ其旨

第六 年月日、場所及ヒ臨席總員ノ署名、捺印

若シ拒者カ署名、捺印スルコトヲ欲セス又ハ署名、捺印スルコト能ハサルトキハ其旨ヲ證書ニ明記ス可シ

第七百九十六條 第七百九十一條乃至第七百九十四條ノ規定ハ引受又ハ支拂ノ爲メニスル呈示、爲替手形數通ノ要求其他本章ノ規定ニ從ヒ或人ノ方ニテ爲ス可キ行爲ニモ之ヲ適用ス

第七百九十七條 第七百十條及第七百十一條ノ場合ニ於テハ其情況ヲ拒證書ニ明示シ且成ル可ク詳細ニ爲替手形ノ旨趣ヲ記シテ爲替手形ノ全文ニ代フ

第七百九十八條 裁判所ノ役員又ハ公證人ハ其作リタル拒證書ノ全文ヲ日日帳簿ニ記入シ且被拒者ノ

求ニ因リテ數通ニ之ヲ作ル義務アリ
拒證書作成ノ費用ハ被拒者之ヲ立替フルコトヲ要ス

第十款 戻爲替手形

第七百九十九條 所持人ハ償還金額ニ付キ各償還義務者ニ對シテ戻爲替手形ヲ提出スコトヲ得

第八百條 戻爲替手形ノ費用ノ額ハ仲買人手數料、仲立人手數料、郵便税、印紙税及ヒ支拂地ヨリ償還義務者ノ住地ニ宛テ振出シタル一覽簿爲替手形ノ相場ニ因リテ定マル

右ノ相場ハ戻爲替手形ヲ遞次振出ス場合ト雖モ本爲替手形ノ支拂地ヨリ振出地ニ宛テタル一覽簿爲替手形ノ相場ヲ超ユルコトヲ得ス此二箇ノ相場ハ仲立人ノ認證ヲ受クルコトヲ要ス

第八百一條 戻爲替手形ニハ拒マレタル爲替手形、拒證書、償還計算書及ヒ前條ノ二箇ノ相切認證書ヲ添フ可シ

第八百二條 戻爲替手形ヲ支拂ヒタル者ハ其前者中ノ一人ニ宛テ更ユ戻爲替手形ヲ提出スコトヲ得

第十一款 資金

第八百三條 振出人又ハ自己ノ計算ニテ爲替手形ヲ振出サシメタル者又ハ明示シテ爲替資金ヲ供スル義務ヲ負ヒタル裏書讓渡人ハ支拂人ニ對シテ爲替資金ヲ供スル義務ヲ負フ

第八百四條 現金支拂ノ外爲替資金義務者カ支拂人ニ對シテ有スル債權又ハ信用ハ之ヲ爲替資金ニ充ツルコトヲ得

第八百五條 方式ニ依ラサル引受ト雖モ其引受ニ依リテ引受人カ爲替資金義務者ヨリ爲替資金ヲ受取リタリトノ推定ヲ生ス但參加引受ヲ爲シタルトキハ此限ニ在ラス

第八百六條 爲替資金義務者ト所持人トノ間ニ於テハ爲替手形ノ引受ニ依リテ爲替資金ヲ供シタリト

◎商注

ノ推定ヲ生セス

第八百七條 爲替手形ノ支拂ヲ爲シタル支拂人ハ爲替資金ノ請求權ヲ爲替ノ原則ニ從ヒテ主張スルコトヲ得

第八百八條 支拂人ニ代ハリテ爲替手形ノ支拂ヲ爲シタル者ハ支拂人又ハ償還義務者ニ對シテ所持人ノ權利ヲ主張スルコトヲ得

第八百九條 提出人及ヒ爲替讓渡人ハ爲替資金ヲ供シタルモ爲替手形ノ引受及ヒ支拂ニ付キ連帶ノ責任ヲ免スルコトヲ得然レトモ其責任ハ別段ノ契約ヲ以テ其契約者間ニ於テノミ之ヲ制限シ又ハ廢止スルコトヲ得

第八百十條 支拂人ハ爲替資金ヲ受取リタルトキハ勿論假令之ヲ受取ラサルモ提出人其他ノ爲替資金義務者ニ對シ爲替手形ノ引受及ヒ支拂ノ義務ヲ明示ニテ負擔シタルトキハ引受若クハ支拂ヲ爲ササルニ因リテ提出人其他ノ爲替資金義務者ニ生セシメタル損害ニ付キ責任ヲ負フ但此損害ニ付テノ請求ハ豫メ之ヲ支拂人ニ通知スルコトヲ要セス

第二節 約束手形

第八百十一條 約束手形ニハ左ノ諸件ヲ明瞭詳密ニ記載スルコトヲ要ス

第一 拂出ノ年月日及ヒ場所

第二 支拂金額但文辭ヲ以テ記ス可シ

第三 受取人ノ氏名又ハ其指圖セラレタル人ニ支拂フ可キ旨

第四 満期日

第五 約束手形ト引換ニテ支拂ヲ爲ス可キ旨

第六 提出人ノ署名、捺印

第八百十二條 約束手形ハ提出人ノ指圖ニテ之ヲ提出スコトヲ得ス

第八百十三條 約束手形ニ別段ノ支拂地ヲ掲ケサルトキハ提出ノ場所ニ於テ其支拂ヲ爲スコトヲ要ス

第八百十四條 約束手形ノ提出人其提出ニ因リテ満期日ニ支拂ヲ爲ス義務ヲ負擔ス

提出人ニ對シテ爲替權利ヲ保全スルニハ引受ヲモ支拂ノ爲メノ呈示ヲモ拒證書ノ作成ヲモ要スルコト無シ然レトモ一覽後定期拂ノ約束手形又ハ他所拂人ヲ掲ケタル約束手形ニ在テハ其提出人ニ關シテモ第七百三十五條及ヒ第七百七十八條ノ規定ヲ適用ス

第八百十五條 右ノ外爲替手形ニ關スル規定ハ性質上抵觸セサルモノニ限り約束手形ニモ之ヲ適用ス

第三節 小切手

第八百十六條 小切手ハ寄託其他ノ方法ニ依リ銀行ニ對シテ繼續スル信用ヲ有スル者カ其銀行ニ依リシ之ヲシテ記名セラレタル人又ハ指圖セラレタル人若クハ所持人ニ呈示ヲ受ケ次第或ル金額ヲ支拂ハシムル證券ナリ

第八百十七條 小切手ニハ年月日ヲ記シ提出人署名、捺印ス可シ又小切手ハ一覽拂トスルニ非サレハ之ヲ提出スヲ得ス其他銀行ト明示又ハ默示ニテ約定シタル提出ノ方式ハ之ヲ遵守スルコトヲ要ス

第八百十八條 小切手ハ裏書ヲ以テ之ヲ轉付スルコトヲ得若シ白地ニテ裏書讓渡ヲ爲シタルトキ又ハ無記名式ニテ提出シタルトキハ交付ニ因リテ之ヲ轉付スルコトヲ得

第八百十九條 小切手ハ引受ヲモ拒證書ヲモ要スルコト無シ又小切手ハ日附後三ヶ年ヲ以テ時効ニ罷ル若シ小切手ヲ提出ノ日ヨリ三日内ニ支拂ヲ爲メ呈示セヌ又ハ送付セサルトキハ所持人ハ遅延ノ結果ヲ負擔ス

○商法

第八百二十條

丙百二十六

呈示ノ上ニテ支拂ヲ受ケサルトキハ日附後十日内ニ所持人ハ其詳請人若クハ提出人ニ對シ要書渡渡人ハ其前者若クハ提出人ニ對シテ償還請求權ヲ有ス然レトモ提出人ニ對シテハ提出人カ信用ヲ有セス又ハ信用ヲ消費シ又ハ依頼ヲ取消シタルトキハ右期間ノ満了後ト雖モ償還請求權ヲ有ス

第八百二十一條

提出人ハ爭アル場合ニ在テハ其小切手帳ヲ裁判所ニ差出ス義務アリ

記載スルコトヲ得

第八百二十二條

小切手ハ支拂金ヲ受取ル時受取證ヲ記シテ之ヲ交付スルコトヲ要ス

第八百二十三條

日附ヲ爲サス若クハ虚偽ノ日附ヲ爲シテ小切手ヲ提出シ要書渡渡シ若クハ之ニ受取證ヲ記スル者又ハ相當ノ信用ナクシテ小切手ヲ提出シ若クハ正當ノ理由ナクシテ依頼ヲ取消ス者ハ小切手金額ノ百分ノ十ノ過料ニ處ス若シ刑法上ノ刑ニ處ス可キ行爲アルトキハ併セテ其刑ニ處ス

前項ノ過料ニ付テハ第二百六十一條第一項ノ規定ヲ適用ス

第二編

海商

第一章

船舶

第八百二十四條

日本人民ノ所有ニ專屬シ又ハ日本ニ主タル營業所ヲ有シ且日本ノ裁判權ニ服従スル會社其他ノ法人ニシテ合名會社ニ在テハ總社員、合資會社ニ在テハ少ナクトモ社員ノ半数、株式會社ニ在テハ取締役ノ總員、其他ノ法人ニ在テハ代表者ノ總員カ日本人民ナルモノノ所有ニ專屬スル船艦其他ノ海艦ハ日本ノ船舶ニシテ日本ノ國旗ヲ掲クル權利ヲ有ス

第八百二十五條

總テ日本船舶ハ航海ノ用ニ供スル以前ニ法律、命令ニ從ヒ船艦アル者ノ測度ヲ受ク可シ若シ其積量十五噸以上ナルトキハ管海官廳ヨリ船籍證書ヲ受ケタル後船籍港ヲ管轄スル裁判所ニ於テ船舶登記簿ニ登記ヲ受ク可シ

第八百二十六條

船舶登記簿ニハノ左條件ヲ登記シ且年月日ヲ記ス可シ

第一 船名及ヒ船籍港

第二 船舶構造ノ時及ヒ地ノ知レタルトキハ其時及ヒ地又船舶カ日本艦ノ籍ニ歸シタルトキハ其時及ヒ事情

第三 官ノ測度證書ニ基キタル船舶ノ種類、大小、量積及ヒ詳細ナル記載

第四 船長ノ氏名及ヒ國籍

第五 一人又ハ數人ノ所有者ノ氏名、住所及ヒ詳細ナル記載又船舶ノ所有權ニ付キ所有者ノ股分ノ割合及ヒ所有權取得ノ合法ノ原因

第八百二十七條

登記ハ一人若クハ數人ノ所有者又ハ委任狀ヲ有スル代人ノ陳述書ニ依リテ之ヲ爲ス其陳述書ニハ必要ナル證明書ヲ添フルコトヲ要ス

第八百二十八條

船籍證書及ヒ船舶登記證書ノ交付前ニハ國旗ヲ掲クル權利ヲ行フコトヲ得ス

第八百二十九條

登記シタル事實ニ變更ノ生スルトキハ船舶登記簿及ヒ船舶登記證書ニ其變更ノ附記ヲ還納ス可シ

○商法

丙百二十七

第八百二十九條

登記シタル事實ニ變更ノ生スルトキハ船舶登記簿及ヒ船舶登記證書ニ其變更ノ附記ヲ還納ス可シ

○商法

丙百二十七

ヲ受ク可シ

登記シタル艦名ハ管海官廳ノ許可ヲ受クルニ非サレハ之ヲ變更スルコトヲ得ス

第八百三十條 艦籍港外ニ於テ日本人民、會社其他ノ法人カ艦船ヲ取得シタルトキハ其艦籍港ニ到着スルマテハ外國ニ在テハ其取得ノ地若クハ其近傍ニ駐在スル日本、領事内國ニ在テハ地方官廳ヨリ假證書ヲ受ケ之ヲ艦籍證書及ヒ艦船登記書ニ代フルコトヲ得此場合ニ於テハ領事又ハ地方官廳ハ其證書ノ原本ヲ管海官廳及ヒ艦籍港ヲ管轄スル裁判所ニ送達ナク送付スルコトヲ要ス
前項ノ證書ノ効用ハ領事ヨリ交付シタルモノハ一个年地方官廳ヨリ交付シタルモノハ半年ヲ以テ限トス

第八百三十一條 艦籍證書又ハ艦船登記證書ノ喪失シ毀損シ又ハ用ユ可カラサルモノト爲リタルトキハ之ニ換ヘテ新ナル艦籍證書、艦船登記證書若クハ前條ノ假證書ノ交付ヲ求ムルコトヲ得

第八百三十二條 艦船カ國旗ヲ掲グル權利ヲ有セスシテ之ヲ掲グルトキハ千圓以下ノ罰金ニ處ス又事情ニ從ヒ殊ニ不正ノ艦籍證書又ハ艦船登記證書ヲ用非タルトキハ其艦船ヲ沒收ス

日本ノ艦船カ外國ノ國旗ヲ掲ケテ外國ノ國籍ヲ冒シタルトキハ前項同一ノ罰ニ處ス但敵ヲ避クル場合ハ此限ニ在ラス

第八百三十三條 日本ノ本艦船カ艦籍證書及ヒ艦船登記證書ノ交付前ニ國旗ヲ掲ケ其他本章ノ規定ニ違フトキハ百圓以下ノ罰金ニ處ス

第二章 艦船所有者

第一節 艦船所有權ノ取得及ヒ移轉

第八百三十四條 商艦其他ノ海艦ハ之ヲ動産トス但本法ニ例外ヲ定メタル場合ハ此限ニ在ラス

第八百三十五條 艦船構造ノ契約及ヒ賣買其他ノ權利行爲ニ因リテ艦船ノ全部若クハ股分ヲ取得スル契約ハ特ニ作レル契約證書ヲ以テスルニ非サレハ之ヲ取結フコトヲ得ス
相續、結婚其他此類ノ事由ニ因レル艦船所有權ノ移轉ハ公正ノ證書ヲ以テ之ヲ證スルコトヲ要ス

第八百三十六條 艦船ハ其所有者タラサル者ニ在テハ所有者ノ明示ノ委任ニ依ルニ非サレハ有効ニ之ヲ賣却スルコトヲ得ス然レトモ艦長ニ在テハ明示ノ委任ヲ受ケサルモ避ク可カラサル必要アリテ官ノ證書ヲ經タル場合ニ於テハ特ニ競賣ヲ以テ有効ニ之ヲ賣却スルコトヲ得

第八百三十七條 艦船ノ取得時効ノ期間ハ二十年トス但艦長ハ時効ニ因リテ艦船ヲ取得スルコトヲ得ス

第八百三十八條 艦船ノ所有權ハ別段ノ契約アルニ非サレハ航海ノ爲メニスル總テノ積裝物殊ニ機軸、帆具、網具、機關、碇錨、艇用器具、端舟、貯蓄品及ヒ糧食ノ所有權ヲ包含ス但艦長又ハ海員ノ一身ニ屬スル所有物ハ此限ニ在ラス

第八百三十九條 航海中ニ艦船ヲ讓渡シタルトキハ其航海ヨリ生スル利益及ヒ損失ハ別段ノ契約アルニ非サレハ取得者ニ移ル

第八百四十條 任意ニ爲ス艦船ノ賣却ハ艦船債權者ノ債權ニ對シテ艦船ノ負擔スル責任又ハ其賣買價額ノ負擔スル責任及ヒ讓渡人ノ一身上ノ義務ニ變更ヲ生スルコト無シ強制賣却又ハ必要賣却ノ場合ニ在テハ艦船ノ負擔スル責任ハ當然賣買價格ニ移ル

第二節 船舶所有者ノ權利及ヒ義務

第八百四十一條 船舶ノ所有權カ二人以上ノ股分所有者ニ屬スルトキハ航海ニ關スル一切ノ業務ニ付キ其代理トシテ艦船管理人ヲ置クコトヲ要ス

○商法

第八百四十二條 所有者ハ艦長及ヒ海員ノ職務施行ニ關スル行為ニ付テハ艦船及ヒ運送貨ヲ以テ責任ヲ負フ若シ艦長カ同時ニ所有者ナルトキハ艦長ハ無限ノ責任ヲ負フ然レトモ股分所有者ナルトキハ過失ノ爲メ自己ニ不分ノ責任ノ歸セサルトキニ限り其股分ノ割合ニ應ジテ責任ヲ負ヒ尙ホ不足アルトキハ其不足額ニ對シテ無限ノ責任ヲ負フ

第八百四十三條 所有者ハ艦長ヲ任シ又隨意ニ之ヲ免スルコトヲ得又書面ノ契約アルニ非サレハ艦長ニ對シテ損害賠償ノ責ニ任セス

第八百四十四條 艦長カ同時ニ股分所有者ナル場合ニ在テ其意ニ反シ罷免セラレタルトキハ自己ニ屬スル股分ノ價額ノ支拂ヲ求ムルコトヲ得其價額ハ鑑定人ノ鑑定ニ從フ

第八百四十五條 二人以上ノ股分所有者ノ間ニ在テハ船舶ニ關スル總テノ事件ハ議決權ノ過半数ヲ以テ決定ス其過半数ハ各所有者ノ股分額ニ從ヒテ之ヲ算ス

過半数ノ決議ヲ得ルニ至ラサルトキハ議決權ノ半数ノ決議ヲ以テ艦船ノ競賣ヲ求ムルコトヲ得或ル股分所有者カ必要ナル新支出ニ同意セサルトキハ其所有者ハ自己ノ股分ヲ他ノ股分所有者ニ委付シテ賦課金ノ義務ヲ免カルルコトヲ得但股分額カ賦課金ヲ超ユルトキハ其超過額ノ支拂ヲ受クルコトヲ得

第八百四十六條 各艦船所有者ハ總テノ費用及ヒ損失ヲ扣除シタル後ニ非サレハ航海ニ因リテ生スル利益ヲ請求スル權利ナシ

第八百四十七條 股分所有者ハ他ノ股分所有者又ハ艦船管理人ノ承諾ヲ受ケスシテ何時ニテモ自己ノ自分ヲ自由ニ讓渡スコトヲ得

第八百四十八條 艦船股分ノ所有權ノ移轉ニ因リテ艦船カ其國籍ヲ失フ可キトキハ他ノ股分所有者ハ

右ノ股分ヲ自己ノ計算ニ引受又ハ其股分ヲ所有スル資格アル者ニ競賣センコトヲ求ムル權利アリ但自己ノ計算ニ引受クル場合ニ在テ已ムテ得サルトキハ裁判上ノ手續ヲ以テ其股分ノ價額ヲ定ム會社社員ノ變更ニ因リ艦船カ其國籍ヲ失フ可キトキハ會社ハ其社員ノ持分ヲ之ヲ所有スル資格アル者ニ競賣センコトヲ求ムル權利アリ

第三章 艦船債權者

第八百四十九條 船舶ハ第三者ノ占有ニ在ルトキト雖モ其附屬物及ヒ未收ノ運送貨ト共ニ左ニ掲クル債權ノ爲メ以下ノ順序ニ從ヒテ責任ヲ負フ

第一 艦船ノ強制賣却及ヒ其賣却金ノ分配ニ係ル裁判上其他ノ費用、強制賣却ノ開始以來艦船及ヒ附屬物ノ監守並ニ保全ノ費用

第二 艦船航海ノ諸稅即チ港稅、噸稅、燈臺稅其他ノ稅

第三 入港以來艦船及ヒ附屬物ノ保全ノ費用、水先案内料及ヒ拖船料

第四 最後ノ航海中ノ共同海損及ヒ救濟、救撈其他救助ニ付テノ費用

第五 最後ノ雇入契約期間中其契約ヨリ生スル艦長及ヒ海員ノ債權

第六 最後ノ航海中艦船ノ需用ノ爲メ艦長ノ爲シタル借入ニ付テノ債權及ヒ同一ノ目的ノ爲メ艦長ノ賣却シタル積荷、艦長ニ渡シタル物若クハ給シタル勞役ニ付テノ求償權

第七 未タ航海ヲ爲ササル艦船ノ賣却、構造又ハ修繕ヨリ生スル債權並ニ勞役賃及ヒ最後ノ航海ノ爲メニスル修繕、修裝又ハ糧食準備ヨリ生スル債權但出港セサル前ニ限ル

第八 艦船ノ構造又ハ修裝ノ爲メノ消費賃ヨリ生スル債權及ヒ艦船カ未タ引渡サレサル間ハ自己ノ計算ニテ構造セシムル者ノ爲シタル代價割拂ニ付テノ債權

○商法

第九 最後ノ航海又ハ最後ノ保險料支拂期間ニ係ル船舶及ヒ附屬物ノ保險料ニ付テノ債權

第十 船長又ハ海員ノ過失ニ因リテ積荷若クハ旅客ノ旅荷物ヲ引渡サヌ又ハ之ニ損害ヲ加ヘタルヨリ生スル債權

第十一 船舶ノ衝突其他船長又ハ海員ノ過失ノ場合ニ於ケル損害賠償ニ付テノ債權

第十二 船舶登記簿ニ登記シタル債權但其登記ノ日附ノ順序ニ從フ

第十三 右ノ外船舶ノ所有者又ハ賣却者ニ對スル總テノ債權

同一號内ニ於ケル二人以上ノ債權者ハ同一ノ割合ヲ以テ弁償ヲ受ク但第十二號ノ場合ハ此限ニ在ラヌ

第八百五十條 運送貨ノ負擔スル責任ハ最後ノ航海ノ運送貨ヲ以テ限トシ一航海ノ爲メ又ハ一航海中ニ生シタル債權ニ對シテハ其航海ノ運送貨ヲ以テ限トス

第八百五十一條 登記セサル債權ニ付キ船舶又ハ運送貨ノ負擔スル責任ハ任意ノ譲渡ノ場合ニ在テハ船舶カ譲渡人ノ債權者ノ異議ヲ受クルコト無ク取得者ノ名義及ヒ計算ニテ船舶港ヨリ新ニ航海ヲ爲シ且其發航以來少ナクトモ六十日ヲ經過シタル後消滅ス

第八百五十二條 船舶ニ對スル債權ノ登記ハ第八百五十七條ノ場合ヲ除ク外ハ登記ヲ受ケタル船舶ニシテ特ニ作レル抵當證書ニ依ルニ非サレハ之ヲ許サス

右ノ登記ハ其日附ヨリ起算シテ三ヶ年其効ヲ有ス若シ此期間満了前ニ之ヲ更新セサルトキハ其効ヲ失フ

第八百五十三條 登記ハ船舶登記簿ニ之ヲ爲ス又其登記ニハ左ノ諸件ヲ包含スルコトヲ要ス

第一 債權者及ヒ債務者ノ氏名、住所

第二 債權ノ額及ヒ其合法ノ原因

第三 抵當證書ノ年月日

第四 登記ノ時日

第八百五十四條 登記ヲ爲シタルトキハ登記證書ヲ交付ス若シ其以前ニ登記シタル債權アルトキハ其債權ヲ合併記ス可シ此證書ハ裏書ヲ以テ之ヲ譲渡スコトヲ得其裏書譲渡ハ船舶登記簿ニ登記ヲ受クルニ非サレハ第三者ニ對シテ其効ヲ有セス

第八百五十五條 登記シタル債權ハ債權者ノ書面上ノ承諾又ハ裁判所ノ判決ニ依リテ消滅ス此場合ニ於テハ登記證書ヲ裁判所ニ送納シ裁判所ハ其證書ニ債權消滅ノ旨ヲ記ス可シ

第八百五十六條 船舶債權者ハ其債權ノ證據完全ナルトキニ限り裁判所ノ命令ニ依リテ船舶ノ競賣ヲ爲スコトヲ得但法律上ノ優先權ハ此カ爲メニ妨ケラレルコト無シ

船舶ノ股分ニ付テノミ債權ヲ登記シ又ハ股分所有者ニ對シテノミ之ヲ主張スルトキハ其債權ニ關スル股分ノミノ競賣ヲ爲スコトヲ得但其股分ノ額カ船舶全部ノ額ノ半ヲ超ユルトキハ此限ニ在ラヌ

第八百五十七條 船舶債權者ノ權利ハ構造中ノ船舶ニ對シテモ之ヲ行フコトヲ得構造中ノ船舶ノ登記ハ其登記ヲ受クルニ至ルマテハ將來船舶ヲ定ム可キ地ノ裁判所ニ相當ノ明告ヲ爲スヲ以テ之ニ代フ

第八百五十八條 船舶カ沈没シ又ハ航海ノ用ニ耐ヘサルニ至ルトキハ船舶債權者ノ權利ハ救助セラレタル部分若クハ尙ホ存在スル部分又ハ其費得金及ヒ被保險額ニ移ル

船舶債權者ノ債權ハ其債權者ヨリ獨立シテ之ヲ保險ニ付スルコトヲ得

第八百五十九條 船舶ハ發航ノ準備ヲ終リタル時ヨリシテ債務ノ爲メニ差押ヘラレルコト無ク又其乘

○商法

船員ハ引留メラルルコト無シ但其爲サントスル航海ノ爲メニ負ヒタル債務ニ付テハ此限ニ在ラス

第四章 船長及ヒ海員

第一節 船長

第八百六十條 船長其他ノ船舶指揮者ハ其職務ノ執行ニ當リ些少ナル過失ニ付テモ責任ヲ負ヒ殊ニ積荷ニ付キ及ヒ旅客ノ安全並ニ其旅荷物ニ付キ責任ヲ負フ

第八百六十一條 船長ハ或人ノ指圖ヲ受ケテ爲シタル行爲ニ付テハ其人カ其情況ヲ知リタルトキニ限リ其人ニ對シテ責任ヲ免カル

船長カ其特別ナル職務上ノ義務ニ背反スルトキハ不可抗力又ハ意外ノ情況ニ因リテ惹起シタルニ非サル災害ニ付キ責任ヲ負フ

第八百六十二條 船長ハ航海ノ際船舶ノ航海ニ耐フルコト船舶ノ船裝、海員ノ具備、糧食ノ準備並ニ積荷ノ配置ノ適當ナルコト必要ノ底荷ヲ具備スルコト過分ノ積荷ヲ爲ササルコト及ヒ過分ノ旅客ヲ積セサルコトニ付キ注意ヲ爲ス可シ

第八百六十三條 船長ハ海員ヲ選擇シテ雇入レ乗組員ヲ編成シ船舶ヲ修繕シ船裝シ及ヒ運送契約ヲ取結フ權利ヲ有ス然レトモ此等ノ事項ニ關シテハ船舶所有者又ハ其代人ノ指圖ニ從フコトヲ要ス

第八百六十四條 船長ハ航海ノ際船籍證書、船舶登記證書、航海日誌、海員名簿、稅關ノ納稅受取證書、運送契約並ニ積荷ニ關スル書類及ヒ旅客名簿ヲ船中ニ備フ可シ

第八百六十五條 航海日誌ハ船長ノ監督ヲ受ケテ一等役員之ヲ掌リ、船舶、海員旅客及ヒ積荷ニ關スル總テノ情況並ニ事故殊ニ左ノ諸件ヲ日之ニ記載ス

第一 船舶ノ發航地、立寄地、通航地ノ名

第二 風候、天氣及ヒ潮流

第三 進航シタル線路及ヒ經過シタル距離

第四 測知シタル經度及ヒ緯度

其他時宜ニ因リテ左ノ諸件ヲモ記載ス

第一 海水ノ深度、及ヒ漏水ノ度

第二 水先人又ハ挽船ノ雇入

第三 船舶會議ノ決議

第四 海員ノ變更

第五 總テノ災害、特別ノ事故并ニ船舶内ノ犯罪及ヒ懲戒處分

第八百六十六條 船長ハ航海ノ始ヨリ終ニ至ルマテ自ラ船中ニ在リ且其委任ヲ受ケタル航海ヲ選送ナク又迂路ヲ取ラスシテ爲スコトヲ要ス

第八百六十七條 船長ハ到達地ニ到着ノ後二十四時内ニ其地ノ管海官廳ニ出頭シテ檢閲ヲ受ケル爲メ航海日誌ヲ差出シ同時ニ報告ヲ爲スコトヲ要ス其報告ニハ船名、噸數、積荷、船裝ノ地及ヒ時、經過シタル線路、風候、天氣及ヒ潮流若シ死亡其他ノ災害若クハ船舶ノ現状ニ變更アルトキハ其事由及ヒ航海中ニ生シタル著シキ事故ヲ包含ス

此報告ヲ爲ス前ニハ荷卸ヲ爲スコトヲ得ス但急迫ナル場合ハ此限ニ在ラス
沿岸航海ニ付テハ本條ノ規定ヲ適用セス

第八百六十八條 航海中ニ避難港ニ入ルコトノ必要ト爲リテ人港シタルトキハ船長ハ選送ナク其港ノ管海官廳ニ出頭シ入港ノ事由及ヒ情況ニ付テノ報告ヲ爲シテ筆記ヲ受ケルコトヲ要ス其筆記ハ公文

ヨリ出ス

ト爲シテ船舶所有者ニ又求ニ因リテ其他ノ利害關係者ニ其者ノ役得ニテ之ヲ交付ス

第八百六十九條 船長ハ航海中ニ危険ノ生シタルトキハ役員其他重立タル海員ト評議ヲ爲シタル場合ノ外ハ如何ナル事情アルモ船舶ヲ放棄スルコトヲ得ス其船舶ヲ放棄スル場合ニ於テハ船長ハ最後ニ去ル可ク且成ル可ク人命、書類、貨物及ヒ船舶ヲ救助スル責任ヲ負フ

第八百七十條 破船其他船舶放棄ノ場合ニ在テハ船長ハ運送ナク最近ノ管海官廳ニ出頭シテ其事由及ヒ情况ヲ報告ス可シ其官廳ハ報告ヲ認定シ若クハ補充スル爲メ海員及ヒ旅客ヲ照應シ其他必要ナル調査ヲ爲スコトヲ得

第八百七十一條 船長ハ航海中必要ナル場合ニ在テハ役員ト評議ヲ爲シタル後船舶ニ存在スル總テノ食料ノ何人ニ屬スルヲ問ハス乗込人ノ需用ノ爲メニ之ヲ處分スルコトヲ得但其價額ヲ賠償スルコトヲ要ス

第八百七十二條 船長ハ航海中船舶ノ修繕其他必要ナル需用ノ爲メ他ニ其費用支辨ノ途ナキ場合ニ於テ船舶所有者若クハ其代人ノ現在セサルトキハ豫メ役員ト評議ヲ爲シ且管海官廳ノ認可ヲ得タル後船舶ヲ抵當ト爲シ又ハ積荷ノ全部若クハ一分ヲ質入シ若ク質入却スルコトヲ得其積荷ヲ質入シ若クハ質却シタルトキハ積荷所有者ハ其積卸ノ地及ヒ時ニ於ケル代價ニ應シテ損害賠償ヲ求ムル權利アリ

第八百七十三條 船長ハ航海ヲ始ムル際及ヒ終リタル後又求アルトキハ何時ニテモ船舶所有者ニ報告ヲ爲シ及ヒ計算ヲ爲スコトヲ要ス

第八百七十四條 船長及ヒ海員ハ船舶所有者ノ承諾ナクシテ自己ノ計算ニテ貨物ヲ船舶ニ積入ルコトヲ得ス之ニ違フトキハ船舶所有者ハ運送貨ト貨物ヨリ生シタル利益ト自己ノ有ニ歸スルコトヲ得

第二節 海員

第八百七十五條 海員ノ雇入又ハ雇止ヲ爲シタルトキハ其地ノ管海官廳ニ於テ海員名簿ニ登記シ若クハ其登記ヲ削除ス可シ

第八百七十六條 海員雇入ノ條件ハ海員名簿ノ旨趣、別段ノ契約又ハ商慣習ニ因リテ定マル

海員ハ非常ノ服務ノ爲メ特別ノ報酬ヲ請求スルコトヲ得ス

第八百七十七條 十分ナル理由ナクシテ雇止セラレタル海員ハ既ニ受取ル可キニ至リタル給料ノ外尙ホ其雇止ノ爲メニ失ヒタル給料ノ半額ヲ損害賠償トシテ受クル權利アリ然レトモ其初ハ一个月ノ給料ヲ超ユルコトヲ得ス

禁令其他國ノ處分ニ因リテ航海ヲ廢止シ停止シ又ハ短縮シタルハ之ヲ雇止ノ十分ナル理由ト看做ス
第八百七十八條 航海中十分ナル理由ナクシテ雇止セラレタル一員ハ發航シタル港マテノ無貨運送ヲ請求スル權利アリ

船長カ其海員ヲシテ發航シタル港ニ航行スル船舶ニ於テ相當ノ職務ニ就カシメタルトキハ右ノ請求ニ應シタルモノトス

第八百七十九條 定マリタル航海ノ爲メニ雇入ノ場合ニ在テハ海員ハ其航海ノ延長シタルトキハ罰金ニ應シテ増給ヲ受クル權利アリ

第八百八十條 船舶カ航海ヲ終ラサル前ニ沈没シタルトキハ海員ハ給料ノ請求權ヲ失フ但海員ノ勞動ニ因リテ救助シタル船舶若クハ積荷ノ部分ニ付テハ此限ニ在ラス

船舶カ掠奪セラレ又ハ修繕ノ効ナキモノト爲リタル場合ニ於テハ海員ハ既ニ受取ル可キニ至リタル給料及ヒ發航シタル港マテノ無貨運送ヲ請求スルコトヲ得

○商法

第八百七十八條第二項ノ規定ハ前項ノ場合ニ於テモ之ヲ適用ス

第八百八十一條 給料ノ請求權ハ海員カ船舶又ハ積荷ノ碎殘物ノ救撈ニ從事シタル日數ニ付テモ成立ス

第八百八十二條 就役ノ後疾病ニ罹リ又ハ傷疾ヲ被フリタル海員ハ三ヶ月ヲ超エサル期間看護及ヒ治療ヲ請求スル權利アリ但自己ノ過失ニ因リテ疾病又ハ傷疾ヲ惹起シタルトキハ此限ニ在ラス

第八百八十三條 海員カ就役ノ後死亡シタルトキハ其死亡ノ日マテノ給料ハ其相續人ニ歸シ又船舶ノ防禦ノ際死亡シタルトキハ全航海ニ付テノ給料全額カ其相續人ニ歸ス

海上又ハ外國ニ於テ爲ス葬式ノ費用ハ船舶所有者之ヲ負擔ス

第八百八十四條 海員ハ就役ノ後ハ船長又ハ其代人ノ許可ヲ受クルニ非サレハ船舶ヲ離ルルコトヲ得ス

海員逃走シタルトキハ地方官廳ニ依頼シ強制シテ復役セシムルトコトヲ得復役セシムルトコトヲ得サル場合ニ在テハ其海員ハ既ニ受取ル可キニ至リタル給料及ヒ其遺留物ヲ請求スル權利ヲ失フ

第八百八十五條 本節ノ規定ハ船長ニモ之ヲ適用ス但別段ノ規定アルトキ又ハ性質上當然反對ノ生スルトキハ此限ニ在ラス

第八百八十六條 海員ノ義務背反殊ニ不從順及ヒ抵抗ハ船長懲戒權ヲ以テ之ヲ制止ス

第五章 運送契約

第一節 船舶貸借契約

第八百八十七條 航海ノ爲メニ船舶ノ全部若クハ一部分ヲ貸借スル契約ハ書面ニ作リテ當事者各自ニ其一通ヲ所持スルコトヲ要ス

貸借人ハ航海前又ハ航海中已ムテ得サル場合ニ於テハ貸借人ノ不利ト爲ラサルトキニ限り契約書ニ記シタル船舶ヨリ他ノ船舶ニ自費ヲ以テ運送品ヲ積換フルコトヲ得

第八百八十八條 船舶場、碇泊期間、超過碇泊期間ト超過碇泊ニ付テノ損害賠償トハ別段ノ契約アルニ非サレハ其地ノ慣習ニ依リテ之ヲ定ム

第八百八十九條 碇泊期間及ヒ超過碇泊期間ノ計算ニハ一般ノ休日及ヒ風雨其他天然若クハ法律上ノ妨碍ニ因リテ積荷又ハ荷卸ヲ妨ケタル日ヲ算入セス

第八百九十條 月又ハ其他ノ時限ヲ以テ運送貨ヲ定メタルトキハ其時限ハ別段ノ契約アルニ非サレハ航海ヲ始ムル日ヨリ之ヲ起算ス

第八百九十一條 航海ヲ始ムル前ニ到達地トノ貿易及ヒ交通ノ禁止セラレタルトキハ契約ハ解除シタルモノトス但此カ爲メニ當事者ノ中孰レニモ損害賠償ヲ求ムル權利ヲ生スルコト無シ

航海中ニ右ノ禁止ニ因リテ船舶カ歸航セサルヲ得サルトキハ往返航海ノ爲メニ貸借シタルトキト雖モ往路ノ運送貨ニ限り支拂フコトヲ要ス

右二箇ノ場合ニ於テハ積荷及ヒ荷卸ノ費用ハ貸借人ノ負擔トス

第八百九十二條 到達港カ封港又ハ其他ノ處分ニ因リテ閉鎖セラレタルトキハ船長ハ別段ノ指圖ヲ受ケサルカ又ハ受ケタル指圖ヲ實行スル能ハサルニ於テハ貸借人ノ利益ヲ謀リ最近ノ港ニ入航スルカ又ハ發航ノ港ニ歸航スルコトヲ要ス

第八百九十三條 不可抗力ニ因リテ航海ノ起始又ハ繼續カ一時妨ケラレタルトキハ契約ハ仍ホ効力ヲ有シ當事者ノ孰レニモ損害賠償ヲ求ムル權利ヲ生スルコト無シ然レトモ貸借人ハ自費ヲ以テ積荷ヲ處分スル權利ヲ有ス

○商法

第八百九十四條 荷積ヲ始ムル前ニ在テハ貸借人ハ運送貨ノ半額ヲ支拂ヒテ契約ヲ解除スルコトヲ得若シ船舶期間ニ一モ積荷ヲ引渡ササルトキハ契約解除ト看做サレ又運送貨ノ半額ヲ支拂フコトヲ要ス

第八百九十五條 貸借人ハ其過失ニ因リテ積荷ヲ没收セラレ又ハ差押ヘラレタルトキハ運送貨ノ全額ヲ支拂ヒ且此カ爲メニ生シタル損害ヲ賠償スル義務アリ

第八百九十六條 船長ハ貸借人カ約定シタル積荷ノ全部ヲ積込マサルトキト雖モ契約ヲ解除セサルニ於テハ航海ヲ爲ス權利ヲ有シ義務ヲ負フ此場合ニ於テ運送貨ノ全額ニ對スル擔保ヲ缺クトキハ更ニ其擔保ヲ求メ又積荷ノ不十分ナル爲メニ損害ヲ生シタルトキハ其賠償ヲ求ムルコトヲ得

第二節 船荷證書

第八百九十七條 他ノ運送品ニ付キ得タル收入及ヒ航海ヲ止メタルニ因リテ減シタル費用ハ運送貨ヨリ之ヲ扣除スルコトヲ得ス但第九百五條第二項ノ場合ハ此限ニ在ラス

第八百九十八條 船舶貸借契約ニ關スル原則ハ貨物運送ノ外ナル目的ヲ以テ航海スル爲メノ船舶貸借契約ニモ之ヲ適用ス

- 第一 船名及ヒ國籍
- 第二 船長ノ氏名
- 第三 船舶貸借人ノ氏名及ヒ積荷受取人ノ指示
- 第四 積荷港及ヒ到達港
- 第五 貨物ノ種類、數量及ヒ各箇運送品ノ員數、記號、番號、外包ノ方法

第六 運送貨ニ付テノ約定

第七 年月日

第八 交付シタル船荷證書ノ數

船荷證書ハ求ニ應ジ幾通ニテモ之ヲ交付ス可シ其中ノ一通ニハ船長ノ手許ニ備置ク爲メ貸借人署名、捺印シ他ノ各通ニハ船長署名、捺印スルコトヲ要ス

第九百條 船荷證書ハ或人ニ宛テ又ハ指圖式若クハ無記名式ニテ之ヲ發スルコトヲ得積込ミタル貨物ニ付テノ關稅受取證書及ヒ關稅明細書ハ右同一ノ期間ニ貸借人之ヲ船長ニ交付スルコトヲ要ス

第九百一條 規定ニ從ヒテ發シタル船荷證書ノ旨趣ハ當事者相互ノ間及ヒ當事者ト保險者トノ間ニ於テ完全ナル證據ト爲ルモノトス然レトモ反對ノ證據ハ之ヲ舉グルコトヲ得

船長ハ外包ノ儘ニ又ハ閉蓋シタル容器ノ儘ニ受取リタル運送品ノ種類及ヒ數量ニ付テハ明約アルニ非サレハ責任ヲ負フコト無シ但運送品ヲ受取人ニ引渡ス時ニ於テ其外部ニ毀損アルトキハ此限ニ在ラス

過失又ハ毀損ニ付テノ責任ハ第四百九十三條ニ掲ケタル情況ニ因ル外尙ホ火災、盜難其他過失ニ出テサル事故ニ因リテ消滅ス

過失ニ付テノ責任ハ契約ヲ以テモ之ヲ免カレルコトヲ得ス

第九百二條 船長ハ到達港ニ於テ運送貨、附帶費用、海損并ニ立替金ノ擔償及ヒ受取證書ヲ受ケテ船荷證書所持人ニ運送品ヲ引渡ス義務アリ若シ二人以上ノ船荷證書所持人カ申出テ爲ストキハ運送品ヲ

○商法

公ノ倉庫ニ寄託シ又ハ裁判所ノ命令ニ依リテ之ヲ他人ニ寄託スルコトヲ要ス

第三節 運送貨

第九百三條 運送貨ノ額ハ契約又ハ時價ニ依リテ之ヲ定ム其契約上ノ額ハ船舶貸借契約書又ハ船荷証券ヲ以テ之ヲ証明スルコトヲ要ス

單獨海損及ヒ附帶費用ハ契約又ハ商慣習ニ依リテ之ヲ計算スルコトヲ得

第九百四條 船長ハ現實ノ積量ニ超エタル積量ヲ明告シタルトキハ此ニ因リテ貸借人ニ加ヘタル損害ヲ賠償スル義務ヲ負ヒ且割合ニ應シテ運送貨ヲ減ス可キモノトス但其明告カ官ノ測度証書ト符合シ又ハ錯誤ヨリ出テタル差カ四十分ノ一ヨリ多カラサルトキハ此限ニ在ラス

第九百五條 船舶貸借ノ場合ニ於テハ貸借人ハ積荷ノ全部ヲ引渡ササルトキト雖モ運送貨ノ全額ヲ支拂フ義務アリ又餘分ノ積荷ニ付テハ割合ニ應シテ運送貨ノ増額ヲ支拂フコトヲ要ス

船長ハ貸借人ノ承諾ヲ得テ他ノ運送品ヲ以テ積荷ノ不足ヲ補充スルコトヲ得其補充ヨリ生スル運送貨ハ貸借人ニ歸ス

第九百六條 各箇ノ積荷ハ航海ヲ始ムル前ニ在テハ貸借人運送貨ノ半額ト取戻ニ因リテ生スル費用トナ支拂ヒテ之ヲ取戻スコトヲ得航海ヲ始メタル後ニ在テハ運送貨ノ全額ト取戻ニ因リテ生スル費用トナ支拂フコトヲ要ス但其取戻カ船長ノ過失ニ因ルトキハ第九百八條ノ規定ニ從フ

第九百七條 船長ノ承諾ヲ得ヌ又ハ虛偽ノ明告ヲ爲シテ船舶ニ積込ミタル運送品ハ船長之ヲ隠蔽シ又ハ之ニ最高ノ運送貨ヲ付スルコトヲ得又其運送品カ船舶若クハ他ノ物ヲ危険ナラシムルトキハ之ヲ海中ニ投スルコトヲ得

第九百八條 船舶カ航海ノ用ニ耐ヘサルトキ又ハ契約ニ掲ケタル國籍ヲ有セス若クハ之ヲ失ヒタルト

キハ貸借人ハ契約ヲ解除スルコトヲ得又船長ハ運送貨ノ請求權ヲ失ヒ且貸借人ニ被ラシメタル總テノ損害ヲ賠償スルコトヲ要ス

第九百九條 船舶カ航海中ニ生シタル破損ノ爲メ修繕ヲ要スルトキハ貸借人ハ運送貨ノ全額ヲ支拂ヒテ契約ヲ解除スルコトヲ得

若シ船舶ヲ相當ノ期間ニ修繕スルコトヲ得サルトキハ貸借人ハ船長カ他ノ船舶ヲ以テ之ニ換ヘサルトキニ限リ其地マテノ運送貨ヲ支拂ヒテ契約ヲ解除スルコトヲ得

第九百十條 第八百九十三條ノ場合ニ於テハ滯泊ノ費用ハ共同海損ノ原則ニ從ヒテ之ヲ定ム

第九百十一條 航海前、航海中又ハ到達港ニ於テ貸借人又ハ船長ノ惹起シタル運送ノ費用ハ其運送貨ノ惹起シタル者之ヲ負擔シ且此ニ因リテ生シタル損害ヲ賠償スルコトヲ要ス

第九百十二條 貸借人ノ過失、物ノ性質又ハ事變ニ因リテ喪失シタル運送品、第八百七十二條ニ從ヒテ喪却シタル運送品又ハ共同ノ危険ヲ救フ爲メニ海中ニ投シタル運送品ニ付テハ運送貨ノ全額ヲ支拂フコトヲ要ス然レトモ海中ニ投シタル場合ニ於テハ其運送貨ハ共同海損ノ義務ヲ負擔ス

第九百十三條 船舶ノ難破、坐礁、膠沙又ハ掠奪ニ因リテ失ヒタル運送品ニ付テハ運送貨ヲ支拂フコトヲ要セス且別段ノ契約アルニ非サレハ豫メ支拂ヒタル運送貨ハ之ヲ償還スルコトヲ要ス

救助セラレ又ハ擱置サレタル運送品ニ付テハ之ヲ到達港ニ運送セサルトキハ船舶ノ難破、坐礁、膠沙又ハ掠奪ノ地ニ至ルマテノ運送貨ヲ支拂フコトヲ要ス

第九百十四條 積荷受取人ヨリ運送貨ヲ受取ルコトヲ得ヌ又運送品ヲ喪却スルモ仍ホ之ヲ得ルコト能ハサルトキハ貸借人ハ其運送貨ニ付キ責任ヲ負フ

第九百十五條 船長ハ運送品ヲ引渡シタル後十四日間ハ所有者ノ被差シタルトキト雖モ運送貨其他ノ

○商法

、貨物ノ爲メ運送品ニ付キ優先權ヲ有ス但其貨物ノ占有カ第三者ニ移リタルトキハ此限ニ在ラス
第九百十六條 運送貨ノ減額ハ運送品ノ喪失、情況ノ變更又ハ其他ノ事由ノ爲メニ之ヲ求ムルコトヲ得ス

第九百十七條 運送品ノ價額ノ損失ニ付キ船長其責任ヲ負ヒタルトキハ運送品ヲ船長ニ委付シテ運送貨ニ換フルコトヲ得

第四節 旅客運送

第九百十八條 旅客運送契約ニ旅客ノ氏名ヲ掲ケタルトキハ旅客ハ船長ノ承諾ナクシテ航海ノ權利ヲ他人ニ轉付スルコトヲ得ス

第九百十九條 旅客ハ船中ノ秩序ニ係ル船長ノ指圖ニ服従スル義務アリ

第九百二十條 航海中旅客ノ賄ハ反對ノ契約又ハ慣習アルニ非サレハ運送貨ニ包含スルモノトス若シ反對ノ契約又ハ慣習アル場合ニ於テ契約カ食物ノ缺乏ヲ告グルトキハ船長ハ相當ノ代價ニテ之ヲ給スル義務アリ

第九百二十一條 旅客カ乗船地又ハ航海中ニ於テ定時ニ乗船セサルトキハ船長ハ之ヲ待ツ義務ナク旅客ハ運送貨ノ全額ヲ支拂フ義務アリ

第九百二十二條 發航前ニ航海ヲ廢止スル場合ニ於テハ左ノ規定ニ從フ

- 第一 旅客ハ解約ノ申込ヲ爲シテ航海ヲ止メタルトキハ運送貨ノ半額ヲ支拂フコトヲ要ス
- 第二 旅客カ死亡、疾病其他一身ニ係ル已ムテ得サル事故若クハ不可抗力ニ因リテ航海ヲ妨ケラレタルトキハ運送貨ノ四分一ヲ支拂フコトヲ要ス然レトモ旅客ハ尙ホ次回ニ發航スル船舶ヲ以テ航海スルヲ擇フコトヲ得但同一ノ定常航路ニ由ルトキニ限ル

第三 船長ノ過失ニ因リテ航海ヲ廢止シタルトキハ旅客ハ既ニ支拂ヒタル運送貨ヲ取戻ス外尙ホ損害賠償ヲ請求スルコトヲ得

第四 船舶ニ係ル已ムテ得サル事故又ハ不可抗力ニ因リテ航海ヲ妨ケラレタルトキハ雙方ニ損害賠償ノ責ヲ生スルコト無クシテ契約ハ當然廢棄ニ歸ス但既ニ支拂ヒタル運送貨ハ別段ノ契約ナキトキハ之ヲ償還スルコトヲ要ス

第九百二十三條 發航後ニ航海ヲ廢止スル場合ニ於テハ左ノ規定ニ從フ

第一 旅客カ航海中ニ解約ノ申込ヲ爲シテ航海ヲ止メタルトキハ運送貨ノ全額ヲ支拂フコトヲ要ス

第二 船長カ航海ノ續行ヲ拒ミ其他旅客ノ航海ヲ止メタルコトニ付キ過失ノ責ヲ負フトキハ旅客ハ既ニ支拂ヒタル旅客貨ヲ取戻ス外尙ホ損害賠償ヲ請求スルコトヲ得

第三 旅客カ其一身又ハ船舶ニ係ル已ムテ得サル事故又ハ不可抗力ニ因リテ航海ヲ妨ケラレタルトキハ既ニ航海シタル路程ニ應スル運送貨ノミテ支拂フ義務アリ但船長カ契約上ノ旅客ノ權利ヲ害スルコト無ク他ノ同様ナル船便ヲ以テ航海ヲ途クルコトヲ申入レタルトキハ此限ニ在ラス海上災害其他ノ災害ノ爲メニ死亡シタル旅客ノ相続人ハ運送貨ヲ支拂フコトヲ要セス然レトモ既ニ支拂ヒタル運送貨ノ償還ヲ請求スルコトヲ得ス

第九百二十四條 原因ノ如何ヲ問ハス船舶カ發航ヲ遲延シタルトキハ旅客ハ無代價ノ止宿若シ運送貨ニ賄ヲ包含スルトキハ船中ニ於ケル賄ヲモ請求スルコトヲ得然レトモ其遲延ノ甚シキトキハ旅客ハ契約ヲ解除シテ既ニ支拂ヒタル運送貨ノ償還ヲ請求スルコトヲ得但其遲延カ船長ノ過失ニ因ルトキハ尙ホ損害賠償ヲ請求スルコトヲ得

○編法

前項ノ規定ハ船海中立寄港ニ於テ生シタル同一ノ場合ニモ之ヲ適用ス然レトモ運送貨ノ積込ハ未タ航海セサル路程ニ應シテノミ之ヲ請求スルコトヲ得

第九百二十五條 前條ノ場合ニ於テ船長カ契約上ノ旅客ノ權利ヲ害スルコト無ク他ノ同様ナル船便ヲ以テ航海ヲ遂グルコトヲ申入レタルトキハ旅客ハ契約ヲ解除スルコトヲ得ス

第九百二十六條 船長ハ旅客ノ安全、健康ニ注意シ必妥ノ食物、藥劑及ヒ救助具ヲ供用ニ耐フル景狀ニ

テ船中ニ備フルコトヲ要ス若シ災害ノ生シタルトキハ船長ハ第一ニ旅客ヲ救助スル義務アリ且如何ナル情况アルモ此救助ヲ實行シタル後ニ非サレハ船中ニ在ルコトヲ得ス

船中ニ於テ死亡シタル旅客ノ埋葬ハ相續人ノ費用若シ已ムテ得ザンハ船舶ノ費用ヲ以テ慣習ニ從ヒ船長之ヲ爲ス義務アリ

第九百二十七條 旅客カ船中ニ積入ルルコトヲ得ル行李及ヒ旅用具ノ運送ニ付テハ反對ノ契約アルニ非サレハ旅客運送貨ノ外特別ノ報酬ヲ支拂フコトヲ要セス

第九百二十八條 船中ニ於テ死亡シタル旅客ノ行李及ヒ旅用具ニシテ船中ニ在ルモノハ船長ニ於テ其相續人ノ爲メ適當ノ方法ヲ以テ之ヲ取扱フ可シ

第九百二十九條 本章第一節第三節及ヒ第一編第八章第八節ノ原則ハ第五百二十三條前段ノ規定ヲ除ク外本節ノ旅客運送ニモ之ヲ適用ス

第六章 海損

第九百三十條 共同海損ハ船舶及ヒ積荷ヲ共同ノ危險ヨリ救助センカ爲メ故サラニ直接又ハ間接ニ船舶又ハ積荷ニ加ヘタル非常ノ喪失、損害及ヒ同一ノ旨趣ニテ支出シタル非常ノ費用タリ殊ニ左ニ掲タルモノハ共同海損ニ屬ス

第一 船舶及ヒ積荷ニ係ル危險ヲ避ケ又ハ其既ニ被フリタル危險ノ有害ナル結果ヲ避ケンカ爲メニスル避難港ヘノ入航

損害

第二 船舶ヲ輕クセンカ爲メニスル積荷ノ撲棄又ハ陸揚及ヒ此ニ因リテ船舶又ハ積荷ニ加ヘタル損害

第三 沈没又ハ擄奪ヲ避ケンカ爲メニスル任意ノ坐礁、膠沙

第四 船舶又ハ積荷ノ積戻ノ費用及ヒ人質ニ取ラレタル者アルトキハ其積戻ノ費用

第五 第八百七十二條ニ從ヒテ共同海損ヲ償フ爲メニ借入レタル金額ノ利息若クハ冒險料又ハ賣却シタル積荷ノ損失其他共同海損ノ調査及ヒ計算ノ費用

第九百三十一條 共同海損ノ成分ヲ行フニハ船長ハ成ル可ク役員ト評議ヲ爲シ且其評議ノ結果ヲ航海日誌ニ記載ス可シ

第九百三十二條 船舶及ヒ積荷ノ全部又ハ一分ヲ救助スルコトヲ得タルトキハ積荷ト船舶及ヒ運送貨ノ半分トカ到達港其他航海ノ終極地ニ於ケル其價額ノ平等ナル割合ヲ以テ共同海損ヲ共擔ス

第九百三十三條 共同海損ノ場合カ當事者ノ一方ノ過失ニ因リテ生シタルトキハ其過失ノ責任ハ共擔ノ爲メニ消滅セス

第九百三十四條 共同海損ノ確定及ヒ割賦ハ到達港其他航海ノ終極地ニ於テ鑑定人ノ之ヲ爲ス可シ鑑定人ノ選定ニ付キ爭アルトキハ官ヨリ之ヲ命ス

第九百三十五條 船舶ノ武器、食料、乗組員ノ給料、所持品及ヒ旅客ノ旅荷物ハ共同海損ヲ共擔セス然レトモ其喪失又ハ損害ノ場合ニ在テハ他ノ共擔義務アル物ヨリ其賠償ヲ受ク

第九百三十六條 喪失、損害及ヒ共擔額ノ計算ハ棄却シタル物及ヒ救助シタル物ノ實價ニ從ヒテ之ヲ

○商法

為ス然レトモ棄却シタル物ニ付テハ其實價カ船荷証券ニ記載シタル價額ヨリ高價ナリシトキト雖モ其記載ノ價額ノミヲ賠償ス

船荷証券其他ノ明告書ナクシテ積込ミタル貨物及ヒ甲板上ニ積込ミタル貨物ニ付テハ賠償ヲ為スコト無シ但甲板上下積込ミタル貨物ニ付テハ沿岸小航海ノ船舶ニ非サルトキニ限ル
前項ノ場合ニ於テ救助シタル貨物ハ共擔義務ヲ免カルコトヲ得ス

第九百三十七條 救助セラレタル船舶又ハ積荷カ其後喪失シ若クハ毀損シタルトキ又ハ海損若クハ救助ニ係ル債權ノ為メ責ヲ負ヒタルトキ共擔義務ノ全ク消滅セサルニ於テハ其共擔義務ノ割合ハ初ノ海損ニ對シテ變更ヲ生スルコト無シ然レトモ其共擔義務ハ後ニ生シタル喪失若クハ毀損ヲ扣除シ又ハ海損若クハ救助ニ係ル債權ヲ扣除シタル價額ニ從ヒテ之ヲ定ム

第九百三十八條 棄却シタル貨物ハ其後ニ生シタル海損ノ場合ニ在テハ共擔義務ヲ負擔セス又船舶ニ對スル積荷ノ共擔義務ハ船舶カ後ニ喪失シ又ハ使用ニ耐ヘサルニ至リタルトキハ消滅ス

第九百三十九條 棄却シタル貨物カ海損割賦ノ後所有者ニ返リタルトキハ其所有者ハ救助ノ費用ト棄却ニ因リテ生シタル損害ノ額トヲ扣除シテ既ニ受取リタル割賦金ヲ當事者ニ償還スル義務アリ

第九百四十條 單獨海損ハ任意ニ非スシテ生シ又ハ船舶若クハ積荷ノミニ生シタル喪失、損害及ヒ費用タリ此海損ハ各所有者各別ニ之ヲ負擔スルコトヲ要ス

第九百四十一條 水先案内料、拖船料、避水入費、諸稅、手数料又ハ極、帆若クハ機關ノ過度ナル使用ニ因リテ生シタル船舶ノ毀損ノ如キ航海ノ通常及ヒ臨時ノ費用若クハ損害ハ船舶ノミノ責ニ歸ス但反對ノ慣習アルモノ此限ニ在ラス

第九百四十二條 衝突、破裂其他ノ事由ニ因リテ船舶及ヒ積荷ニ生シタル損害ニ付テハ自己ノ過失ニ

因リテ其損害ヲ惹起シタル者責任ヲ負フ若シ其災害カ事變又ハ當事者雙方ノ過失ニ因リテ生シタルトキハ各當事者ハ已レニ受ケタル損害ヲ負擔ス

然レトモ當事者雙方ノ過失相均シカラサルトキ又ハ其災害ノ事由ヲ明カニ檢知スルコトヲ得サルトキハ損害ノ割賦ハ公平ナル酌量ニ從ヒテ之ヲ為ス

第九百四十三條 海難ニ於テ乗組員ノ船舶ヲ退去シ若シクハ拋棄シタルトキ其船舶又ハ積荷ノ全部若クハ一分ヲ救助シタル者又ハ救援若クハ救助ノ際乗組員ニ助力ヲ為シテ其功ヲ致シタル者ハ救助費又ハ助力費ヲ請求スル權利アリ其貨額ハ危險ノ度、費用、時間及ヒ救助立ニ助力ヲ為ス危險ト困難トヲ斟酌シテ之ヲ定ム然レトモ其貨額ハ救助シタル物ノ價額ノ三分之一ヲ超エサルヲ通例トシ如何ナル場合ト雖モ半額ヲ超ユルコトヲ得ス

第九百四十四條 海損ノ為メ保險者ニ對スル請求權ハ共同海損ノ場合ニ在テハ損害額ノ船舶及ヒ積荷ノ被保險價額合計高ノ百分一以上ナルトキ單獨海損ノ場合ニ在テハ毀損シタル物ノ被保險價額ノ百分一以上ナルトキニ非サレハ成立セス

第九百四十五條 保險契約ニ海損ノ責ニ任セラル旨ノ條款アルトキハ保險者ハ總テ海損ニ付テノ責ヲ免カル但委乘ノ要件ノ存在スルトキハ此限ニ在ラス此場合ニ於テハ被保險者ハ委乘スルト海損請求權ヲ主張スルトノ一ヲ擇フ權利アリ

第七章 冒險貸借

第九百四十六條 冒險貸借ハ船長カ船籍港外ニ在テ船舶又ハ積荷ノ已ムテ得サル需用ノ為メ債權者ニ冒險料ヲ支拂フ約束ニテ航海中冒險抵償物ニ付テノ海上危險ヲ引受ケシムル條件ヲ以テ取結ノ貸借契約タリ此契約ヲ取結ノニハ第八百七十二條ノ手續ニ依ルコトヲ要ス

◎商法

認可書及び冒険貸借証券ニハ冒険貸借ノ事實、目的、船名、航路、冒険抵當物及其價額ヲ明記スルコトヲ要ス

冒険貸借ノ金額カ冒険抵當物ノ價額ニ超ニルトキハ債權者ハ其超過額若シ債務者ニ詐欺ノ意思アル場合ニ在テハ全金額ニ利息ヲ附シテ之ヲ取戻スコトヲ得
期望ノ利益ハ之ヲ積荷ノ價額ニ算入スルコトヲ得ス

第九百四十七條 船舶(附屬物ヲ包含ス)運送貨及ヒ積荷ハ之ヲ總括シ又ハ分別シテ冒険抵當ト爲スコトヲ得然レトモ積荷ノミハ其積用ノ爲メニスルニ非サレハ之ヲ冒険抵當ト爲スコトヲ得ス
船舶ノ冒険抵當ニハ明示ナキモ船舶ノ附屬物及ヒ航海ノ終ニ於テ得ヘキ運送貨ヲ包含ス

第九百四十八條 同一ノ物ヲ相異ナル需用ノ爲メニ數回冒険抵當ト爲シタルトキハ後ノ債權ハ前ノ債權ニ先ダツモノトス

第九百四十九條 冒険貸借証券ハ求ニ因リテ二通以上ヲ交付シ又指圖式ニテ之ヲ發スルコトヲ得指圖式ニテ發シタル場合ニ在テハ裏書ヲ以テ轉付スルコトヲ得然レトモ裏書讓渡人ハ元金ノ支拂ニ於テノミ責ヲ負ヒ冒険料ノ支拂ニ付テハ明約アルニ非サレハ其責ヲ負ハス

第九百五十條 冒険貸借金額及ヒ冒険料ハ別段ノ期間ヲ約定シタルニ非サレハ船舶ノ投錨後八日內積荷ニ在テハ其陸揚後八日內ニ之ヲ辨償スルコトヲ要ス若シ此期間ニ辨償ヲ爲ササルトキハ債權者ハ冒険抵當物ニ對シテ質權ヲ行フコトヲ得

總テノ冒険抵當物ハ其債權者ニ對シテ運荷ノ責任ヲ負フ
第九百五十一條 航海ノ變更、他ノ船舶ニ貨物ノ積換其他冒険ノ變更ハ避ク可カラサル必要ニ出テタルニ非サレハ債權者ヲシテ海難ニ付テノ責ヲ免カレシム

第九百五十二條 冒険貸借債務ノ辨償ハ冒険抵當物ノ全部カ航海中海上危險ノ爲メニ喪失シタルトキハ之ヲ求ムルコトヲ得ス若シ毀損又ハ一分ノ喪失ノ場合ニ在テハ其殘餘ノ價額ニ限り之ヲ求ムルコトヲ得但海損及ヒ救助ノ費用ハ之ヲ扣除ス
前項ノ場合ニ在テハ海損ニ付テノ損害賠償ハ債權者ノ利益ニ歸ス

第八章 保險

第一節 保險契約ノ取結

第九百五十三條 總テ航海ノ危險ニ罹ル可キ適法ナル財産上ノ利益ハ航海ノ全部又ハ一分ノ爲メ平時ト戰時トヲ問ハス航海前又ハ航海中ニ之ヲ保險ニ付スルコトヲ得
殊ニ運送(附屬物ヲ包含ス)貨物運送貨、旅客運送貨、運送貨物、其賣却利益、仲買人手数料、仲立人手数料、冒険貸借債權、海損債權其他船舶債權者ノ債權及ヒ保險者自身ノ利益ハ之ヲ總括シ又ハ分別シテ保險ニ付スルコトヲ得

船舶乗組員ノ給料及ヒ報酬ノ保險ハ無効トス

第九百五十四條 船舶ノ被保險價額ハ危險ノ始マル時及ヒ地ニ於テ船舶ノ有スル價額トス
第九百五十五條 船舶ノ危險ハ積荷又ハ底荷ノ積入ノ始マル時ニ始マリ積卸ノ終リタル時又ハ不當ノ運延ナクシテ其終リ得タル可キ時ニ終ル但別段ノ契約アルトキハ此限ニ在ラス

第九百五十六條 冒険貸借債權及ヒ海損債權ハ冒険抵當物又ハ共擔義務ヲ負フ物ノ價額ヲ限トシテ保險ニ付スルコトヲ得

第九百五十七條 保險契約取結ノ後戰爭起リ其他總テ國ノ處分ニ出ツル危險ニシタルトキハ當事者ハ

契約ヲ解除スル權利ヲ有ス但保險料ノ相當ナル増加ヲ豫定シタルトキハ此限ニ在ラス

○商法

既ニ支拂ヒタル保険料ハ契約解除ノ場合ニ在テハ之ヲ償還スルコトヲ要ス

第二節 保險者及ヒ被保險者ノ權利義務

第九百五十八條 被保險者ハ危險ノ始マル前ニ航海ヲ止メタルトキハ被保險額ノ二百分一ノ損害賠償ヲ支拂ヒテ契約ヲ解除スルコトヲ得

第九百五十九條 保險者ハ海上保險ノ發生ニ因リ殊ニ暴風雨、破船、坐礁、膠沙、流水、衝突、投荷、火災、破裂、盜難、劫掠ニ因リ又ハ航海、線路若クハ船舶ノ已ムヲ得サルニ出テタル變更ニ因リ又ハ乗組員ノ不正若クハ過失其他ノ事由ニ因リテ生シタル船ノ喪失及ヒ損害ヲ負擔ス但契約ヲ以テ取除テ設ケタルモノハ此限ニ在ラス

保險者ハ明約アルニ非サレハ戰爭其他總テ國ノ處分ニ出ツル危險殊ニ掠奪、官職、報復、封港、鎖港、差押及ヒ此類ノ事由ニ因リテ生シタル喪失及ヒ損害ヲ負擔セス

第九百六十條 保險者ハ水先案内料、挽船料、艀船又ハ積荷ニ付キ支拂フ可キ手数料、關稅其他ノ諸稅、年數、腐朽又ハ蠶蝕ニ因リテ生シタル損害、通常ノ使用ニ因リテ生シタル損耗、艀長又ハ海員ノ行爲ニ付キ艀船所有者ノ負擔スル責任、航海不耐用又ハ艀裝若クハ乗組員ノ不十分又ハ成規上ノ諸類ノ欠缺ニ因リテ生シタル損害ヲ負擔セス

第九百六十一條 損害ヲ賠償ス可キ保險者ノ義務ハ被保險者カ其損害ニ付キ艀長其他ノ人ニ對シテ賠償請求ノ權利ヲ有スルカ爲メニ之ヲ免カルルコトヲ得ス

第九百六十二條 保險料ハ契約上ノ航海期間ヲ延長シタルトキハ割合ニ應ジテ之ヲ増スコトヲ要ス然レトモ其期間ヲ短縮スル場合ニ在テハ之ヲ減スルコトヲ得ス航海ヲ短縮スル場合モ亦同シ

第九百六十三條 旅客運送貨ノ保險ハ航海ノ延長、旅客ノ賤換、避難港ニ於ケル旅客ノ糞給、他船ヲ以

テスル旅客ノ運送、食料ノ喪失若クハ滅損其他此類ノ海上災害ニ因リテ生シタル旅客運送貨財額ノ賠償ヲ請求スル權利ヲ被保險者ニ與フルモノトス

第九百六十四條 貨物運送貨又ハ旅客運送貨ノ通常額ヲ増加シテ運送貨物又ハ旅荷物ノ危險ヲ引受クル者アルトキハ保險ニ關スル原則ヲ之ニ適用ス

第三節 委乘

第九百六十五條 委乘ハ全被保險額ノ支拂ヲ受ケテ保險者ニ被保險物ヲ委付スルニ在リ 委乘ハ左ノ場合ニ於テ之ヲ申込ムコトヲ得

第一 艀泊カ沈没シ破碎シ又ハ踪跡ヲ失ヒ又ハ使用ニ耐ヘサルトキ

第二 艀船ヲ掠奪セラレ又ハ國ノ處分ニ因リテ抑留セラレタルトキ

第三 喪失又ハ毀損カ價額ノ四分三ヲ超エタルトキ

委乘ハ一分ノミ又ハ條件附ニテ之ヲ爲スコトヲ得又之ヲ取消スコトヲ得ス 第九百六十六條 艀船カ到達港ニ達セス且發航ノ時又ハ其艀船ニ付キ最後ノ通信アリタル時ヨリ一年ヲ經過シタルトキ又沿岸航海ニ付テハ六個月ヲ經過シタルトキハ其艀船ハ踪跡ヲ失ヒタルモノト看做ス

有期ノ保險ノ場合ニ在テハ前項ノ期間満了後ハ其艀船ハ保險期間ニ喪失シタルモノト推定ス

第九百六十七條 坐礁、膠沙ニ罹リタル船舶ハ之ヲ引卸シ修繕ヲ加ヘテ到達港マテ航海ヲ繼續セシムルコトヲ得ヘキトキ保險者カ此カ爲メニ必要ナル費用ノ前貸ヲ爲スニ於テハ使用ニ耐ヘサルモノトシテ委乘スルコトヲ得然レトモ被保險者ハ此場合ニ於テハ坐礁、膠沙ノ爲メニ生シタル費用及ヒ海損ノ爲メノ請求權ヲ保有ス

○商法

第九百六十八條 使用ニ耐ヘサル船舶ノ積荷ハ船長カ他ノ船舶ヲ以テ之ヲ到達港ニ送達スル能ハサル

トキニ限り委乘スルコトヲ得若シ船長カ其積荷ヲ送達スルコトヲ得タルトキハ保險者ノ總テノ海損
及ヒ運送貨ノ増額ト積荷ノ救助、積換、倉入其他ノ事由ニ因リテ生シタル總テノ費用トヲ負擔ス

第九百六十九條 被保險者ハ災害ノ通知ヲ得タル後又ハ第九百六十六條ニ定メタル期間ノ満了後三日
内ニ委乘ノ理由タル事實ヲ保險者ニ通知シ且六个月内ニ其委乘ヲ申込ム義務アリ

前項ノ期間ヲ怠リタルトキハ被保險者ハ保險契約ヨリ生スル通常ノ請求權ノミヲ主張スルコトヲ得

第九百七十條 保險者ハ別段ノ契約アルニ非サレハ委乘ノ申込ヲ受ケタル後三個月内ニ被保險額ヲ拂
渡スコトヲ要ス然レトモ委乘ノ辯明ニ供スル証書ノ交付ヲ受ケス且總テ委乘シタル物ニ係ル他ノ保
險、冒險貸借、登記ヲ經タル債權其他ノ債權ノ通知ヲ受ケサル以前ニ拂渡ヲ爲スコトヲ要セス

右ニ掲ケタル証書ノ旨趣ニ對シテハ反對證據ヲ舉グルコトヲ得

第九百七十一條 被保險者ハ詐欺ノ委乘申込ヲ爲シタルトキハ其上保險ノ權利ヲ失ヒ且委乘シタル物
ニ係ル債權ヲ自ラ支拂フコトヲ要ス

第九百七十二條 委乘シタル物ニ付テハ被保險者ノ權利ハ其委乘ノ承諾又ハ有効ナリト判決ニ依リテ
保險者ニ移ル

船舶ノ委乘ニハ救助セラレタル運送貨物ノ運送貨全額ヲ包含ス但其運送貨ノ負擔スル總テノ義務ハ
之ヲ扣除ス

第九百七十三條 被保險者ハ委乘申込ノ後ト雖モ被保險物ヲ救助シ又ハ取戻ス爲メ及ヒ一層大ナル損
害ヲ避クル爲メ成ル可ク注意ヲ爲ス義務アリ又右ノ目的ノ爲メ支出シタル費用ハ救助セラレタル物
ノ價額ニ至ルマテ保險者之ヲ負擔スルコトヲ要ス

第九百七十四條 掠奪セラレ又ハ國ノ處分ニ因リテ抑留セラレタル場合ニ在テハ被保險者ハ此事實ヲ

保險者ニ通知シタル後六個月内ニ判決又ハ沒收ノ旨渡ナキトキハ始メテ委乘ヲ申込ムコトヲ得掠奪
ノ場合ニ在テハ被保險者ハ已ムテ得ザルトキニ限り豫メ通知ヲ爲サス且保險者ノ委任ナシト雖モ贖
戻ヲ爲スコトヲ得然レトモ保險者ハ其贖戻ヲ自己ノ計算ニテ引受クルト否トヲ選擇スル權利ヲ有ス

第九百七十五條 一旦申込ミタル委乘ノ効力ハ後日ニ至リ船舶ノ救助又ハ歸航ニ因リテ變スルコト無
シ

第九章 時効

第九百七十六條 船舶債權者ノ債權及ヒ冒險貸借、海損並ニ救助ニ因リテ生シタル債權ハ船舶所有者、
船長又ハ海員ノ一身ニ對スル請求權ナルトキト雖モ之ヲ主張スルコトヲ得ル日ヨリ起算シ一十年ヲ
以テ時効ニ權ル

委乘ニ於テノ取極ハ第九百六十九條ニ掲ケタル申込期間後一ヶ月ノ満了ヲ以テ消滅ス

第九百七十七條 喪失又ハ毀損ニ付キ船長及ヒ保險者ニ對スル請求權ハ留保ナク運送貨物ヲ受取リテ
其運送貨ヲ支拂タル時消滅ス又海損又ハ救助ニ因リテ生シタル債權ハ留保ナク運送貨物ヲ引渡シテ
其運送貨ヲ受取リタル時消滅ス

有効ニ留保ヲ爲スニハ運送貨物ヲ受取リ又ハ引渡シタル後二十四時内ニ之ヲ爲スコトヲ要ス

第三編 破産

第一章 破産宣告

第九百七十八條 商ヲ爲スニ當リ支拂ヲ停止スル者ハ自己若クハ債權者ノ申立ニ因リ又ハ職權ニ依リ
裁判所ノ決定ヲ以テ破産者トシテ宣告セラル但此決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

○商法

前項ノ決定ハ口頭辯論ヲ要セスシテ之ヲ爲スコトヲ得

第九百七十九條 支拂停止ハ其停止ヲ爲シタル本人ヨリ又商會社ニ在テハ業務擔當ノ任アル社員又ハ取締役又ハ清算人ヨリ支拂停止ノ日ヲ算入シテ五日内ニ其營業所又ハ住所ノ裁判所ニ出頭シテ又ハ口述ヲ圖畫ニ筆記セシメテ之ヲ届出ツ可シ此届出ニハ支拂停止ノ事由ヲ明示シ及ヒ貸借對照表並ニ商業帳簿ヲ添フルコトヲ要ス
貸借對照表ニハ左ノ諸件ヲ包含ス

第一 總テノ動産、不動産其他債權ノ列果及ヒ價額

第二 總テノ債務

第三 利益及ヒ損失ノ概要

第四 毎月ノ一身上ノ費用及ヒ家事費用ノ支出額

第九百八十條 破産決定書ニハ左ノ諸件ヲ包含ス

第一 支拂停止ノ時期

第二 破産主任官及ヒ一人又ハ二人以上ノ破産管財人ノ選定

第三 破産財團ノ保全ニ必要ナル處分ニ付テノ命令

第四 破産者ノ債務者又ハ財團ニ屬スル物ノ占有者ニ對スル拂渡差押ノ命令

第五 破産者ノ總債權者ニ對シ其請求權ヲ短クトモ三個月長クトモ六個月ノ期間ニ破産主任官ニ届出ツ可キ旨ノ催告

第六 調査會ノ期日及ヒ債權者集會ノ期日ノ指定

破産決定書ハ之ヲ檢事ニ送致ス可シ

第九百八十一條

破産宣告ハ即時ニ裁判所ノ揭示場並ニ破産者ノ營業場ニ貼附シ及ヒ其地ノ新聞紙ニ載セテ之ヲ公告スルコトヲ要ス其宣告ハ假執行ヲ爲スコトヲ得

第九百八十二條

破産ノ財産ヲ以テ破産手續ノ費用ヲ償フニ足ラサルトキハ前條ノ手續ヲ除ク外其後ノ手續ヲ停止ス其手續ノ停止ハ之ヲ公告スルコトヲ要ス
然レトモ破産手續ノ費用ヲ償フニ足ル破産者ノ財産アルコトヲ證明スルトキハ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ即時其手續ヲ再施ス

破産手續ノ停止ハ其繼續スル間ハ第九百四十九條ニ掲ケタル效力ヲ有ス

第九百八十三條

破産主任官ハ總テノ破産手續ヲ指揮シ及ヒ監督スルコトヲ要ス其命令ハ假執行ヲ爲スコトヲ得然レトモ此命令ニ對シテハ破産裁判所ニ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第九百八十四條

檢事ハ職權ヲ以テ破産者ノ罰セラル可キ所爲ノ有無ヲ搜查シ且此カ爲メ取引帳簿其他ノ書類ノ展閱ヲ求ムルコトヲ得

第二章 破産ノ效力

第九百八十五條

破産宣告ニ依リ破産者ハ破産手續ノ繼續中自己ノ財産ヲ占有シ管理シ及ヒ處分スル權利ヲ失フ

破産宣告ノ日ヨリ以後ハ破産者ノ爲シタル支拂其他總テノ權利行爲及ヒ破産者ニ爲シタル支拂ハ當然無効トス

破産者ノ動産、不動産ニ關スル所及ヒ執行ハ特リ管財人ヨリ又ハ管財人ニ對シテ之ヲ起シ又ハ繼續スルコトヲ得

第九百八十六條

破産者ノ營業ノ用ニ供スル動産ニ對シテ不動産貸貸ノ爲メニスル強制執行ハ三十日
○商法

間之ヲ猶豫ス但貸貸人カ其貨物ヲ取戻ス權利ヲ有スルトキハ此限ニ在ラス

第九百八十七條 各債權者ハ優先權ノ存スルニ非サレハ破産處分中破産者ノ財産ニ對シテ強制執行ヲ爲スコトヲ得ス

第九百八十八條 辨濟期限ノ未タ至ラサル破産者ノ債務ハ破産宣告ニ依リテ辨濟期限ニ至リタルモノトス

引替手形ノ引受人又ハ引受ナキ爲替手形ノ振出人又ハ約束手形ノ振出人カ破産宣告ヲ受ケタルトキハ其償還義務ニ付テモ前項ノ規定ヲ適用ス

第九百八十九條 財團ニ對シテハ破産宣告ノ日ヨリ利息ヲ生スルコトヲ止ム但抵當權、質權其他ノ優先權ヲ以テ擔保セラレタル債權ハ其擔保物ノ賣拂代金ニ備ツルマテテ限トシテ利息ヲ生スルコトヲ得

第九百九十條 支拂停止後又ハ支拂停止前十日内ニ破産者カ其財産中ヨリ無償ノ利益ヲ或人ニ與フル權利行爲殊ニ贈與、無償ニテ若クハ不相當ノ報償ヲ以テ義務ヲ負擔スル契約、期限ニ至ラサル債務ノ支拂、期限ニ至リタル債務ノ變體支拂及ヒ從來負擔シタル債務ノ爲メ新ニ供スル擔保ハ財團ニ對シテハ當然無効トス

第九百九十一條 前條ニ掲ケタルモノノ外債務者カ支拂停止後破産宣告前ニ財團ノ損害ニ於テ爲シタル總テノ支拂及ヒ權利行爲ハ相手方カ支拂停止ヲ知りタルトキニ限り財團ノ計算ノ爲メ之ニ對シテ異議ヲ述フルコトヲ得

然レトモ手形ヲ支拂ヒタル場合ニ於テハ爲替手形ヲ提出シ又ハ提出サシムル際支拂停止ヲ知りタル振出人又ハ振出委託人ヨリ又約束手形ニ在テハ裏書讓渡ノ際支拂停止ヲ知りタル第一ノ裏書讓渡人ヨリ其支拂金額ヲ償還スルコトヲ要ス

第九百九十二條 有効ニ取得タル抵當權其他合式ノ登記ニ因リテ法律上効力ヲ有ス可キ權利ハ支拂停止後ニ在テハ其取得ノ時ヨリ十五日ヲ過キサルトキニ限り破産宣告ノ日マテ登記ヲ爲スコトヲ得

第九百九十三條 破産宣告ノ時ニ破産者及ヒ其相手方ノ未タ履行セヌ又ハ履行ヲ終ラサル債務契約ハ孰レノ方ヨリモ無賠償ニテ其解約ヲ申入ルルコトヲ得
貸借契約又ハ雇傭契約ニ在テハ解約申入ノ期間ニ付キ協議課ハサルトキハ法律上又ハ慣習上ノ豫告期間ヲ遵守ス可シ

第九百九十四條 契約者ハ一方ノ義務不履行ノ爲メ他ノ一方ニ於テ契約ヲ解除スル權利又ハ既ニ給付シタル物ヲ取戻ス權利ハ財團ニ對シテ之ヲ行フコトヲ得ス

第九百九十五條 相殺ノ權利アル債權者ハ期限ニ至ラサル債權又ハ金額未定ノ債權ト雖モ財團ニ對シテ其効用ヲ致サシムルコトヲ得
債權カ支拂停止後ニ生シ又ハ取得シタルモノナルトキハ支拂停止ヲ知りタル場合ニ限り相殺ヲ許サス

第九百九十六條 債務者カ債權者ニ損害ヲ加フル目的ヲ以テ爲シタル權利行爲ハ相手方カ情ヲ知りタルトキニ限り其日附ノ如何ヲ問ハス之ニ對シテ異議ヲ述フルコトヲ得

第三章 別除權

第九百九十七條 債務者ノ動産又ハ不動産ニ對シテ抵當權、質權其他ノ優先權ヲ有スル債權ハ財團ヨリ先ツ辨償ヲ受ケタルニ非サレハ其擔保物ノ賣拂代金ヨリ費用、利息及ヒ元金ノ支拂ヲ受クル爲メ別除ノ辨償ヲ請求スルコトヲ得若シ其實拂代金ノ剩餘アルトキハ買主之ヲ財團ニ拂込ム可シ
第九百九十八條 優先權及ヒ其順序ハ民法及ヒ特別ノ法律ニ依リテ定マル

◎商法

第九百九十九條 優先權ヲ有スル者其擔保物ノ賣拂代金ヨリ完全ナル償價ヲ受ケサルトキハ其未済ノ

債權ハ他ノ債權者ト平等ナル割合ナリテ財團ニ對シテ之ヲ主張スルコトヲ得

第一千條 債權者カ其支拂停止後ニ遺產ヲ取得シタルトキハ遺產債權者及ヒ受遺者ハ遺產トシテ仍ホ現
存スル遺產物ヨリ又ハ未タ債權者ニ支拂ハレサル遺產ニ屬スル金錢ヨリ別除ノ償價ヲ請求スルコト
ヲ得

第一千一條 破産者ノ財産ニシテ民事訴訟法ニ從ヒ強制執行ノ爲メ差押フルコトヲ得サルモノハ之ヲ財

團ニ加クルコトヲ得ス但債權者ニ優先權ノ屬スルモノニ付テハ第九百九十七條ノ規定ニ從フ

第四章 保全處分

第一千二條 裁判所ハ破産宣告ト同時ニ債務者ノ動産ノ封印及ヒ債務者ノ即時勾留若クハ監守ヲ命ス

右處分ハ破産宣告前ト雖モ若シ債務者カ逃走シ若クハ逃走セントシ又ハ其財産ヲ隱匿スルトキハ其

擔保官廳ニ於テ債權者ノ申立ニ因リテ之ヲ爲スコトヲ得

商事會社ニ在テハ連帶無限ノ責任ヲ負ヘル總社員ノ身體及ヒ財産ニ對シテ右ノ處分ヲ行フ

第一千三條 債務者カ第九百七十九條ノ規定ヲ踐行シ且別ニ勾留又ハ監守ヲ受ク可キ事由ナキトキハ其

勾留又ハ監守ヲ實施セサルコトヲ得然レトモ後日職務ヲ以テ之ヲ實施スルコトヲ妨ケス

債務者ハ裁判所ノ許可ヲ受クルニ非サレハ其住地ヲ離ルルコトヲ得ス又裁判所ハ何時ニテモ債務者

ノ引致ヲ命スルコトヲ得

第一千四條 勾留若クハ監守ノ事由最早存セサルトキハ裁判所ハ其決定ヲ以テ債務者ヲ釋放ス可シ然レ

トモ債務者ヲシテ裁判所又ハ管財人ノ呼出ニ應シ何時ニテモ出頭ス可キ爲メノ擔保ヲ供スル義務ヲ

負ハシムルコトヲ得

取上ケタル擔保ハ之ヲ財團ニ歸セシム

第一千五條 管財人カ債務者ノ財産ヲ財産目錄ニ載セ且之ヲ占有シタルトキハ直チニ其封印ヲ解ク可シ

第一千一條ニ依リ財團ニ加フルコトヲ得サル物及ヒ財團ノ爲メニスル即時ノ換價又ハ繼續利用ヲ封印

ノ爲メ妨ケラルル物ニハ封印ヲ爲ササルコトヲ得此等ノ物ハ直チニ財産目錄ニ載セ管財人ノ占有

スルコトヲ要ス

債務者ノ商業帳簿ハ即時之ヲ管財人ニ交付シ且其帳簿ノ現状ハ破産主任官ノ承認ス

特ニ高價ナル物ハ即時之ヲ管財人ニ交付シ又ハ一時之ヲ裁判所ニ引取ルコトヲ得

第一千六條 財産者ニ對シテ債務ヲ負ヒ又ハ財團ニ屬スル物ヲ占有スル者ハ其支拂又ハ交付ヲ管財人ニ

ノミ爲ス可キコトヲ拂渡差押ノ命令ヲ以テ催告セラレタルモノトス

別除權ヲ行ハント欲スル者ハ其旨ヲ管財人ニ申出ツ可シ若管財人ヨリ其物ノ評價ヲ爲サンコトヲ求

ムルトキハ之ヲ承諾スルコトヲ要ス

債權者ニ宛テタル電信ノ書狀其他ノ送達物ハ之ヲ管財人ニ交付ス可シ其管財人ハ開封ノ權ヲ有ス然

レトモ其種類カ財團ニ關係ナキトキハ管財人ヨリ債權者ニ引渡スコトヲ要ス

破産裁判所ハ此カ爲メ郵便局ノ電信局其他ノ運送取扱所ニ必要ナル命令ヲ發ス可シ

第一千七條 破産主任官ハ破産者及ヒ其家族ニ財團ヨリ給養ノ扶助料ヲ與フルコトヲ得

第五章 財團ノ管理及ヒ換價

第一千八條 各裁判所管轄區ニハ職務上義務ヲ負フ可キ破産管財人ノ名簿ヲ滿置キ破産裁判所ハ各區ノ

場合ニ於テ其名簿中ヨリ管財人ヲ選定ス

第一千九條 管財人ノ勤勞ニ對スル報酬ハ財團ヨリ第一ニ之ヲ支拂ヒ其額ハ破産裁判所之ヲ定ム

○商法

第一千條 裁判所ハ何時ニテモ管財人ヲ易ヘ又ハ他ノ管財人ヲ加フルコトヲ得

第一千一條 管財人ハ其行爲ニ付テハ代理人ト同一ノ責任ヲ負フ若シ管財人二人以上アルトキハ共同ニ非サレハ行爲ヲ爲スコトヲ得ス但破産主任官カ或ル行爲ニ付キ各箇ニ特別ノ委任ヲ與ヘタルトキハ此限ニ在ラス

第一千二條 管財人ハ破産宣告後即時ニ財團ヲ占有シ且其管理及ヒ換價ニ著手スルコトヲ要ス
管財人ハ其職務ノ爲メ破産者ノ補助ヲ求ムルコトヲ得破産主任官ハ此カ爲メ破産者ニ報酬ヲ與フルコトヲ得

第一千三條 管財人ハ破産主任官ノ監督ヲ受ケ且其指揮ニ從フ義務アリ若シ管財人ノ行爲又ハ決斷ニ對シテ罷職ヲ述フル者アルトキハ破産主任官命令ヲ以テ之ヲ決ス此命令ニ對シテハ破産裁判所ニ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第一千四條 財産目錄ハ裁判所職員又ハ其地警察官吏ノ立會ヲ以テ管財人ノ之ヲ作り若シ必要アルトキハ破産者ヲモ立會ハシム

破産者ニ属スル總テノ財産ハ財團ニ組入ル可カラサルモノト雖モ其價額ヲ明示シテ之ヲ財産目錄ニ記入スルコトヲ要ス必要ナル場合ニ在テハ其價額ハ鑑定人ヲシテ之ヲ鑑定セシム
財産目錄及ヒ之ニ關スル調書ノ認証アル際本ハ公衆ノ展閱ニ供スル爲メ裁判所ニ之ヲ備フ

檢事ハ其見込ニ因リ職權ヲ以テ財産目錄ノ作成ニ立會フコトヲ得

第一千五條 破産者ニ属セサル財産ヲ財團ヨリ取戻スコトニ係ル争訟ハ破産裁判所之ヲ裁判シ不動産ニ付テハ其所在地ヲ管轄スル裁判所之ヲ裁判ス

第一千六條 管財人ハ破産主任官ノ定メタル三十日以内ノ期間ニ破産者ヨリ差出シタル圖書及ヒ貸借

對照表ヲ調査シ若シ破産者ヨリ之ヲ差出サザリシトキハ自ラ貸借對照表ヲ作り且其報告書ニ貸借對照表ヲ添ヘテ破産主任官ニ提出ス可シ

報告書及ヒ貸借對照表ノ認証アル際本ハ公衆ノ展閱ニ供スル爲メ裁判所ニ之ヲ備フ
報告書及ヒ貸借對照表ハ之ヲ檢事ニ送致スルコトヲ要ス

第一千七條 貸方ノ借方ニ超ユルコト判然ナルトキ又ハ協諾契約ノ豫期セラルル間ハ裁判所ハ破産主任官ノ申立ニ因リ且管財人ノ意見ヲ聽キタル後管財人ヲシテ破産者ノ營業ヲ續行セシムル決定ヲ爲スコトヲ得

管財人營業ヲ續行スル場合ニ在テ財團ニ属スル物ヲ通常ノ營業外ニテ賣却セントスルニハ破産主任官ノ認可ヲ受ケ且豫メ破産者ノ意見ヲ聽クコトヲ要ス

第一千八條 不動産ハ破産主任官ノ認可ヲ受ケテ之ヲ競賣スルコトヲ要ス
動産ハ競賣スルヲ通例トスト雖モ破産主任官ノ認可ヲ受クルトキハ相對テ以テ之ヲ賣却スルコトヲ得

競賣ノ手續ハ總テ民事訴訟法ノ規定ニ依ル

第一千九條 管財人ハ財團ニ属スル破産者ノ貸方ヲ取立テ及ヒ破産者ノ權利ヲ債務者其他ノ人ニ對シテ主張シ且保全スルコトヲ要ス

管財人ハ左ニ掲グル行爲ニシテ百圓以上ノ額ニ係ルモノニ付テハ破産者ノ意見ヲ聽キ且破産主任官ノ認可ヲ受ク可シ

第一 訴訟ヲ爲スコト

第二 和解契約又ハ仲裁契約ヲ取結ノコト

○商法

- 第三 買物ヲ受戻スコト
- 第四 債權ヲ轉付スルコト
- 第五 相續又ハ遺贈ヲ拒絶スルコト
- 第六 消費借ヲ爲スコト
- 第七 不動産ヲ買入ルルコト
- 第八 權利ヲ拋棄スルコト
- 第九 總テ財團ニ新ナル義務ヲ負ハシムルコト
- 第二十條 財團ニ收入スル金錢ハ破産主任官ノ定ム可キ常用支出額ノ外遲延ナク之ヲ供託所ニ寄託スルコトヲ要ス其金錢ハ破産主任官ノ支拂命令ニ依ルニ非サレハ支出スルコトヲ得ス
- 第二十一條 管財人ハ其管財中破産者ニ對セラル可キ行為アルヲ知りタルトキハ之ヲ破産主任官ニ届出ツル義務アリ破産主任官其届出ヲ受ケタルトキハ之ヲ檢事ニ通知ス
- 第二十二條 破産主任官ハ破産ノ原由事情貸方借方竝ニ其對照表其他管理及ヒ破産手續ニ關スル事項ニ付キ破産者其商業使用人雇人其他ノ人ヲ何時ニテモ詢問スルコトヲ得

第六章 債權者

第一節 債權ノ届出及ヒ確定

第二十三條 破産者ノ總債權者ハ破産決定ノ公告ニ因リ債權届出ノ期間ニ其債權ヲ破産主任官ニ届出ツ可キ旨ノ催告ヲ受ケタルモノトス其届出ニハ各債權ノ合法ノ原因及ヒ請求金額若シ優先權アルモノハ其權利ヲ明記シ且證據書類又ハ其原本ヲ添フ可シ
他所ニ住スル債權者ハ裁判所所在地ニ代人ヲ置ク可シ

債權及ヒ代人任置ノ届出ハ書面ヲ以テ又ハ調書ニ筆記セシメテ之ヲ爲スコトヲ得書面ヲ以テスル場合ニ在テハ二通ヲ差出スコトヲ要ス
所在ノ知レタル債權者ハ右ノ外特ニ裁判所ヨリ書面ヲ以テ其債權届出ノ催告ヲ受ク然レトモ其書面

カ債權者ニ達セサルモ此カ爲メ損害賠償ノ請求ヲ爲スコトヲ得ス
第二十四條 届出ハ之ヲ受取リタルトキ直チニ順次番號ヲ付シテ二箇ノ表ニ記載ス可シ其一ニハ優先權アル債權ヲ掲ケ他ノ一ニハ通常ノ債權ヲ掲ケ此債權表ハ公衆ノ展閱ニ供スル爲メ裁判所ニ之ヲ備フル管財人ハ其使用ノ爲メ届出書及ヒ債權表ノ原本ヲ受領ス

第二十五條 調査會ハ管財人及ヒ成ル可ク破産者ノ而前ニ於テ破産主任官之ヲ開キ且其調書ヲ作ル可シ債權者ハ自身又ハ代理人ヲ以テ此會ニ参加スルコトヲ得
破産主任官ハ債權者ニ取引帳簿若クハ其抜書ノ提出ヲ命スルコトヲ得調査ノ結果ハ債權表及ヒ提出シタル債務證書ニ附記シ且各債權者又ハ其代理人ニ告知スルコトヲ要ス
調査會ハ届出期間ノ滿了後十日乃至十五日間ニテ之ヲ開クヲ通例トス

届出期間ノ滿了後ニ届出テタル債權ハ調査會ニ於テ之ヲ調査スルコトヲ得然レトモ其調査ヲ爲スコトニ付キ異議ノ申立アリタルトキ又ハ調査會ノ終リタル後債權ヲ届出テタルトキハ其債權者ノ費用ヲ以テ新ナル調査會ヲ開ク

第二十六條 債權ノ確定ハ承認又ハ裁判所ノ判決ヲ以テ之ヲ爲ス
調査會ニ於テ管財人ヨリモ又債權ノ確定シ若クハ貸借對照表ニ掲ケタル債權者ヨリモ異議ヲ申立テサルトキハ債權ハ承認ヲ得タルモノトス
管財人ノ債權ニ係ル承認又ハ異議ハ破産主任官其管財人ニ代ハリテ之ヲ爲ス

○商法

第一千二十七條 異議ヲ受ケタル各債權ハ若シ其債權者之ヲ取消ササルトキハ破産裁判所公廷ニ於テ破産主任官ノ演述ヲ聽キ成ル可ク合併シテ其判決ヲ爲スコシ其辯論及ヒ判決ハ原告、被告ノ出頭セザルトキト雖モ之ヲ爲ス但此判決ニ對シテハ故隱ヲ申立ツルコトヲ得ス

第一千二十八條 判決ハ成ル可ク債權者集會前ニ之ヲ爲スコトヲ要ス若シ之ヲ爲スコト能ハス又ハ判決ニ對シテ控訴ヲ爲シタルトキハ裁判所ハ異議ヲ受ケタル債權者ノ右集會ニ加ハルコトヲ許スコキヤ否ヤ又裁許ノ金額ニ付キ加ハルコトヲ許スコキヤ否ヤヲ決定ス

債權者ノ優先權ノミカ異議ヲ受ケタルトキハ其債權者ハ通常ノ債權者トシテ右集會ニ加ハルコトヲ得

第一千二十九條 債權者正當時期ニ届出テス又ハ債權ノ確定セサル債權者ハ以後ノ確定ニ因リテ爲スコキ財團ノ配當ニノミ加ハルコトヲ得然レトモ異議ヲ受ケテ訴訟中ニ在ル債權及ヒ届出並ニ調査ノ爲メ別段ノ期間ヲ定メラレタル在外國債權者ノ債權ニ付テハ以前ノ配當ニ於テ其債權ニ歸スル割前ナリ留存ス

第二節 特種ノ債權者

第一千三十條 主タル債務者ノ破産ニ於テ届出テタル債權ハ協議契約ノ場合ト雖モ保證人其他ノ共同義務者ニ對シ其金額ニ付キ之ヲ主張スルコトヲ得又保證人又ハ共同義務者ハ主タル債務者ノ破産ニ於テ其償還請求ヲ届出ツルコトヲ得然レトモ主タル債務者ノ爲メニスル協議契約ノ効果ニ從フ

第一千三十一條 二人以上ノ共同義務者ノ破産ニ於テ債權ノ金額ヲ届出ツルコトヲ得

各自ノ破産財團ノ間ニ於ケル償還請求權ハ之ヲ主張スルコトヲ得然レトモ債權者カ受取ル割前ノ額

カ主タルモノ及ヒ從タルモノヲ合セタル債權ノ總額ヲ超過スルトキハ其超過ハ額共同義務者中他ノ共同義務者ニ對シテ償還請求權ヲ有スル者ノ財團ニ歸ス

第一千三十二條 左ニ掲ケル債權ハ届出及ヒ確定ニ關スル規定ニ從フコトヲ要セス

第一 裁判費用、管理費用其他破産手續上ノ費用

第二 公ノ手数料及ヒ諸稅

第三 管財人カ財團ノ爲メニ負擔シタル義務ヨリ生スル債權

右債權ハ破産主任官ノ指圖ニ從ヒ通常ノ方法ヲ以テ財團ノ現額ヨリ之ヲ支拂フ

第一千三十三條 破産手續ニ加ハリタルニ因リテ債權者ニ生シタル費用ハ財團ニ對シテ之ヲ請求スルコトヲ得ス

第一千三十四條 婦ハ其夫ノ財團ニ對シテハ法律、明約又ハ疑ナキ慣例ニ依リ婦ノ特有ニ歸スル所有權ヨリ生スル債權ノミヲ主張スルコトヲ得

第三節 債權者集會

第一千三十五條 債權者集會ハ破産主任官之ヲ招集シ及ヒ之ヲ指揮ス其招集ハ會議ノ事項ヲ明示スル公告ヲ以テ之ヲ爲ス

其集會ハ管財人、債權ノ確定シタル債權者及ヒ第一千二十八條ニ依リテ参加スルコトヲ得ヘキ債權者ヨリ成立ス然レトモ優先權ノ確定シタル債權者ハ其優先權ヲ拋棄シタル限度又ハ優先權ヲ行フニ當リ不足アル可シト推定セラルル限度ニ於テノミ参加ス

債權者ハ代理人ヲ差出スコトヲ得

破産者ハ之ヲ集會ニ呼出スコトヲ得

○商法

第三十六條 決議ハ出席シタル債權者ノ過半数ヲ以テ爲スヲ通例トス其過半数ハ出席員ノ有スル債權額ノ半ヨリ多キ額ニ當ルコトヲ要ス

第三十七條 集會ニ於テハ破産主任官ハ破産手續ノ從來ノ成行ニ付テノ報告ヲ爲シ管財人ハ管財ノ處理、其結果及ヒ財團ノ現況ニ付テノ報告ヲ爲ス

集會ハ右ノ報告ニ付テ決議ヲ爲シ若シ破産主任官又ハ管財人ノ意見アリタルトキハ其意見及ヒ債權者ノ爲シタル申立又ハ破産主任官ノ認可ヲ受ケテ破産者ノ爲シタル申立ニ付テ決議ヲ爲ス可シ此等ノ決議ハ裁判所ノ認可ヲ受クルコトヲ要ス

第七章 協諾契約

第三十八條 法律上ノ義務ヲ履行シタル破産者ニシテ有罪破産ノ判決ヲ受ケス又其審問中ニ在ラサル者ハ破産主任官ノ認可ヲ受ケ第一ノ集會ニ於テ債權者ニ協諾契約ヲ提供スルコトヲ得又十分ノ理由アルトキハ以後ノ集會ニ於テ之ヲ提供スルコトヲ得然レトモ其提供ハ一回ニ限ル

第一ノ集會ハ普通ノ調査會ヨリ四週日後ニ之ヲ爲ス協諾契約ノ申立書ハ少ナクとも集會ノ二十日前ニ之ヲ裁判所ニ差出シ裁判所ハ之ヲ公衆ノ展閱ニ供シ且其旨ヲ公告ス可シ

第三十九條 協諾契約ヲ承諾スルニハ出席シタル債權者ノ過半数ノ承諾ヲ要ス其過半数ハ議決權アル總債權額ノ四分三以上ニ當ルコトヲ要ス

管財人及ヒ議決權ヲ有スル債權者又後ニ至リ債權ノ確定シタル債權者ハ協諾契約ニ對シテ十日内ニ理由ヲ附シタル異議ヲ裁判所ニ申立ツルコトヲ得

第四十條 債權者ノ承諾シタル協諾契約ハ裁判所ノ認可ヲ得テ始メテ法律上有効トス其認可又ハ棄却ニ付テノ決定ハ破産主任官ノ演述ヲ聽キ前條ノ期間満了後直ニ之ヲ爲ス此決定ニ對シテハ債權者及ヒ異議申立ノ權利アル者ヨリ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第四十一條 協諾契約ハ左ノ場合ニ於テハ之ヲ棄却ス可シ

第一 第三十八條及ヒ第三十九條ノ規定ヲ履行セサルトキ

第二 協諾契約ニ依リ或ル債權者カ其承諾ナクシテ偏頗ノ處置ヲ受ケ損害ヲ被フルトキ

第三 協諾契約カ詐欺其他不正ノ方法ヲ以テ成リタルトキ

第四 協諾契約カ公益ニ觸ルルトキ

第四十二條 協諾契約ハ破産者カ後ニ至リ有罪破産ノ判決ヲ受ケタルトキハ當然消滅シ其審問中ハ免訴又ハ無罪ノ宣告ヲ受ケルマテ之ヲ停止ス

前條第三號ニ掲ケタル理由アルトキハ協諾契約認可ノ後ト雖モ尙ホ之ニ對シテ異議ヲ申立ツルコトヲ得

第四十三條 協諾契約ノ確定シタルトキハ管財人ハ直ニ其義務ヲ罷メ且其義務ニ付キ計算ヲ爲ス可シ

破産者ハ協諾契約ニ別段ノ定ナキトキニ限り任意ノ管理及ヒ處分ノ爲メ其財産ヲ取戻スコトヲ得

協諾契約ノ履行ハ破産主任官ノ監督ヲ以テ之ヲ爲ス

第四十四條 協諾契約ハ棄却セラレ又ハ後ニ至リ消滅シ若クハ取消サルトキ又ハ不履行ノ爲メ解除セラルルトキハ破産手續ヲ再施シ直ニ其財團ノ換價及ヒ配當ヲ爲シテ終局ニ至ラシム其再施シタル手續ニハ再施マテノ間ニ債權ヲ得タル者モ参加スルコトヲ得

第八章 配當

○商法

第千四十五條 第千三十二條ニ掲ケタル債權及ヒ優先權アル債權ヲ支拂ヒタル後ニ殘レル財團ハ他ノ債權者間ニ平等ノ割合ヲ以テ之ヲ配當ス

破産者カ資本ヲ分チ數箇ノ營業ヲ爲シタル場合ニ在テハ各營業ニ對スル債權者ハ其營業ニ屬スル財團ヨリ優先權ヲ以テ償價ヲ受ク

第千四十六條 配當ハ普通ノ調査會ノ終リタル後ハ配當ニ足ル可キ財團ノ生スル毎ニ管財人ノ調製シテ破産主任官ノ認可ヲ受ケタル配當案ニ依リテ之ヲ爲ス其案ハ破産主任官之ニ署名シ公衆ノ届聞ニ供スル爲メ裁判所ニ備置キ且其旨ヲ公告ス可シ

配當案ニ對スル異議ハ其公告ノ日ヨリ起算シ十四日以内ニ之ヲ裁判所ニ申立ツルコトヲ得

第千四十七條 前條ニ掲ケタル期間ニ配當案ニ對シテ異議ヲ申立ツル者ナキトキ又ハ異議ノ若シタルルトキハ管財人ハ各債權者ヲシテ其債務證書ヲ提出セシメ之ニ毎回ノ支拂額ヲ記入シテ支拂ヲ爲ス若シ債務證書ノ提出ヲ爲スコト能ハサルトキハ破産主任官ノ許可ヲ得テ債權表ニ依リ支拂ヲ爲スコトヲ得孰レノ場合ニ於テモ債權者ハ配當案ニ受取書ヲ記スルコトヲ要ス

第千四十八條 財團ノ換價及ヒ配當ヲ全ク終リタルトキハ債權者集會ヲ開キ此集會ニ於テ管財人ハ終局ノ計算ヲ爲ス可シ此計算ノ了シタルトキハ裁判所ハ直チニ破産主任官ノ申立ニ因リテ破産手續ノ終結ヲ決定ス此決定ハ之ヲ公告スヘシ

第千四十九條 破産手續終結ノ後ハ債權ヲ受ケサル債權者ハ破産手續ニ於テ確定シタルニ因リテ得タル權利名義ニ基キ其債權ヲ債務者ニ對シテ無限ニ行フコトヲ得

第九章 有罪破産

第千五十條 破産宣告ヲ受ケタル債務者カ支拂停止又ハ破産宣告ノ前後ナ開ハス履行スル意ナキ債務

又ハ履行スル能ハサルコトヲ知リタル義務ヲ負擔シタルトキ又ハ債權者ニ損害ヲ被ラシムル意思ヲ以テ貸方財産ノ全部若クハ一部分ヲ蔽匿シ轉匿シ若クハ脱漏シ又ハ借方現物過度ニ掲ケ又ハ商業帳簿ヲ毀滅シ蔽匿シ若クハ偽造、變造シタルトキハ詐欺破産ノ刑ニ處ス

第千五十一條 破産宣告ヲ受ケタル債務者カ支拂停止又ハ破産宣告ノ前後ナ開ハス左ニ掲ケル行為ヲ爲シタルトキハ過意破産ノ刑ニ處ス

第一 一身又ハ一家ノ過分ナル費用、博奕、空取引又ハ不相應ノ射利ニ因リテ貸方財産ヲ甚シノ減少シ若クハ過分ノ債務ヲ負ヒタルトキ

第二 支拂停止ヲ延ハサンカ爲メ損失ヲ生スル取引ヲ爲シテ支拂資料ヲ調ヘタルトキ

第三 支拂停止ヲ爲シタル後支拂又ハ擔保ヲ爲シテ或ル債權者ニ利ヲ與ヘ財團ニ損害ヲ加ヘタルトキ

第四 商業帳簿ヲ秩序ナク記載シ蔽匿シ毀滅シ又ハ全ク記載セサルトキ

第五 破産者カ第三十二條(第九百七十九條又ハ第千三條第二項)ニ規定シタル義務ヲ履行セサルトキ

第千五十二條 前二條ノ罰則ハ商會社ノ業務擔當ノ任アル社員若クハ取締役及ヒ清算人ニモ之ヲ適用シ又第千五十條ノ罰則ハ破産管財人及ヒ有罪行為ヲ行フ際犯者ヲ助ケ又ハ有罪行為ヲ破産者ノ利益ノ爲メニ行ヒタル者ニモ之ヲ適用ス

第千五十三條 債權者集會ニ於ケル議決ニ關シ債權者ニ賄賂ヲ爲シタルトキハ其雙方ヲ二年以下ノ重禁錮又ハ千圓以下ノ罰金ニ處ス

第十章 破産ヨリ生スル身上ノ結果

○商法

第五十四條 破産宣告ヲ受ケタル債務者又ハ破産シタル商事會社ノ無限責任社員若クハ取締役ハ復
權ヲ得ルニ至ルマテハ取引所ニ立入ルコト仲立人ト爲リ合名會社若クハ合資會社ノ社員ト爲リ又ハ
株式會社ノ取締役ト爲ルコト清算人破産管財人若クハ商事代人ノ職ヲ執ルコト商業會議所ノ會員ト
爲ルコト其他商業上ノ榮譽職ニ就クコトヲ得ス

第五十五條 復権ヲ得ルニハ協諾契約ノ調ヒタルト否トテ問ハス破産者カ元價、利息及ヒ費用ノ全
額ヲ債權者總員ニ償シタルコト又所在ノ知レサル爲メ未タ償價ヲ受ケサル債權者ニ金額ニ償價ス
ル準備及ヒ資力アルコトヲ證明ス可シ

復権ノ申立ニハ債權者ノ受取證其他必要ナル證據物ヲ添フ可シ
然レトモ協諾契約ノ場合ニ在テハ第一項ノ證明ヲ爲スコト無クシテ取引所ニ立入ルコトヲ得又商事
會社ニ付キ協諾契約ノ調ヒタルトキハ無限責任社員若クハ取締役ハ亦其證明ヲ要セスシテ會社ヲ繼
續スルコトヲ得

第五十六條 復権ノ申立アリタルトキハ破産裁判所ハ異議アル者ヲシテ二个月ノ期間ニ異議ヲ起サ
シメンカ爲メ裁判所ノ揭示場ト取引所トニ其旨ヲ揭示シ且裁判所ノ見込ニ因リ新聞紙ヲ以テ之ヲ公
告シ又調査及ヒ捜査ヲ爲サシメンカ爲メ之ヲ檢事ニ通知ス可シ

裁判所ハ檢事ノ意見ヲ聽キタル後復権ノ申立ヲ許可スルト否トテ決定ス此決定ニ對シテハ即時抗告
ヲ爲スコトヲ得確定シタル決定ハ之ヲ公告ス
棄却セラレタル申立ハ一年ノ滿了前ニハ再ヒ之ヲ爲スコトヲ得ス

第五十七條 復権ハ債務者ノ死亡後ト雖モ之ヲ許ス
第五十八條 復権ハ詐欺破産ノ爲メニ判決ヲ受ケタル破産者又ハ重罪、輕罪ノ爲メニ剝奪公權者ク

ハ停止公權ヲ受ケテ其時間中ニ在ル破産者ニハ之ヲ許サス
過意破産ノ場合ニ在テハ復権ハ刑ノ滿期ト爲リ又ハ恩赦ヲ得タル後ニ非サレハ之ヲ許サス

第十一章 支拂猶豫

第五十九條 商ヲ爲スニ當リ自己ノ過失ナクシテ一時其支拂ヲ中止セサルコトヲ得サルニ至リタル
者ハ商事上ノ債權者ノ過半数ノ承諾ヲ得テ其營業所若クハ住所ノ裁判所ヨリ右債權者ニ對スル裁決
ニ付キ一年以内ノ支拂猶豫ヲ受クルコトヲ得

第六十條 支拂猶豫ノ申立ニハ左ノ諸件ヲ添附スルコトヲ要ス
第一 支拂中止ノ事由ノ完全ナル明示

第二 貸借對照表、財産目錄及ヒ住所ト債權額トヲ明示シタル債權者名簿

第三 債權者ニ主タルモノ及ヒ従タルモノノ完全ナル償價ヲ爲シ得ル方法、期間及ヒ此カ爲メ供
スルコトヲ得ル擔保ノ證明

右申立及ヒ添附書類ハ公衆ノ展閱ニ供スル爲メ之ヲ裁判所ニ備置キ且債權者ノ集會期日ヲ定メテ之
ト共ニ其備置キタル旨ヲ公告スルコトヲ要ス債權者ハ集會ノ爲メ各別ニ招集ヲ受ク
支拂猶豫ハ裁判所ヨリ假ニ之ヲ許可スルコトヲ得

第六十一條 集會期日ニ於テハ裁判所ヨリ任セラレタル主任判事ノ上席ヲ以テ債務者ト債權者トノ
間ニ支拂猶豫ノ申立ニ付キ辯論ヲ爲ス其中立ヲ承諾スルニハ第三十六條ニ掲ケタル過半数ヲ要ス
其辯論及ヒ議決ニ付テハ調書ヲ作ル可シ

第六十二條 裁判所ハ承諾ヲ得タル支拂猶豫ノ認否ニ付キ主任判事ノ演述ヲ聽キテ決定ヲ爲ス此決
定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

○商法

支拂猶豫ハ申立ニ因リテ前數條ノ手續ニ從ヒ一回ニ限り之ヲ延長スルコトヲ得ルモ其期間ハ一
年ヲ超ユルコトヲ得ス

第六十三條 債務者有効ナル支拂猶豫ヲ得タルトキハ猶豫期間中其以前ニ取結ヒタル商取引ヨリ生
スル債權ノ爲メニ強制執行及ヒ破産宣告ヲ受クルコト無シ但猶豫契約ノ履行及ヒ業務ノ施行ニ關シ
テハ主任判事ノ監督ヲ受ケ

債務者ノ保證人及ヒ共同義務者ノ義務ハ右猶豫ノ爲メニ變更スルコト無シ

第六十四條 支拂猶豫ノ承諾ヲ得ス若クハ裁判所之ヲ棄却シタルトキ又ハ後日ニ至リ債務者ノ詐欺
若クハ不正ノ爲メ若クハ法律上ノ條件ノ缺クルカ爲メ之ヲ廢止シタルトキ又ハ債務者ニ於テ其猶豫
契約ヲ履行セザルトキ又ハ其猶豫期間中債務者ノ財産ニ付キ他ノ債務者ヨリ強制執行ヲ爲ストキハ
直チニ債務者ニ對シテ破産手續ヲ開始ス此場合ニ於テハ支拂猶豫申立ノ日附テ以テ支拂停止ノ日ト
定ム

○商法施行條例(明治二十三年八月七日)

(法律第五十九號)

朕商法施行條例ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム此法律ハ明治二十四年一月一日ヨリ施行スヘキコトヲ命
ス

御名 御璽

第一條 商法第二十六條、第二十九條及ヒ第二百十條ニ定メタル一地域トハ各市町村ノ區域ヲ謂ヒ市
町村制ヲ行ハサル地方ニ在テハ從來ノ宿驛町村等ノ一區域ヲ謂フ
一地域内ニ二箇以上ノ區裁判所アルトキハ其内一箇所ヲ以テ登記簿ヲ取扱フ所トス其裁判所ハ司法
大臣之ヲ指定ス

第二條 會社ニ非スシテ商業ヲ營ム者ハ其商號百會社ノ文字ヲ用ユルコトヲ得ス又從來之ヲ用ユル者
ハ商法實施ノ日ヨリ三個月内ニ之ヲ改ム可シ

前項ノ規定ニ違フ者ハ地方裁判所ノ命令ヲ以テ二十圓以下ノ過料ニ處ス

第三條 商法第五十九條、第六十六條、第六十八條、第二百二十二條ノ規定ニ依リテ官廳ニ提出
ス書類及ヒ展開ニ供スル書類ハ公證人ノ認證ヲ受ケタル原本ヲ以テスルコトヲ得

公證人原本認證ノ依頼ヲ受ケタルトキハ一件ニ付キ金拾錢ノ手数料若シ認證ト共ニ認寫ノ依頼ヲ受
ケタルトキハ公證人規則第六十五條ノ原本手数料ヲ受クルコトヲ得

第四條 商法第二百二十二條ニ依リ諸書類ノ展開ヲ求ムル者アルトキハ其請求者ヨリ一人ニ付一日五
十錢以下ノ手数料ヲ受クルコトヲ得

第五條 本條例發布前ヨリ既ニ設立シタル各會社ハ商法實施ノ日ヨリ六個月内ニ商法第七十八條、第
百三十八條、第六十八條ニ準シテ登記ヲ受ケ可シ之ヲ怠リタルトキハ商法第二百五十六條ノ過料
ニ處シ且地方裁判所ノ命令ヲ以テ其營業ヲ禁止ム但其命令ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第六條 前條ノ期限内ニ登記ヲ受ケサル既設會社ハ其期限經過ノ時ヨリ第三者ニ對シテ會社タル効ヲ
失フ

第七條 商法第八十一條及ヒ第八十二條ノ規定ハ既設會社ニ之ヲ適用セス

第八條 既設會社ハ從來ノ商號ヲ續用スルコトヲ得但商法第百十三條及ヒ第百三十九條第二項ノ規定
ハ商法實施ノ日ヨリ三個月ノ後既設會社ノ商號ニモ之ヲ適用ス

既設會社ノ商號ニハ其會社ノ種類ニ從ヒ合名會社合資會社又ハ株式會社ノ文字ヲ附ス可シ

第九條 既設合名會社ハ其社員ノ數商法第七十四條ノ定員ニ超ユルモ其現社員ノ數ニ依ルコトヲ得但

○商法

定員以下ニ減シタル場合ニ於テハ更ニ増員シテ其定員ニ超ユルコトヲ得ス

第十條 既設株式會社ハ商法第百五十六條ノ免許ヲ受クルコトヲ要セス

既設株式會社ハ商法實施ノ日ヨリ六个月内ニ地方長官ヲ經由シテ定款ヲ主務省ニ提出シ其定款ノ認可ヲ受ク可シ但其定款ニ法律命令ニ反スル事ヲ掲ケタルモノハ之ヲ改正スルニ非サレハ認可スルノ限ニ在ラス

從來官許ヲ得テ設立シタル株式會社ニハ前項ノ規定ヲ適用セス但開置又ハ人民ノ相對ニ任ス等ノ指令ヲ得テ設立シタルモノハ此限ニ在ラス

本條第二項ニ依リ認可ヲ受ク可キ株式會社ニ在テハ第五條ノ登記期限ハ其認可ヲ得タル日ヨリ起算ス

右ノ認可ヲ得タル日ヨリ六个月内ニ登記ヲ受ケサレトキハ其認可ハ効力ヲ失フ

第十一條 既設株式會社ハ其株券ノ金額商法第百七十五條ノ規定ニ反スルモ其定款ノ定ニ依ルコトヲ得

第十二條 既設株式會社ハ其定款ニ於テ第一回ノ株金拂込ニ四分一以下ニ定メタルトキハ商法第百六十七條第二項ノ規定ニ反スルモ其定款ノ定ニ依ルコトヲ得

第十三條 既設株式會社ノ創業ニ付テノ義務及ヒ出費ニシテ會社ノ承認ヲ受ケタルモノハ第五條ノ登記ヲ受ケサル前ニ於テモ商法第百七十一條ノ規定ニ拘ハラサ會社ニ於テ之ヲ負擔ス

第十四條 既設株式會社ノ既ニ發行シタル株券ハ商法第百七十六條ニ反スルモノ有ルモ之ヲ改ムルコトヲ要セス

第十五條 既設株式會社ニ於テ株金金額ノ拂込前ニ發行シタル株券ハ其金額拂込ニ至ルマテハ之ヲ假

株券ト看做ス

第十六條 既設株式會社ノ株券ニシテ商法實施前ヨリ株式取引所又ハ取引所ニ於テ既ニ賣買シ來リタルモノ及ヒ既ニ債權ノ擔保ニ供シタルモノニ付テハ商法第百八十條ノ規定ヲ適用セス

第十七條 既設株式會社ノ株式ノ譲渡人ニ付テハ商法第百八十二條ノ規定ハ商法實施ノ日ヨリ二個年間之ヲ適用セス

第十八條 既設株式會社ニ於テ既ニ其定款ヲ以テ株主ノ議決權ニ制限ヲ立テタルモノハ商法第二百四條ノ規定ニ反スルモ其定款ニ從フコトヲ得

第十九條 商法第七十七條第二項ノ規定ハ既設會社ニ之ヲ適用セス

第二十條 商法及ヒ本條例ニ依リ發スル命令書ヲ送達スル場合ニ於テハ其手續ハ民事訴訟法ノ手續ニ從フ

第二十一條 商法第六十七條第二項、第八十一條、第百二十七條、第百三十一條、第百三十三條、第百五十條及ヒ第百六十一條並ニ本條例第二條及ヒ第五條ニ依リ裁判所ニ於テ命令ヲ發スルトキハ當事者ヲシテ説明ヲ爲サシムル爲メ之ヲ裁判所ニ呼出スヲ通例トス但當事者缺席スルモ命令書ハ之ヲ發スルコトヲ得

第二十二條 商法第六十七條第二項、第八十一條第百二十七條及ヒ第百六十一條並ニ本條例第二條及ヒ第五條ニ依リ命令ヲ爲ス場合ニ於テハ裁判所ハ豫メ其旨ヲ檢事ニ通知ス可シ
檢事ハ口頭又ハ書面ヲ以テ意見ヲ陳述スルコトヲ得

第二十三條 檢事ハ前條第二項ノ場合ニ於ケル命令ニ付キ其執行ノ責ニ任ス

第二十四條 商法及ヒ本條例ニ依リ即時抗告ヲ爲スコトヲ得ヘキ場合ニ於テハ其期間ハ裁判書ノ送達

○商法

ヲ受ケタル日ノ翌日又ハ裁判ノ旨渡テ受ケタル日ノ翌日ヨリ豫算シテ七日トス
第二十五條 前條ニ掲ケタルモノノ外抗告ニ關スル手續ニ付テハ民事訴訟法第四百五十五條、第四百六十條第一項第二項、第四百六十五條及ヒ第四百六十六條第一項第二項第四項ヲ除ク外總テ同法第三編第三章ノ規定ヲ準用ス

第二十六條 外國ニ於テ支拂ヲ爲ス可キ手形ニハ捺印スルコトヲ要セス

第二十七條 商法第七百九十條ニ掲ケタル裁判所役員ハ執達吏トス

第二十八條 商法第八百二十五條ニ掲ケタル十五噸以上ノ船舶中ニハ日本形船舶百五十石以上ノモノヲ包含ス

第二十九條 商法實施前ヨリ既ニ航海ノ用ニ供スル船舶ハ商法實施ノ日ヨリ一箇年內ニ商法第八百二十五條ノ手續ヲ爲ス可シ

第三十條 商法第四百九十三條及ヒ第五百十七條ニ國內水上ト稱スルハ川湖港灣ヲ謂フ

第三十一條 遞信大臣ハ其地ノ形狀ト危險ノ程度トニ應シテ適宜ニ港灣ノ區域ヲ定ムルコトヲ得

第三十二條 商法第八百六十七條及ヒ第九百六十六條ニ沿岸航海ト稱スルハ專ラ本邦海岸ニ沿フテ航行シ外國ニ至ラサルモノヲ謂フ但本邦ノ版圖ニ屬スル諸島地トノ航行ハ亦沿岸航海ニ屬ス

第三十三條 商法第九百三十六條ニ掲ケタル小沿航海ノ區域ハ從來ノ慣習ト海上危險ノ程度トヲ酌量シテ遞信大臣之ヲ定ムルコトヲ得

第三十四條 商法第八百三十六條及ヒ第九百三十四條ニ官ト稱スルハ內國ニ於テハ區裁判所外國ニ於テハ日本領事若シ領事ナキトキハ其地ノ官廳トス

第三十五條 司法大臣ハ各地方裁判所ノ意見ヲ聽キ其所轄地方ノ需用ニ應シテ破産管財人ヲ命シ地方

裁判所ハ之ニ依リ破産管財人名簿ヲ作ル可シ

第三十六條 破産管財人タルノ命ヲ受ケタル者ハ正當ノ理由アルニ非サレハ之ヲ辭スルコトヲ得ス

第三十七條 破産管財人ノ任期ハ三箇年トス但再任セラルルコトヲ得

第三十八條 名簿中ノ破産管財人破産裁判所ヨリ選定セラレタルトキハ正當ノ理由アルニ非サレハ之ヲ辭スルコトヲ得ス

第三十九條 破産管財人ハ其職務ニ著手スル前公平誠實ニ其職務ヲ執ルコトヲ誓フ可シ

第四十條 破産管財人ハ其擔任スル破産手續中任期滿ツルモ之ヲ終結スルマテ解任スルコトヲ得ス

第四十一條 破産裁判所ハ忌避其他該事件ニ不適當ナルノ理由アリテ名簿中ノ破産管財人ヲ選定ス可カラスト認ムルトキハ他ニ破産管財人ヲ選定スルコトヲ得此場合ニ於テハ直チニ其旨ヲ司法大臣ニ上申ス可シ

前項ノ破産管財人モ名簿中ノ破産管財人ト同一ノ權利及ヒ義務ヲ有ス

第四十二條 職務執行ノ不當又ハ不正ノ爲メ管財人ノ職ヲ解クトキハ破産裁判所ノ公廷ニ於テ其理由ヲ付シテ之ヲ言渡ス可シ

第四十三條 管財人ノ報酬ハ一破産手續ノ全體ニ付キ又ハ收入シタル價額ノ割合ニ應シテ之ヲ定メ財團ノ配當アル毎ニ其步割ヲ以テ之ヲ支拂フ可シ

第四十四條 第三十六條及ヒ第三十八條ノ規定ニ違フ者ハ刑法第七十九條ノ罰金ニ處ス

第四十五條 商法第一千二條ニ依リ裁判所ニ於テ債務者ヲ勾留若クハ監守セントスルトキハ其命令書ヲ檢事ニ送致シ檢事ハ其勾留ニ係ル者ハ之ヲ所屬留置場ニ送致セシメ監守ニ係ル者ハ債務者ノ住所ヲ管轄スル警察官署ニ命シ其處分ヲ爲サシム

◎商法

第四十六條 警察官廳ニ於テ債權者ノ申立ニ因リ債務者ヲ拘留若クハ監守セントスルトキハ命令書ヲ發シテ之ヲ所屬留置場ニ送致セシメ又ハ監守ノ處分ヲ爲サシム此場合ニ於テハ警察官廳ハ同時ニ事由ヲ具シテ其旨ヲ管轄地方裁判所ニ通知ス可シ

第四十七條 司獄官吏債務者ヲ受取りタルトキハ刑事被告人ヲ受取りタル手續ニ準シテ之ヲ留置場ニ入ル可シ其他債務者ノ取扱ハ總テ刑事被告人ニ異ナルコト無シ

拘留中債務者ノ食料其他ノ費用ハ商法第千三十二條ニ從ヒ 財産團ノ現額ヨリ之ヲ支拂ヒ不足アルトキハ留置場之ヲ負擔ス前條ノ場合ニ於テ債務者破産ニ至ラサルトキハ其申立人之ヲ支拂ス但申立人ハ申立ノ際右ノ費用ニ當ル金額ヲ預納ス可シ

第四十八條 監守ヲ爲ストキハ警察官吏ヲシテ債務者ノ住所ニ就キ其逃走若クハ財産ノ隠匿ヲ豫防シ且其務債者ノ外人ト而接若クハ通信スルヲ禁セシム

第四十九條 商法第千三條第二項ニ依リ債務者ヲ引致スルトキハ特ニ作りタル引致狀ヲ以テ之ヲ執行ス但其執行ハ刑事訴訟法ニ定メタル勾引狀執行ノ手續ニ準ス

第五十條 商法第千四條ニ依リ裁判所ニ於テ債務者ヲ釋放スルトキハ決定書ヲ檢事ニ送致シ其執行ヲ爲サシム

第五十一條 商法中非訟事件ニ關スル裁判所管轄ハ裁判所構成法ニ定ムルモノノ外第百五十四條、第百七十一條、第四百四十一條、第四百九十九條、第五百十四條、第五百五十六條、第九百二條ノ事件ニ付テハ區裁判所トシ其他ノ事件ニ付テハ地方裁判所トス

第五十二條 明治十七年第九號布告質屋取締條例ニ依リ管轄廳ノ免許ヲ得タル質屋營業人ニハ商法第一編第七章第九節ノ規定ヲ適用セム

第五十三條 明治六年第二百十五號布告代人規則ハ商事ニ付テハ商法實施ノ日ヨリ之ヲ適用セム
明治十年第六十六號布告利息制限法第三條及ヒ第五條ハ商事ニ付テハ商法實施ノ日ヨリ之ヲ適用セム

明治十五年第五十七號布告爲替手形約束手形條例ハ商法實施ノ日ヨリ之ヲ廢止ス
○銀行條例(明治二十三年八月廿三日)
法律第七十二號

朕銀行條例ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム此法律ハ明治二十四年一月一日ヨリ施行スヘキコトヲ命ス

御名 御璽

第一條 公ニ開キタル店舗ニ於テ營業トシテ證券ノ捌引ヲ爲シ又ハ爲替事業ヲ爲シ又ハ預貯リ及貸付ヲ併セ爲ス者ハ何等ノ名稱ヲ用ヅルニ拘ラス總テ銀行トス

第二條 銀行ノ事業ヲ營ントスル者ハ其資本金額ヲ定メ地方長官ヲ經由シテ大藏大臣ノ認可ヲ受クヘシ

第三條 銀行ハ毎半年營業ノ報告書ヲ製シ地方長官ヲ經由シテ大藏大臣ニ送付スヘシ

第四條 銀行ハ毎半年財産目錄貸借對照表ヲ製シ新聞紙其他ノ方法ヲ以テ之ヲ公告スヘシ

第五條 銀行ハ一人又ハ一會社ニ對シ資本金高ノ十分ノ一ヲ超過スル金額ヲ貸付又ハ捌引ノ爲ニ使用スルコトヲ得ス

資本金總額ノ拂込ヲ了ラサル銀行ニ於テハ一人又ハ一會社ニ對シ其拂込高ノ十分ノ一ヲ超過スル金額ヲ貸付又ハ捌引ノ爲ニ使用スルコトヲ得ス

第六條 銀行ノ營業時間ハ午前第十時ヨリ午後第四時マテトス但營業ノ都合ニ依リ之ヲ增加スルコトヲ得

○商法

第七條 銀行ノ休日ハ大祭日、祝日、日曜日及銀行營業地ニ行ハル、定例ノ休日トス但止テ得サル事故
アルトキハ地方長官ニ届出テ豫メ新聞紙其他ノ方法ヲ以テ公告シタル上休業スルコトヲ得
第八條 大蔵大臣ハ何時タリトモ地方長官又ハ其他ノ官吏ニ命シテ銀行ノ業務ノ實況及財産ノ現況ヲ
検査セシムルコトヲ得

第九條 第二條ノ規定ニ違反シ大蔵大臣ノ認可ヲ受ケスシテ銀行ノ事業ヲ營ミタル者ハ商法第二百五
十六條ノ例ニ依テ處分ス

第十條 銀行ニ於テ第三條ノ報告若ハ第四條ノ公告ヲ爲サス又其報告中若ハ公告中ニ詐偽ノ陳述ヲ爲
シ若ハ事實ヲ隱蔽シタルトキハ商法第二百六十二條ノ例ニ依テ處分ス
第八條ノ検査ヲ受ルコトヲ拒ミタルトキハ商法第二百五十八條ノ例ニ依テ處分ス

第十一條 此條例ハ日本銀行橫濱正金銀行國立銀行ニ適用セス

○貯蓄銀行條例 (明治二十三年八月廿三日)

法律第七十三號

朕貯蓄銀行條例ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

此法律ハ明治二十四年一月一日ヨリ施行スヘキコトヲ命ス

御名 御璽

第一條 複利ノ方法ヲ以テ公衆ノ爲ニ預金ノ事業ヲ營ム者ヲ貯蓄銀行トス

銀行ニ於テ新ニ一口五圓未満ノ金額ヲ定期預メ若ハ常座預リトシテ引受ルトキハ貯蓄銀行ノ業ヲ營
ム者ト爲シ此條例ニ依ラシム

第二條 資本金三萬圓以上ノ株式会社ニアラサレハ貯蓄銀行ノ業ヲ營ムコトヲ得ス

第三條 貯蓄銀行ノ取締役ハ銀行ノ義務ニ付連帶無限ノ責任ヲ負フモノトス但其責任ハ選任後一箇年
ノ満了ニ因リテ消滅ス

ノ満了ニ因リテ消滅ス

第四條 貯蓄銀行ハ貯蓄拂戻ノ保證トシテ資本金ノ半額ヨリ少カラサル金額ヲ利付國債證券ニテ備
ヘ置キ之ヲ供託所ニ預ケ入ルヘシ

第五條 貯蓄銀行ハ左ニ掲クル事項ノ外其資金ヲ運轉スルコトヲ得ス

- 第一 貸付
- 第二 證券ノ割引
- 第三 國債證券及地方債證券ノ買入

第六條 貯蓄銀行ニ於テ前條ニ依リ貸付ヲ爲スハ其期限六箇月以内ニシテ國債證券地方債證券ヲ買ト
爲シタル場合ニ限ル其割引ヲ爲スハ支拂資力ニ付疑フヘキ理由ノ存セサル者二名以上ノ寫書アル爲
替手形約束手形ニ限ルヘシ

貯蓄銀行ハ國債證券及地方債證券ノ定期買買ヲ爲スコトヲ得ス

第七條 貯蓄銀行ニ於テ其定款ヲ變更セントスルトキハ地方長官ヲ經由シテ大蔵大臣ノ認可ヲ受クヘ
シ

第八條 銀行ニシテ貯蓄銀行ノ事業ヲ營メントスルトキハ地方長官ヲ經由シテ大蔵大臣ノ認可ヲ受ク
ヘシ

第九條 貯蓄銀行ニシテ此條例ノ規定ニ違反シタルトキハ其取締役ヲ五十圓以上五百圓以下ノ罰金ニ
處ス

貯蓄銀行ニアラスシテ貯蓄銀行ノ業ヲ營ミタルトキハ營業主又ハ會社ノ業務擔當社員若ハ取締役ヲ
前項ノ罰ニ處ス

○商法

第十條 此條例ニ特別ノ規定ヲ設ケサルモノハ總テ銀行條例ニ依ル

○船籍規則 (明治二十三年十月八日) (此公布ハ勅令第二百九十六號ヲ以テ)

朕船籍規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

船籍規則

第一條 日本船ハ西洋形日本形ヲ問ハス總テ船籍港ヲ定メ其地市町村役場若クハ浦役場ノ船籍ニ編入スヘシ

第二條 船籍ニ編入セントスルトキハ國內ニ於テハ地方官廳國外ニ於テハ領事館ニ届出テ其積載ノ測度ヲ受クヘシ

第三條 入籍シタル船舶ニシテ登簿噸數十五噸以上ノ西洋形船百五十石以上ノ日本形船ナルトキハ逕信省ニ船籍證書ノ交付ヲ届出ツヘシ

第四條 船籍證書ニハ左ニ記載シタル條件ヲ記シ且年月日ヲ記スヘシ但日本形船ニ在テハ第一項ノ信號符字及ヒ第八項乃至第十七項ヲ除キ其石數ヲ記シ西洋形帆船ニ在テハ第十三項乃至第十七項ヲ除ク

第一項 船名ノ番號信號符字

第二項 船名ノ原名

第三項 船籍港名、管轄廳名

第四項 甲板ノ層數、幅、索具ノ裝置、船體ノ材料、船骨ノ材料、船首ノ形狀、船尾ノ形狀

第五項 造船工長ノ氏名、製造年月日、製造地名

第六項 船主ノ氏名住所 (會社其他ノ法人若クハ二人以上ノ所有ニ係ルトキハ會社名若クハ管理人ノ氏名)

第七項 船體ノ長、幅及ヒ深

第八項 量噸甲板下部ノ噸數

第九項 量噸甲板上諸部ノ噸數

内 譯

甲板間ノ噸數

船尾室ノ噸數

圓室ノ噸數

其他諸室ノ噸數

第十項 總噸數

第十一項 登簿噸數

第十二項 乘組人常用室ノ噸數

第十三項 機關室ノ噸數

第十四項 機關ノ種類及ヒ數

第十五項 滾籠ノ種類及ヒ數

第十六項 推進器ノ種類

第十七項 公稱馬力

第五條 新造若クハ改造シタル船舶又ハ外國人ヨリ取得シタル船舶ノ假證書ハ前條第一項ヲ除キ船舶

○商法

ノ種類ニ從ヒ其他ノ諸件ヲ記スヘシ

第六條 同一ノ船籍ニシテ再度以上假證書ノ交付ヲ受ケタル場合ト雖モ其効力ハ初度ノ證書ニ記載シタル年月日ヨリ起算シ照法第八百三十條第二項ノ期限ヲ超過スルコトヲ得ス

第七條 船籍證書ノ交付ヲ願出ツルトキハ手数料トシテ本證書ハ壹圓假證書ハ五拾錢ヲ納ムヘシ

第八條 船籍證書ハ常ニ船内ニ保持シテ船長之ヲ監守シ稅關官吏、司檢官、警察官、領事其他正當職權アル者ニ於テ檢閲ヲ要スルトキハ何時ニテモ之ヲ開示スヘシ

第九條 船籍證書ヲ受有スル西洋形船ハ左ノ事項ヲ銘記シ且其事項ニ變更ヲ生シタルトキハ其船度之ヲ改記スヘシ

第一項 船首兩舷ノ外部ニ船名、船尾外部ノ見易キ所ニ船名及ヒ船籍港名ヲ方三寸五分以上ノ國字並羅馬字ヲ以テ記スヘシ

第二項 中央ノ船梁ニ船籍證書ノ番號及ヒ登簿噸數ヲ彫刻シ又ハ該番號噸數ヲ彫刻シタル板ヲ固釘スヘシ

第三項 船首材及ヒ船尾材ノ外部兩側面ヘ水脚ヲ示ス爲メ一尺毎ニ方五寸ノ羅馬又ハ亞刺比亞數字ヲ以テ其尺度ヲ記スヘシ

第十條 船籍證書ヲ受有スル日本形船ハ船尾ニ船名、船梁ニ船籍證書ノ番號及ヒ石數ヲ記スヘシ

第十一條 船舶所有者船籍港ニ居住セザルトキハ本船ニ關スル事務ヲ代辦セシムル爲メ其船籍港ニ代理人ヲ置キ之ヲ市町村役場若クハ浦役場ニ届出ツヘシ

第十二條 船籍ニ記載シタル事項ニ變更ヲ生シタルトキハ船籍面ノ訂正ヲ請ヒ且船籍證書ノ謄寫ヲ申出ツヘシ

第十三條 船籍港ヲ移轉シタルトキハ原籍ヲ削除シ移轉地ノ船籍ニ編入シ且船籍證書ノ謄寫ヲ申出ツヘシ

第十四條 船舶ノ所有權ヲ他人ニ移轉シタルトキハ其旨ヲ市町村役場若クハ浦役場ニ申出且船籍證書ヲ返納スヘシ

第十五條 船舶ノ破壊、喪失、失踪、解撤ニ歸シタルトキ若クハ日本形船タルノ資格ヲ失ヒタルトキハ本船ノ除籍ヲ請ヒ且船籍證書ヲ返納スヘシ

第十六條 本條例第八條乃至第十五條ヲ犯シタル者ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス

附則

第十七條 明治十二年五月第十九號布告ニ依リ付與セシ西洋形船登簿免狀ハ此規則施行ノ日ヨリ船籍證書ト見做シ本證書ト同一ノ効力ヲ有ス

第十八條 明治三年正月布告商船規則同十二年二月第五號布告同年五月第十九號布告同十四年二月第十二號布告其他從前ノ成規中此規則ニ抵觸スルモノハ此規則施行ノ日ヨリ廢止ス

第十九條 此規則ハ明治二十四年一月一日ヨリ施行ス

○船籍規則施行細則(明治二十三年十一月八日) (此省令ハ省令第二十四號ヲ以テ) (日遞信省令第二十號) (明治二十六年一月一日迄延期セラル)

第一條 船舶ヲ製造シ若クハ外國人ニ屬スル船舶ノ所有權ヲ取得シタル者ハ其種類ニ從ヒ第一號若クハ第二號書式ノ件名書ヲ作り本船々籍港所轄ノ市町村役場又ハ浦役場ヲ經テ本船ノ測度ヲ地方官處ニ願出テ且同時ニ該役場ヘ船籍ノ編入ヲ請ヘシ

第二條 市町村役場又ハ浦役場ニ於テハ前條ノ件名書ヲ調査シ五十石未満ノ日本形船ハ其事項ヲ直ニ

○商法

ニ役場ノ船籍登帳ニ登録シ其他ノ艇船ハ件名書ヲ地方官廳ニ送達シ其積量ノ測度ヲ申請スヘシ

第三條 地方官廳ニ於テハ船舶積量測度規則ニ從ヒ之ヲ測度シ第三號若クハ第四號書式ノ測度表ニ依リ其積量ヲ算出シ第五號若クハ第六號書式ノ測度證書ヲ作り件名書ヲ照査シ前條ノ市町村役場又ハ浦役場ヘ送付スヘシ

測度證書及ヒ件名書ヲ受領シタル市町村役場又ハ浦役場ニ於テハ測度證書及ヒ件名書ニ依リ其事項ヲ艇籍登帳ニ登録スヘシ

第四條 前條ノ艇船ニシテ船籍證書ヲ受有スヘキモノナルトキハ更ニ市町村長又ハ浦役人ノ署名ヲ受タル願書ニ第一號若クハ第二號書式ノ件名書ヲ添ヘ地方官廳ヲ經由シテ船籍證書ノ交付ヲ逡信省ニ願出ヘシ但左記ノ艇船ハ艇籍證書ヲ受有スルノ限ニアラス

一 國內水上ヲ運航スル艇船

一 端舟其他櫓楫ノミヲ以テ運轉シ又ハ主トシテ櫓楫ヲ以テ運轉スル舟

第五條 地方官廳ニ於テハ前條ノ願書及ヒ件名書ニ測度表ヲ添ヘ之ヲ逡信省ニ送達スヘシ

第六條 逡信省ニ於テハ件名書及ヒ測度表ヲ調査シ其船舶ノ種類ニ從ヒ第七號第八號若クハ第九號書式ノ船籍證書ヲ作り之ヲ地方官廳ニ送付シ地方官廳ハ市町村長又ハ浦役人ヲシテ之ヲ船主ニ交付セシムヘシ但第十一條ニ係ル船舶ニ交付スヘキ艇籍證書ハ逡信省ヨリ直ニ領事館ニ送付シ其旨ヲ船籍地方官廳ニ通知スヘシ

第七條 艇籍港外ニ於テ艇船ヲ製造シ若クハ外國人ニ屬スル艇船ノ所有權ヲ取得シ船籍證書ヲ受有スヘキ艇船ナルトキハ願書ニ第一號若クハ第二號書式ノ件名書ヲ添ヘ本船所在地ノ地方官廳又ハ領事官ニ本艇ノ測度ヲ請ヒ且假證書ノ交付ヲ願出ヘシ但本艇々籍港ニ到着シタルトキハ更ニ第一條及ヒ

第四條ノ手續ヲ爲スヘシ

第八條 前條ノ願書ヲ受領シタル地方官廳又ハ領事館ニ於テハ第三條ノ手續ニ由リ其積量ヲ算出シ直ニ第十號第十一號若クハ第十二號書式ノ假證書ヲ作り之ヲ國人ニ交付シ且同時ニ其證書ノ原本及ヒ件名書測度表ヲ本艇々籍港地方官廳ニ送付スヘシ

第九條 假證書ノ原本及ヒ件名書測度表ノ送付ヲ受ケタル地方官廳ニ於テハ本艇々籍港ニ到着ノ上其測度ヲ願出タルトキ送付ノ測度表ヲ調査シ正確ナリト認ムルトキハ更ニ測度ヲ要セス直チニ測度證書ヲ作り件名書ト共ニ市町村役場又ハ浦役場ニ送付スヘシ

第十條 內國人ニ屬スル船舶ノ所有權ヲ取得シ若クハ船籍ヲ移動シタルトキハ測度ヲ除クノ外第一條ノ手續ニ依リ其入籍ヲ請ヒ且船籍證書ヲ受有スヘキ艇船ナルトキハ市町村長又ハ浦役人ノ署名ヲ受ケタル願書ニ第一號若クハ第二號書式ノ件名書ヲ添ヘ地方官廳ヲ經由シ其證書ノ交付若クハ書換ヲ逡信省ヘ願出ヘシ

第十一條 外國ニ於テ船舶ヲ製造シ又ハ他人ニ屬スル船舶ノ所有權ヲ取得シ單ニ外國地方ヲ航海シ本國ニ廻船セサル者ハ其事由ヲ具シタル願書ニ第一號若クハ第二號書式ノ件名書ヲ添ヘ本船所在地ノ領事館ニ其測度ヲ願出テ同館ヨリ交付ノ測度證書ヲ本艇々籍港ニ送付シ第一條ニ依リ其入籍ヲ請フヘシ但船籍證書ヲ受有スヘキ艇船ナルトキハ本證書到達迄ノ間領事館ヨリ假證書ヲ願受ルヲ得ヘシ

領事館ニ於テハ第三條ノ手續ニ依リ其積量ヲ算出シ測度證書ヲ國人ニ交付シ且同時ニ本艇件名書測度表ヲ其船籍地方官廳ニ送付スヘシ但假證書ヲ願出タルトキハ第八條ノ手續ニ依リ之ヲ交付スヘシ

○商法

七條ノ手續ニ依ルヘシ

丙百九十

第十三條 船籍ニ記載シタル事項ニ變更ヲ生シタルトキハ市町村役場又ハ浦役場ニ船籍ノ訂正ヲ請ヒ且船籍證書ヲ受有シタル者ハ市町村長又ハ浦役人ノ奥印ヲ受ケタル願書ニ第一號若クハ第二號書式ノ件名書ヲ添ヘ地方官廳ヲ經由シテ其證書ノ再換ヲ遞信省ヘ願出登證書ヲ返納スヘシ但積算ノ變更ニ係ルトキハ更ニ測度ヲ受ケタル後本條ノ手續ヲ爲スヘシ

第十四條 船籍證書又ハ假證書ヲ喪失若クハ毀損シタルトキ船籍港ニ於テハ其由ヲ具シタル願書ニ市町村長又ハ浦役人ノ奥印ヲ受ケ地方官廳ヲ經由シテ其船籍證書ノ再渡若クハ再換ヲ遞信省ヘ願出ヘシ

船籍港外ニ於テハ其由ヲ具シ第一號若クハ第二號書式ノ件名書ヲ添ヘ直チニ本船所在地ノ地方官廳又ハ領事館ヘ假證書ノ交付ヲ願出ヘシ

第十五條 前條ニ依リ假證書ヲ交付シタル地方官廳又ハ領事館ニ於テハ其由ヲ詳記シ件名書及證書ノ謄本ヲ添ヘ速ニ本船ヲ籍港ノ地方官廳ヘ通報スヘシ

第十六條 船籍規則第十五條ノ場合ニ於テハ其由ヲ具シ浦役場ニ除籍ヲ請ヒ且浦籍證書ヲ受有シタル者ハ地方官廳ヲ經由シテ遞信省ヘ返納スヘシ但假證書ナルトキハ其發出ノ官廳ヘ返付スヘシ

第十七條 船籍證書又ハ假證書ノ交付ヲ願出ル者ハ初渡、再渡、再換ヲ問ハス出願ノ際船籍規則第七條ニ掲グル手数料ヲ上納スヘシ

附則

第十八條 明治十二年五月二十一日內務省丙第二十五號達ハ此細則施行ノ日ヨリ廢止ス

第十九條 現在ノ船舶ハ此細則施行ノ爲メ更ニ積算ノ測度ヲ要セス從來ノ願數不數ニ依ル

- (第一號) 西洋形船件名書
- 第一 船名 遠海何丸帆船何丸
 - 第二 船籍港 何國何郡何港又何町村
 - 第三 木船管轄廳名 廳府縣名
 - 第四 甲板ノ層數 何層
 - 第五 船體ノ材料 水製又ハ鐵製
 - 第六 船骨ノ材料 木製又ハ鐵製
 - 第七 櫓ノ數 何本
 - 第八 索具ノ裝設 シツプ、パーク、パークケンタイン、ブリック、ブリーガン、タイン、スクーナー、カツター、スルーブ等
 - 第九 船首ノ形狀 斜形又ハ直立
 - 第十 船尾ノ形狀 圓形又ハ方形
 - 第十一 製造地名 何國何郡何市何町村又ハ何地何道何所 (外國ノ地名ハ外國文字ニテ記スヘシ)
 - 第十二 製造年月 何年何月
 - 第十三 造船工場氏名 宿所氏名(外國人ナラハ外國文字ニテ記スヘシ)
 - 第十四 船ノ原名 最初製造シタルトキノ名(外國ヨリ購入ノモノハ外國文字ニテ記スヘシ)
 - 第十五 船主ノ氏名 會社其他ノ法人若クハ二人以上ノ所有ニ係ルトキハ會社名若クハ管理人ノ氏名住所ヲ記スヘシ
 - 第十六 船ノ長 上甲板ニテ船首ノ外側ヨリ船尾柱ノ外側ニ至ル尺度ヲ曲尺ニテ記スヘシ
 - 第十七 船ノ幅 本船中夾ノ正甲板上面ニテ外板ノ外側ヨリ外側ニ至ル尺度ヲ曲尺ニテ記スヘシ

○商法

丙百九十一

第十八 艦ノ深 正甲板ノ下面ヨリ船底中央ノ内板

ニ至ル尺度ヲ曲尺ニテ記スヘシ

第十九 量噸甲板ノ下部ノ噸數 何噸

第二十 量噸甲板上諸部ノ噸數 何噸

内 譯

甲板間ノ噸數 何噸

船尾室ノ噸數 何噸

圓室ノ噸數 何噸

船首室厨室等都テ蔽固セシ場所ノ噸數 何噸

第三十一 總噸數 何噸

第三十二 登簿噸數 何噸

第三十三 乗組人常用室ノ噸數 何噸

第三十四 機關室ノ噸數 何噸

第三十五 機關ノ種類及ヒ數 重聯成機關、聯成併動冷海機、
單動冷海機、併動冷海機、何箇

第三十六 汽鍋ノ種類及ヒ數 筒形、方形等 何箇

第三十七 氣笛ノ數及内徑 高壓何箇、低壓何箇、徑何寸(英寸ニテ記スヘシ)

第三十九 推進器ノ種類 外車、暗車又ハ雙暗車

第三十 公稱馬力 何馬力

第三十一 船價 何圓 取得シタルモノハ其代價贈與
ニ係ルモノハ其見積代價

第三十二 本船ヲ取得シタル場所 何國何郡何港又ハ何町村

第三十三 本船所有主ノ氏名

右項目中船名地名氏名ハ詳細ニ假名ヲ附スヘシ

(第三號) 日本形船件名書

第一 船名 何丸 船名ヲ付セサル小舟ハ漁船、舢板、傳馬船
等其所用名ヲ記スヘシ

第二 船籍港 何國何郡何港又ハ何町村

第三 本船管轄廳名 廳府縣名

第四 船ノ原名 最初製造シタルトキノ名

第五 艦ノ數 何本

第六 製造地名 何國何郡何市何町村又ハ何地何造船所

第七 製造年月 何年何月

第八 船主ノ氏名

第九 積石數 何石 五十石未満ノモノハ積石數ヲ記スルニ及ハス軸梁
ノ體梁ニ至ルノ尺度ヲ記スヘシ

第十 船價 何圓 取得シタルモノハ其代價贈與
ニ係ルモノハ其見積代價

第十一 本船ヲ取得シタル場所 何國何郡何港又ハ何町村

第十二 本船前所有主氏名

右項目中船名地名氏名ハ詳細ニ假名ヲ附スヘシ

○商法

○商法

○商法

甲板上諸室ノ積量															
第一號			第二號			第三號			第四號			第五號			
甲板間ノ噸數			甲板間ノ長			分長點間隔			內側ノ長			分長點間隔			
分長點	乘數	幅	得數	分長點	乘數	幅	得數	分長點	乘數	幅	得數	分長點	乘數	幅	得數
1				1	1			1	1			1	1		
2	2			2	4			2	4			2	4		
3	3			3	1			3	1			3	1		
4	4														
5															
6															
7															
8															
9															
10															
11															
12															
13															
合計			合計			合計			合計			合計			
分長點間隔			分長點間隔			分長點間隔			分長點間隔			分長點間隔			
平均ノ高			平均ノ高			平均ノ高			平均ノ高			平均ノ高			
分長點ニ於			分長點ニ於			分長點ニ於			分長點ニ於			分長點ニ於			
平均ノ高			平均ノ高			平均ノ高			平均ノ高			平均ノ高			
面積			面積			面積			面積			面積			
分長點ニ於			分長點ニ於			分長點ニ於			分長點ニ於			分長點ニ於			
平均ノ高			平均ノ高			平均ノ高			平均ノ高			平均ノ高			

丙百九十五

(第三號) (三)

機關室ノ積量															
第一號			第二號			第三號			第四號			合計			
平均ノ長			平均ノ長			平均ノ長			平均ノ長			合計			
同深			同深			同深			同深			合計			
番號	乘數	幅	得數	番號	乘數	幅	得數	番號	乘數	幅	得數	番號	乘數	幅	得數
1	1			1	1			1	1			1	1		
2	4			2	4			2	4			2	4		
3	1			3	1			3	1			3	1		
合計			合計			合計			合計			合計			
平均ノ長			平均ノ長			平均ノ長			平均ノ長			合計			
同深			同深			同深			同深			合計			
番號	乘數	幅	得數	番號	乘數	幅	得數	番號	乘數	幅	得數	番號	乘數	幅	得數
1	1			1	1			1	1			1	1		
2	4			2	4			2	4			2	4		
3	1			3	1			3	1			3	1		
合計			合計			合計			合計			合計			
平均ノ長			平均ノ長			平均ノ長			平均ノ長			合計			
同深			同深			同深			同深			合計			
平均ノ長			平均ノ長			平均ノ長			平均ノ長			合計			
同深			同深			同深			同深			合計			

丙百九十四

○商法

西洋形

船名丸	船ノ長
-----	-----

甲板上測度ノ長 甲板ノ厚 船首傾度ニ對スル距離 船尾傾度ニ對スル距離

分長點番號	1	2	3	4	5	6	7
分長點最大ノ深							
船梁ノ矢三分ノ一							
船底内板ノ厚							
矢三分ノ一並ニ其減スル數							
分長點ニ於ル測度深							

本船中央ノ深十六尺 = 付

分深點間隔		分深點番號													
分深點番號	乘號	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
1	1														
2	2														
3	2														
4	4														
5															
6															
7															
合數															
分深點間隔三分ノ一															
横截面積															

丙百九十七

船測度表

船ノ幅	船ノ深
-----	-----

(第三號)

船尾傾度ニ對スル距離 本船測度ノ長 長等分數 同分長點間隔

分長點番號	乘數	横截面積		積
1	1			
2	4			
3	2			
4	4			
5	2			
= 除ス				
6				
7				
8				
9				
10				
11				
12				
13				
合計 =				
分長點間隔三分ノ一				
量頭甲板下部立方積				
積數 =				

丙百九十六

日本形艇測度表

(第四號)

艇名	艇ノ長	艇ノ幅	艇ノ深	船艙下部ノ長
丸				

分長點數	1	2	3	4	5	6	7	橋號	分長點ニ於ル平均點	船艙上部
分長點ニ於ル深								1		1
分長點ニ於ル深ヲ 筒ニ等分ス								2	平均ノ高ニ	2
								3		3
								4		3
								5		平均ノ幅ニ
分長點數	幅	幅	幅	幅	幅	幅	幅	6		2
1								7		3
2								合數		
3								艇艙下部ノ長ニ		平均ノ長ニ
4								同上下部平均ノ深ニ		艇艙上部石數ニ
5										艇艙下部石數ニ
6								立方積ニ		總石數ニ
7										測度員官氏名
合數										
平均ノ幅										

西洋形船測度證書

(第五號)

西 洋 形 船 測 度 書 證 書 第 二 條 ニ 依 リ 本 艇 測 度 ノ 上 此 證 書 ヲ 付 與 ス ル 者 也 應 府 縣 領 事 館 測 度 員 官 氏 名 明 治 年 月 日	度	尺	年	製	地	製	數	數	材	船	監	本	港	名
	船ノ深	船ノ幅	船ノ長	月	造	名	造	ノ	甲	料	體	名	籍	船
	量	積	馬	公	種	器	推	名	測	主	船	工	造	名
登簿願數	總願數 除其 乘組人 常用室	馬力	稱	類ノ	進	進	ノ	地	船	船	長	船	名	尾
	量願數 甲板上 部ノ願數													
	量願數 甲板下 部ノ願數													

(第六號)

日本形艦測度證書

艦籍規則第三條ニ據リ本艦測度ノ上此證書ヲ付與スル者也 明治 年 月 日 廳府縣領事館測度員官氏名	度 尺	名地造製	艦管船本廳名	港籍艦	名 艦
	艦ノ長 艦ノ幅 艦ノ深				
	量 積	主	製	長工造製	月年造製
	何石 船艦上部ノ石數 船艦下部ノ石數				

丙二百

(第七號)

船籍簿證書

材船骨ノ料ノ	材船體ノ料ノ	裝索具ノ番ノ	樁ノ數	層甲板ノ數	本艦管轄名	艦籍港	船名	符信字號	番本號船
馬公力稱	推進器ノ種類	種類及ノ數	種類及ノ數	機關及ノ種類	月及ヒ製造年	長造艦工	名本船原	形船尾狀ノ	形船首狀ノ
年 月 日	右ニ記載スル要件ヲ查明シ船籍原簿ヘ登記ノ上此證書ヲ付與スル者也	登乘組人常用室ノ噸數	機關室ノ噸數	總噸數 其他ノ場所 除去ノ噸數	甲板間ノ場所 甲板室 其他ノ場所	量噸噸數 甲板下部ノ噸數 甲板上部ノ噸數	深測測ノ中央ニ於テ正甲板下ヨリ船底内板ニ至ル	上甲板ニ於テ船首ノ外側ヨリ艦尾柱ノ外側ニ至ル長	船ノ中央正甲板上面ニ於テ外板ノ外側ヨリ外測ノ中央ニ於テ正甲板下ヨリ船底内板ニ至ル
通 信 省									

○商法

丙二百一

日本船舶假籍證書

船主	工造長船	原本名船	製造年月及地名	橋ノ數	本船管轄縣名	船籍港	船名	
			右ニ記載スル要件ヲ查明シ船籍規則第五條ニ依リ此假證書ヲ付與ス但此證書ハ明治 年月 日ヲ限り無効タルヘシ 廳 府 縣 日本領事館		何石 石數 內 船體上部ノ石數 船體下部ノ石數			尺度 船首材ノ外部ヨリ船尾柁柄ニ至ルノ長 中央船梁ニ沿ヒ外板ヨリ外板ニ至ルノ幅 中央船梁上面ヨリ船底ニ至ルノ深

○沖繩縣ニ商法施行延期ノ件(明治二十三年十月八日)

朕沖繩縣ニ商法施行延期ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治二十三年法律第三十二號商法ハ沖繩縣ニ於テハ常分ノ内之ヲ施行セス

○商法ニ從ヒ破産ノ宣告ヲ受ケタル者ニ關スル件(明治二十三年十月八日)

朕商法ニ從ヒ破産ノ宣告ヲ受ケタル者ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム此法律ハ明治二十四年

一月一日ヨリ施行スヘキコトヲ命ス

御名 御璽

商法ニ從ヒ破産ノ宣告ヲ受ケタル者有罪破産ニ係ルトキハ左ノ區別ニ從テ處斷ス

一 詐欺破産ヲ爲シタル者ハ輕懲役ニ處ス

二 過意破産ヲ爲シタル者ハ二月以上四年以下ノ重禁錮ニ處ス

○商法第二百六條ニ依リ發行スヘキ債券ニ關スル件(明治二十三年八月八日)

朕商法第二百六條ニ依リ發行スヘキ債券ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

第一條 商法第二百六條ニ依リ株式會社債券ヲ發行スルハ總持金半額以上ノ拂込アリタル後ニ於テス

第二條 債券ノ發行額ハ株金ノ拂込金額ヲ超過スルコトヲ得ス

第三條 債券ヲ發行セントスルトキハ地方長官ヲ經由シテ主務省ノ認許ヲ受クヘシ

○商法

第四條 債券ハ一通毎ニ其債務金額、利子ノ歩合及仕拂時期、發行ノ年月日、番號、商號、社員、取締役ノ氏名、印、留權者ノ氏名ノ外左ノ事項ヲ記載スルコトヲ要ス

- 一 會社ノ營業所
- 二 株金總額及株金拂込額
- 三 債券償還ノ初期及最終期
- 四 會社開業年月日
- 五 存立時期ヲ定メタル會社ハ其時期
- 六 認許ヲ受ケタル事

第五條 株式會社ハ債券ヲ發行スルトキハ債券原簿ヲ備ヘ債券一通毎ニ區分シテ左ノ事項ヲ記載スヘシ

- 一 債權者ノ氏名住所
- 二 債券ノ金額番號
- 三 利子ノ歩合

四 債券發行ノ年月日及償還ノ年月日

五 債券償還ノ初期及最終期

第六條 債券ノ讓渡ハ取得者ノ氏名ヲ債券及債券原簿ニ記載スルニアラサレハ會社ニ對シテ其効ナシ

○民事訴訟法(明治二十三年三月二十七日)

朕民事訴訟法ヲ裁可シ之ヲ公布セシム此法律ハ明治二十四年一月一日ヨリ施行スヘキコトヲ命ス

御名 御璽

○民事訴訟法目錄

第一編 總則	
第二章 裁判所	
第一節 裁判所ノ事物ノ管轄	四
第二節 裁判所ノ土地ノ管轄	六
第三節 管轄裁判所ノ指定	八
第四節 裁判所ノ管轄ニ付テノ合意	九
第五節 裁判所職員ノ除斥及ヒ忌避	十
第六節 檢事ノ立會	十
第二章 當事者	
第一節 訴訟能力	十一
第二節 共同訴訟人	十二
第三節 第三者ノ訴訟參加	十三
第四節 訴訟代理人及ヒ補佐人	十四
第五節 訴訟費用	十五
第六節 保證	十六
○民事訴訟法	丁一

第七節 訴訟上ノ救助	丁二
第三章 訴訟手續	二
第一節 口頭辯論及ヒ準備書面	二
第二節 送達	三
第三節 期日及ヒ期間	三
第四節 懈怠ノ結果及ヒ原狀回復	三
第五節 訴訟手續ノ中断及ヒ中止	三
第二編 第一審ノ訴訟手續	四
第一章 地方裁判所ノ訴訟手續	四
第一節 判決前ノ訴訟手續	全
第二節 判決	全
第三節 關席判決	四
第四節 計算事件、財産分別及ヒ此ニ類スル訴訟ノ準備手續	五
第五節 證據編ノ總則	五
第六節 人證	五
第七節 鑑定	五
第八節 書證	六
第九節 檢證	六
第十節 當事者本人ノ詢問	七

第十一節 證據保全	七
第二章 陪裁判所ノ訴訟手續	七
第一節 通常ノ訴訟手續	七
第二節 督促手續	七
第三編 上訴	八
第一章 控訴	八
第二章 上告	八
第三章 抗告	八
第四編 再審	八
第五編 證憑訴訟及ヒ爲替訴訟	九
第六編 強制訴訟	九
第一章 總則	九
第二章 金錢ノ債權ニ付テノ強制執行	全
第一節 動産ニ對スル強制執行	全
第一款 通則	全
第二款 有體動産ニ對スル強制執行	全
第三款 債權及ヒ他ノ財産權ニ對スル強制執行	百十九
第四款 配當手續	百二十四
第二節 不動産ニ對スル強制執行	百二十七
○民事訴訟法	丁三

第一款 通則

第二款 強制競賣

第三款 強制管理

第四款 船舶ニ對スル強制執行

第三章 金錢ノ支拂テ目的トセサル債權ニ付テノ強制執行

第四章 假差押及ヒ假處分

第七編 公示催告手續

第八編 仲裁手續

全 全

百四十一丁

百四十三丁

百四十六丁

百四十七丁

百五十一丁

百五十五丁

○民事訴訟法

第一編 總則

第一章 裁判所

第一節 裁判所ノ事物ノ管轄

- 第一條 裁判所ノ事物ノ管轄ハ裁判所構成法ノ規定ニ從フ
- 第二條 訴訟物ノ價額ニ依リ管轄ノ定マルトキハ以下數條ノ規定ニ從フ
- 第三條 訴訟物ノ價額ハ起訴ノ日時ニ於ケル價額ニ依リ之ヲ算定ス
- 果實損害賠償及ヒ訴訟費用ハ法律上相牽連スル主タル請求ニ附帶シ一ノ訴ヲ以テ請求スルトキハ之ヲ算入セス
- 第四條 一ノ訴ヲ以テ數箇ノ請求ヲ爲ストキハ前條第二項ニ掲ケルモノヲ除ク外其額ヲ合算ス
- 本訴ト反訴トノ訴訟物ノ價額ハ之ヲ合算セス
- 第五條 訴訟物ノ價額ハ左ノ方法ニ依リ之ヲ定ム

第一 價額ノ擔保又ハ價額ノ擔保ヲ爲ス從タル物權カ訴訟物ナルトキハ其價額ノ額ニ依ル但物權ノ目的物ノ價額算キトキハ其額ニ依ル

第二 地役カ訴訟物ナルトキハ要役地ノ地役ニ依リ得ル所ノ價額ニ依ル但地役ノ爲メ承役地ノ價額ノ減シタル額カ要役地ノ地役ニ依リ得ル所ノ價額ヨリ多キトキハ其減額ニ依ル

第三 貸借又ハ永賃借ノ契約ノ有無又ハ其時期カ訴訟物ナルトキハ其時期ニ當ル借賃ノ額ニ依ル但一个年借賃ノ二十倍ノ額カ右ノ額ヨリ算キトキハ其二十倍ノ額ニ依ル

第四 定時ノ供給又ハ收益ニ付テノ權利カ訴訟物ナルトキハ一个年收入ノ二十倍ノ額ニ依ル但收入權ノ期限定マリタルモノニ付テハ其將來ノ收入ノ總額カ二十倍ノ額ヨリ算キトキハ其額ニ依ル

第六條 訴訟物ノ價額ハ必要ナル場合ニ於テハ第三條乃至第五條ノ規定ニ從ヒ裁判所ノ意見ヲ以テ之ヲ定ム

裁判所ハ申立ニ因リ證據調ヲ命シ又ハ職權ヲ以テ檢證若クハ鑑定ヲ命スルコトヲ得

第七條 地方裁判所ノ判決ニ對シテハ其事件カ區裁判所ノ事物ノ管轄ニ屬ス可キ理由ヲ以テ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス

第八條 事物ノ管轄ニ付キ區裁判所又ハ地方裁判所カ管轄違ナリト宣言シ其裁判確定シタルトキハ此裁判ハ後ニ其事件ノ管轄ニ屬ス可キ裁判所ヲ轉來ス

第九條 地方裁判所カ事物ノ管轄違ナリトシテ訴ヲ却下スルトキハ原告ノ申立ニ因リ同時ニ判決ヲ以テ原告ノ指定シタル自己ノ管轄内ノ區裁判所ニ其訴訟ヲ移送ス可シ

區裁判所カ事物ノ管轄違ナリトシテ訴ヲ却下スルトキハ同時ニ判決ヲ以テ其訴訟ヲ所屬ノ地方裁判所ニ移送ス可シ

○民事訴訟法

移送ノ申立ハ判決ニ接著スル口頭辯論ノ終結前ニ之ヲ爲スコシ
移送言渡ノ判決確定シタルトキハ其訴訟ハ移送ヲ受ケタル裁判所ニ移属スルモノト看做ス

第二節 裁判所ノ土地ノ管轄(裁判籍)

第十條 人ノ普通裁判籍ハ其住所ニ依リテ定マル
普通裁判籍アル地ノ裁判所ハ其人ニ對スル總テノ訴ニ付キ管轄ヲ有ス但訴ニ付キ專屬裁判籍ヲ定メ
サル場合ニ限ル

第十一條 軍人、軍属ハ裁判籍ニ付テハ兵營地若クハ軍艦定所ヲ以テ住所トス但此規定ハ豫備、後備
ノ軍籍ニ在ル者及ヒ兵役義務履行ノ爲メノミニ服役スル軍人、軍属ニ之ヲ適用セス

第十二條 外國ニ在ル本邦ノ公使及ヒ公使館ノ官吏並ニ其家族、從者ノ裁判籍上ノ住所ハ本邦ニ於テ
本人ノ最後ニ有セシ住所ナリトス此住所ナキモノニ付テハ司法大臣ノ命令ヲ以テ豫メ定ムル東京内
ノ區ヲ以テ其住所ナリトス

第十三條 内國ニ住所ヲ有セサル者ノ普通裁判籍ハ本人ノ所在地ニ依リテ定マル若シ其所在地ノ知レ
サルカ又ハ外國ニ在ルトキハ其最後ニ有セシ内國ノ住所ニ依リテ定マル

然レトモ外國ニ住所ヲ有スル者ニ對シテハ内國ニ於テ生シタル權利關係ニ限り前項ノ裁判籍ニ於テ
訴ヲ起スコトヲ得

第十四條 國ノ普通裁判籍ハ訴訟ニ付キ國ヲ代表スル官廳ノ所在地ニ依リテ定マル但訴訟ニ付キ國ヲ
代表スルニ付テノ規定ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

公又ハ私ノ法人及ヒ其資格ニ於テ訴ヘラルルコトヲ得ル會社其他ノ社團又ハ財團等ノ普通裁判籍ハ
其所在地ニ依リテ定マル此所在地ハ別段ノ定ナキトキハ事務所所在ノ地トス若シ事務所ナキトキ又

ハ數所ニ於テ事務ヲ取扱フトキハ其首長又ハ事務擔當者ノ住所ヲ以テ事務所ト看做ス
第十五條 生徒、雇人、營業使用人、職工、習業其他性質上一定ノ地ニ永ク或在スコキ者ニ對スル財產權
上ノ請求ニ付テノ訴ハ其現在地ノ裁判所ニ之ヲ起スコトヲ得

兵役義務履行ノ爲メノミニ服役スル軍人、軍属ニ對シテハ其兵營地若クハ軍艦定所ノ裁判所ニ前
項ノ訴ヲ起スコトヲ得

第十六條 製造、商業其他ノ營業ニ付キ直接ニ取引ヲ爲ス店舗ヲ有スル者ニ對シテハ其店舗所在地ノ
裁判所ニ營業上ニ關スル訴ヲ起スコトヲ得

前項ノ裁判籍ハ住家及ヒ農業用建物アル地所ヲ利用スル所有者、用益者又ハ賃借人ニ對スル訴ニ付
テモ亦之ヲ適用ス但此訴カ地所ノ利用ニ付テノ權利關係ヲ有スルトキニ限ル

第十七條 内國ニ住所ヲ有セサル債務者ニ對スル財產權上ノ請求ニ付テノ訴ハ其財產又ハ訴ヲ爲シテ
請求スル物ノ所在地ノ裁判所ニ之ヲ起スコトヲ得債權ニ付テハ債務者(第三債務者)ノ住所ヲ以テ其
財產ノ所在地トス又債權ニ付キ物カ擔保ノ責ヲ負フトキハ其物ノ所在地ヲ以テ財產ノ所在地トス

第十八條 契約ノ成立若クハ不成立ノ確定又ハ其履行若クハ銷除、廢絶、解除又ハ其不履行若クハ不十
分ノ履行ニ關スル賠償ノ訴ハ其訴訟ニ係ル義務ヲ履行ス可キ地ノ裁判所ニ之ヲ起スコトヲ得

第十九條 會社其他ノ社團ヨリ社員ニ對シ又ハ社員ヨリ社員ニ對シ其社員タル資格ニ基ク請求ノ訴ハ
其會社其他ノ社團ノ普通裁判籍アル地ノ裁判所ニ之ヲ起スコトヲ得

第二十條 不正ノ損害ノ訴ハ責任者ニ對シ其行為ノ有リタル地ノ裁判所ニ之ヲ起スコトヲ得

第二十一條 辯護士又ハ執達吏ノ手数料及ヒ立替金ニ付キ其委任者ニ對スル訴ハ訴訟物ノ價額ノ多寡
ニ拘ハラズ本訴訟ノ第一審裁判所ニ之ヲ起スコトヲ得

○民事訴訟法

第二十二條 不動産ニ付テハ其所在地ノ裁判所ハ總テ不動産上ノ既得ニ本權立ニ占有ノ既及ヒ分割立ニ經界ノ既ヲ專ラニ管轄ス

地役ニ付テハ承役地所在地ノ裁判所專ラニ之ヲ管轄ス

第二十三條 不動産上ノ裁判籍ニ於テハ債權ノ擔保ヲ爲ス從タル物權ニ基ク不動産上ノ訴ニ附帯シテ同一被告ニ對スル債權ノ既ヲ起スコトヲ得

不動産上ノ裁判籍ニ於テハ不動産ノ所有者若クハ占有者ニ對スル人權ノ既又ハ不動産ニ加ヘタル損害ノ既ヲ起スコトヲ得

第二十四條 相続權、遺贈其他死亡ニ因リテ效果ヲ生スル處分ニ基ク請求ノ訴ハ遺棄者死亡ノ時普通ノ裁判籍ヲ有セシ裁判所ニ之ヲ起スコトヲ得

相続裁判籍ニ於テハ遺產債權者ヨリ遺棄者又ハ相続人ニ對スル請求ノ既ヲ起スコトヲ得但遺產ノ全部又ハ一分カ其裁判所ノ管轄區内ニ存在スルトキニ限ル

第二十五條 第二十二條ノ規定ヲ除ク外原告ハ數箇ノ管轄裁判所ノ中ニ就キ選擇ヲ爲スコトヲ得

第三節 管轄裁判所ノ指定

第二十六條 管轄裁判所ノ指定ハ裁判所構成法ノ定メタル場合ノ外尙ホ不動産上ノ裁判籍ニ既ヲ起ス可キ場合ニ於テ不動産カ數箇ノ裁判所ノ管轄區内ニ散在スルトキモ亦之ヲ爲ス

第二十七條 管轄裁判所ノ指定ニ付キ申請ヲ爲ス場合及ヒ其決定ヲ爲ス裁判所ハ裁判所構成法第十條ノ規定ニ從フ

第二十八條 管轄裁判所ノ指定ニ付テハ申請ハ書面又ハ口頭ヲ以テ其申請ニ付キ管轄權ヲ有スル裁判所ニ之ヲ爲スコトヲ得

右裁判所ハ口頭辯論ヲ經スシテ其申請ヲ決定ス
管轄裁判所ヲ定メタル決定ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス

第四節 裁判所ノ管轄ニ付テノ合意

第二十九條 第一審裁判所ハ當然管轄權ヲ有セサルモ當事者ノ合意ニ因リ管轄權ヲ有ス但書面ヲ以テ合意ヲ爲シ且其合意カ一定ノ權利關係及ヒ其權利關係ヨリ生スル訴訟ニ係ルトキニ限ル

第三十條 被告カ管轄權ノ申立ヲ爲サスシテ本案ノ口頭辯論ヲ爲ストキハ亦前條ト同一ノ效力ヲ生ス

第三十一條 左ノ場合ニ於テハ第二十九條及ヒ第三十條ノ規定ヲ適用セス
第一 財産權上ノ請求ニ非サル訴訟ニ係ルトキ
第二 專屬管轄ニ屬スル既ナルトキ

第五節 裁判所職員ノ除斥及ヒ忌避

第三十二條 判事ハ左ノ場合ニ於テ法律ニ依リ其職務ノ執行ヨリ除斥セララル可シ

第一 判事又ハ其婦カ原告若クハ被告タルトキ又ハ訴訟ニ係ル請求ニ付キ當事者ノ一方若クハ雙方ト共同權利者共同義務者若クハ債權義務者タル關係ヲ有スルトキ

第二 判事又ハ其婦カ當事者ノ一方若クハ雙方又ハ其配偶者ト親族ナルトキ但姻族ニ付テハ婚姻ノ解除シタルトキト雖モ亦同シ

第三 判事カ同一ノ事件ニ付キ證人若クハ鑑定人ト爲リテ開問ヲ受クルトキ又ハ訴訟代理人タル任ヲ受クルトキ若クハ受ケタルトキ又ハ法律上代理人ト爲ル權利ヲ有スルトキ若クハ之ヲ有シタルトキ

第四 判事カ不服ノ申立アル裁判ヲ前審又ハ仲裁ニ於テ爲スニ當リ判事又ハ仲裁人トシテ干與シタルトキ

○民事訴訟法

タルトキ但此場合ニ於テ判事ハ受命判事又ハ受託判事トシテハ職務ノ執行ヨリ除外セラルルコト無シ

丁十

第三十三條 判事カ法律ニ依リ職務ノ執行ヨリ除外セラルルトキ及ヒ偏頗ノ恐アルトキハ總テノ場合ニ於テ各當事者ヨリ之ヲ忌避スルコトヲ得

偏頗ノ忌避ハ判事ノ不公平ナル裁判ヲ爲スコトヲ疑フニ足ル可キ事情アルトキ之ヲ爲スコトヲ得

第三十四條 判事カ法律ニ依リ職務ノ執行ヨリ除外セラルル場合ニ於ケル判事ノ忌避ハ其訴訟ノ如何ナル程度ニ在ルヲ問ハス之ヲ爲スコトヲ得

偏頗ノ恐アル場合ニ於テハ原告若クハ其覺知シタル忌避ノ原因ヲ主張セスシテ判事ノ面前ニ於テ申立ヲ爲シ又ハ相手方ノ申立ニ對シ陳述ヲ爲シタル後ハ其判事ヲ忌避スルコトヲ得ス

第三十五條 忌避ノ申請ハ判事所屬ノ裁判所ニ書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

忌避ノ原因ハ之ヲ疏明スルコトヲ要ス忌避セラレタル判事ノ職務上ノ陳述ハ其疎明ノ用ニ充ツルコトヲ得

原告若クハ被告カ判事ノ面前ニ於テ申立ヲ爲シ又ハ相手方ノ申立ニ對シ陳述ヲ爲シタル後其判事ニ對シ偏頗ノ忌避ヲ爲ストキハ忌避ノ原因其後ニ生シ又ハ之ヲ其後ニ覺知シタルコトヲ疎明ス可シ

第三十六條 忌避セラレタル判事合議裁判所ニ屬スルトキハ其裁判所忌避ノ申請ヲ裁判ス但忌避セラレタル判事ハ其裁判ニ參與スルコトヲ得ス

若シ其裁判所右判事ノ退去ニ因リ決定ヲ爲スコト能ハサルトキハ直近上級ノ裁判所其申請ヲ裁判ス區裁判所判事忌避セラレタルトキハ上級ノ地方裁判所其申請ヲ裁判ス若シ區裁判所判事カ忌避ノ申請ヲ正當ナリト爲ストキハ裁判ヲ要セス

第三十七條

忌避ノ申請ニ付テハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ得忌避セラレタル判事ハ先ツ申請ノ理由ニ付キ職務上意見ヲ述フ可シ

第三十八條

忌避ノ申請ヲ正當ナリト宣言スル決定ニ對シテハ上訴ヲ爲スコトヲ得ス其申請ヲ不當ナリト宣言スル決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第三十九條

忌避セラレタル判事ハ猶豫ス可カラサル行爲ヲ爲ス可シ

第四十條

忌避申請ノ管轄裁判所ハ其申請アラサルモ忌避ノ原因タル事情ニ付キ判事ヨリ申出アルトキ又ハ他ノ事由ヨリシテ判事カ法律ニ依リ除外セラルル疑アルトキモ亦裁判ヲ爲ス

第四十一條

本節ノ規定ハ裁判所書記ニモ之ヲ準用ス但其裁判ハ書記所屬ノ裁判所之ヲ爲ス

第六節

捨事ノ立會

第四十二條 捨事ハ左ノ訴訟ニ付キ意見ヲ述フル爲メ其口頭辯論ニ立會フ可シ

第一 公ノ法人ニ關スル訴訟

第二 婚姻ニ關スル訴訟

第三 夫婦間ノ財産ニ關スル訴訟

第四 親子若クハ養親子ノ分限其他總テ人ノ分限ニ關スル訴訟

第五 無能力者ニ關スル訴訟

第六 養料ニ關スル訴訟

第七 失踪者及ヒ相續人虧缺ノ遺産ニ關スル訴訟

○民事訴訟法

第八 證書ノ偽造若クハ變造ノ訴訟

第九 再審

檢事ノ陳述ハ當事者ノ辯論終リタルトキ之ヲ爲ス

當事者ハ檢事ノ意見ニ對シ事實ノ更正ノミニ付キ陳述ヲ爲スコトヲ得

第二章 當事者

第一節 訴訟能力

第四十三條 原告若クハ被告カ自ら訴訟ヲ爲シ又ハ訴訟代理人ヲシテ之ヲ爲サシムル能力ト法律上代理人ニ依レル訴訟無能力者ノ代表ト法律上代理人カ訴訟ヲ爲シ又ハ一ノ訴訟行為ヲ爲スニ付テノ特別授權ノ必要トハ民法ノ規定ニ從フ

第四十四條 外國人ハ自國ノ法律ニ從ヒ訴訟能力ヲ有セサルモ本邦ノ法律ニ從ヒ訴訟能力ヲ有スルモノナルトキハ之ヲ有スルモノト看做ス

第四十五條 裁判所ハ訴訟ノ如何ナル程度ニ在ルヲ問ハス職權ヲ以テ訴訟能力、法律上代理人タル資格及ヒ訴訟ヲ爲スニ必要ナル授權ニ欠缺ナキヤ否ヲ調査ス可シ

裁判所ハ遲滯ノ爲メ原告若クハ被告ニ危害アリ且其欠缺ノ補正ヲ爲シ得ルモノト認ムルトキハ原告若クハ被告又ハ其法律上代理人ニ其欠缺ノ補正ヲ爲ス條件ヲ以テ一時訴訟ヲ爲スヲ許スコトヲ得此場合ニ於テ裁判所ハ欠缺補正ノ爲メ相當ノ期間ヲ定メ其期間ノ満了前ニ判決ヲ爲スコトヲ得ス但其欠缺ノ補正ハ判決ニ接スル口頭辯論ノ終結マテ之ヲ追完スルコトヲ得

第四十六條 訴訟無能力者又ハ相續人ノ未定ノ遲滯又ハ不分明ナル相續人ニ對シ訴訟ヲ起ス可キ場合ニ於テ法律上代理人アラサルトキハ其事件ノ關係ス可キ裁判所ノ裁判長ハ申立ニ因リ遲滯ノ爲ニ危害

ノ恐アル場合ニ限り特別代理人ヲ任ス可シ

右申請ハ書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得此裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲シ其裁判ハ申出人ニ之ヲ送達シ又申請ヲ認許シタルトキハ其任セラレタル特別代理人ニモ亦之ヲ送達ス可シ

申請ヲ却下スル裁判ニ對シテハ抗告ヲ爲スコトヲ得

裁判長ヨリ任セラレタル特別代理人ハ法律上代理人又ハ相續人ノ出頭スルマテ訴訟行為ニ付キ法律上代理人ノ權利及ヒ義務ヲ有ス

第四十七條 第十五條ニ掲ケタル場合ニ於テ訴訟無能力者カ其現在地又ハ兵營地若クハ軍艦定所ノ裁判所ニ訴ヲ受ク可キ場合ニ於テ其法律上代理人他ノ地ニ住スルトキハ遲滯ノ爲メ危害ナシト雖モ前條ノ規定ニ從ヒ特別代理人ヲ任スルコトヲ得

此他裁判ニ對シ抗告ヲ許ス規定ヲ除ク外總テ前條ノ規定ヲ適用ス

第二節 共同訴訟人

第四十八條 左ノ場合ニ於テハ共同訴訟人トシテ數人カ共ニ訴ヲ爲シ又ハ訴ヲ受クルコトヲ得

第一 數人カ訴訟物ニ付キ權利共通若クハ義務共通ノ地位ニ立ツトキ

第二 同一ナル事實上及ヒ法律上ノ原因ニ基ク請求又ハ義務カ訴訟ノ目的物タルトキ

第三 性質ニ於テ同種類ナル事實上及ヒ法律上ノ原因ニ基ク同種類ナル請求又ハ義務カ訴訟ノ目的物タルトキ

第四十九條 共同訴訟人ハ其資格ニ於テハ各別ニ相手方ニ對立シ其一人ノ訴訟行為及ヒ懈怠又ハ相手方ヨリ其一人ニ對スル訴訟行為及ヒ懈怠ハ他ノ共同訴訟人ニ利害ヲ及ボサス

第五十條 然レトモ總テノ共同訴訟人ニ對シ訴訟ニ係ル權利關係カ合一ニノミ確定ス可キトキニ限リ

○民事訴訟法

左ノ規定ヲ適用ス

共同訴訟人中ノ或ル人ノ攻撃及ヒ防禦ノ方法(證據方法ヲ包含ス)ハ他ノ共同訴訟人ノ利益ニ於テ效ヲ生ス

共同訴訟人中ノ或ル人カ争ヒ又ハ認諾セサルトキト雖モ總テノ共同訴訟人カ悉ク争ヒ又ハ認諾セサルモノト看做ス

共同訴訟人中ノ或ル人ノミカ期日又ハ期間ヲ懈怠シタルトキハ其懈怠シタル者ハ懈怠セサル者ニ代理ヲ任シタルモノト看做ス

然レトモ懈怠シタル共同訴訟人ニハ其懈怠セザリシ場合ニ於テ為スコキ總テノ送達及ヒ呼出ヲ為スコトヲ要ス其懈怠シタル共同訴訟人ハ何時タリトモ其後ノ訴訟手續ニ再ヒ加ハルコトヲ得

第三節 第三者ノ訴訟参加

第五十一條 他人ノ間ニ權利拘束ト為リタル訴訟ノ目的物ノ全部又ハ一分ヲ自己ノ為ニ請求スル第五者ハ本訴訟ノ權利拘束ノ終ニ至ルマテ其訴訟力第一審ニ於テ認屬シタル裁判所ニ當事者雙方ニ對スル既(主参加)ヲ為シテ其請求ヲ主張スルコトヲ得

第三者カ原告及ヒ被告ノ共謀ニ因リ自己ノ債權ニ損害ヲ生スルコトヲ主張スルトキモ亦同シ

第五十二條 本訴訟ハ第一審ニ認屬スルト上級審ニ認屬スルトヲ問ハス原告、被告若クハ主参加人ノ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ主参加ニ付テノ權利拘束ノ終ニ至ルマテ之ヲ中止スルコトヲ得

中止ノ申請ハ書面又ハ口頭ヲ以テ本訴訟ノ認屬スル裁判所ニ之ヲ為スコトヲ得
決定ハ口頭辯論ヲ經ヌシテ之ヲ為スコトヲ得
中止ヲ命スル決定ニ對シテハ即時抗告ヲ為スコトヲ得

第五十三條 他人ノ間ニ權利拘束ト為リタル訴訟ニ於テ其一方ノ勝訴ニ依リ權利上利害ノ關係ヲ有スル者ハ訴訟ノ如何ナル程度ニ在ルヲ問ハス權利拘束ノ繼續スル間ハ其一方ヲ補助(從参加)スル為メ之ニ附隨スルコトヲ得

第五十四條 從参加人ハ其附隨スル時ニ於ケル訴訟ノ程度ヲ妨ケサル限リハ其主タル原告若クハ被告ノ為ニ攻撃及ヒ防禦ノ方法ヲ施用シ且總テノ訴訟行為ヲ有效ニ行ヒ殊ニ主タル原告若クハ被告ノ為ニ存スル期間内ニ故障支拂命令ニ對スル異議又ハ上訴ヲ為ス權利ヲ有ス

從参加人ノ陳述及ヒ行為ト主タル原告若クハ被告ノ陳述及ヒ行為ト相抵觸スル場合ニ於テハ主タル原告若クハ被告ノ陳述及ヒ行為ヲ以テ標準ト為ス但民法ニ於テ此ニ異ナル規定アルトキハ此限ニ在ラス

第五十五條 從参加人ハ訴訟ヨリ脱退シタルトキト雖モ其補助シタル原告若クハ被告トノ關係ニ於テハ其訴訟ノ確定裁判ヲ不當ナリト主張スルコトヲ得ス

從参加人ハ其附隨ノ時ノ訴訟ノ程度ニ因リ又ハ主タル原告若クハ被告ノ所為ニ因リ攻撃及ヒ防禦ノ方法ヲ施用スルコトヲ妨ケラルトキ又ハ主タル原告若クハ被告カ從参加人ノ當時知ラザリシ攻撃及ヒ防禦ノ方法ヲ故意又ハ重過失ニ因リ施用セザリシトキニ限り其補助シタル原告若クハ被告カ訴訟ヲ不十分ニ為シタリト主張スルコトヲ得

第五十六條 從参加ハ本訴訟ノ認屬スル裁判所ニ申請ヲ以テ之ヲ為スコシ
申請ニハ當事者及ヒ訴訟ヲ表示シ又一定ノ利害關係及ヒ附隨セントスル陳述ヲ開示ス可シ
申請ハ當事者ニ之ヲ送達ス可シ
從参加ハ故障、異議又ハ上訴ト合併シテ之ヲ為スコトヲ得

○民事訴訟法

第五十七條 原告若クハ被告カ從參加ニ付キ異議ヲ遺フルトキハ當事者及ヒ從參加人ヲ審訊シタル後決定ヲ以テ參加ノ許否ヲ裁判ス其裁判ハ口頭辯論ヲ經シテ之ヲ爲スコトヲ得
利害關係ノ存否ニ付キ爭アルトキハ從參加人其關係ヲ説明スルノミヲ以テ參加ヲ許スニ足ル
右ノ決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

參加ヲ許ササル裁判確定セサル間ハ從參加人ヲ本訴訟ニ立會ハシメ殊ニ爲テノ期日ニ之ヲ呼出シ又本訴訟ニ關係アル裁判ヲ爲シタルトキハ從參加人ニ其裁判ヲ送達ス可シ

第五十八條 從參加人ハ當事者雙方ノ承諾ヲ得テ其附隨シタル原告若クハ被告ニ代リ訴訟ヲ擔任スルコトヲ得此場合ニ於テハ其原告若クハ被告ノ申立ニ因リ判決ヲ以テ訴訟ヨリ其原告若クハ被告ニ就退セシム可シ

第五十九條 原告若クハ被告若シ敗訴スルトキハ第三者ニ對シ擔保又ハ賠償ノ請求ヲ爲シ得ヘシト信シ又ハ第三者ヨリ請求ヲ受ク可キコトヲ恐ルル場合ニ於テハ訴訟ノ權利拘束間第三者ニ訴訟ヲ告知スルコトヲ得

訴訟ノ告知ヲ受ケタル者ハ更ニ訴訟ヲ告知スルコトヲ得

第六十條 訴訟告知ハ訴訟ノ標的スル裁判所ニ其訴訟告知ノ理由及ヒ訴訟ノ程度ヲ記載シ書面ヲ提出シテ之ヲ爲ス可シ
此書面ハ第三者ニ送達スルコトヲ要ス又訴訟ヲ告知スル原告若クハ被告ノ相手方ニハ其勝本ヲ送付ス可シ

第六十一條 訴訟ハ訴訟告知ニ拘ハラズ之ヲ續行ス

第三者參加ス可キコトヲ陳述スルトキハ從參加ノ規定ヲ適用ス

第六十二條 第三者ノ名ヲ以テ物ヲ占有スルコトヲ主張スル者其物ノ占有者トシテ被告ト爲リタルトキハ本案ノ辯論前第三者ヲ指名シ之ニ陳述ヲ爲サシムル爲メ其呼出ヲ求ムルトキハ第三者ノ陳述ヲ爲シ又ハ之ヲ爲ス可キ期日マテ本案ノ辯論ヲ拒ムコトヲ得

第三者カ被告ノ主張ヲ爭フトキ又ハ陳述ヲ爲ササルトキハ被告ハ原告ノ申立ニ應スルコトヲ得
第三者カ被告ノ主張ヲ正當ト認ムルトキハ被告ノ承諾ヲ得テ之ニ代リ訴訟ヲ引受クルコトヲ得

第三者カ訴訟ヲ引受ケタルトキハ裁判所ハ被告ノ申立ニ因リ其被告ヲ訴訟ヨリ脱退セシム可シ其物ニ付テハ裁判ハ被告ニ對シテモ效力ヲ有シ且之ヲ執行スルコトヲ得

第四節 訴訟代理人及ヒ補佐人

第六十三條 原告若クハ被告自ラ訴訟ヲ爲ササルトキハ辯護士ヲ以テ訴訟代理人トシテ之ヲ爲ス

辯護士ノ在ラサル場合ニ於テハ訴訟能力者タル親族若クハ雇人ヲ以テ訴訟代理人ト爲シ若シ此等ノ者ノ在ラサルトキハ他ノ訴訟能力者ヲ以テ訴訟代理人ト爲スコトヲ得

區裁判所ニ於テハ辯護士ノ在ルトキト雖モ訴訟能力者タル親族若クハ雇人ヲ以テ訴訟代理人ト爲スコトヲ得

第六十四條 訴訟委任ハ裁判所ノ記録ニ備フ可キ書面委任ヲ以テ之ヲ證ス可シ

私署證書ハ相手方ノ求ニ因リ之ヲ認證ス可シ其認證ハ公證人之ヲ爲シ又相當官吏之ヲ爲スコトヲ得
口頭辯論ノ期日又ハ受命判事若クハ受託判事ノ面前ニ於テ口頭委任ヲ爲シ其陳述ヲ圖畫ニ記載セシムルトキハ書面委任ト同一ナリトス

第六十五條 訴訟委任ハ反訴、主參加、故障、假差押若クハ假處分又ハ強制執行ニ因リ生スル訴訟行為ヲ併セ訴訟ニ關スル總テノ訴訟行為ヲ爲シ及ヒ相手方ヨリ辨濟スル費用ノ領收ヲ爲ス權ヲ授與ス

○民事訴訟法

訴訟代理人ハ特別ノ委任ヲ受クルニ非サレハ控訴若クハ上告ヲ爲シ、再審ヲ求メ、代人ヲ任シ、和解ヲ爲シ、訴訟物ヲ抛棄シ又ハ相手方ヨリ主張シタル請求ヲ認諾スル權ヲ有セス
第六十六條 訴訟委任ハ法律上ノ範圍(第六十五條第一項)ヲ制限スルモ其制限ハ相手方ニ對シ效力ナシ

然レトモ辯護士ニ依レル代理ヲ除ク外ハ各箇ノ訴訟行爲ニ付キ委任ヲ爲スコトヲ得
第六十七條 訴訟代理人數人アルトキハ共同若クハ各別ニテ代理スルコトヲ得但委任ニ此ト異ナル定アルモ相手方ニ對シ其効力ナシ

第六十八條 訴訟代理人カ委任ノ範圍内ニ於テ爲シタル訴訟上ノ行爲及ヒ不行爲ハ原告若クハ被告ニ對シテハ其本人ノ行爲又ハ不行爲ト同一ナリトス
然レトモ代理人ノ事實上ノ陳述ハ其代理人ト共ニ裁判所ニ出頭シタル原告若クハ被告ヨリ即時ニ之ヲ取消シ又ハ更正シタルトキニ限り其効力ヲ失フ

第六十九條 委任者ノ死亡、訴訟能力若クハ法律上代理ノ變更、委任ノ廢止及ヒ代理ノ謝絶ニ因ル委任ノ消滅ハ其消滅ヲ通知スルマテ相手方ニ對シ其効力ナシ
此通知書ハ原告若クハ被告ヨリ受取裁判所ニ之ヲ差出シ裁判所ハ相手方ニ之ヲ送達ス可シ
代理人ハ謝絶ヲ爲スモ委任者他ノ方法ヲ以テ自己ノ權利ノ防衛ヲ爲ササル間ハ其委任者ノ爲ニ行爲ヲ爲スコトヲ得

第七十條 委任ノ欠缺ハ原告若クハ被告ノ爲メ其代理人ナキモノト看做ス
裁判所ハ職權ヲ以テ委任ノ欠缺ヲ調査シ委任ナク又ハ適式ノ委任ナク代理人トシテ出頭スル者ニ事情ニ從ヒ費用及ヒ損害ノ保證ヲ立テシメ又ハ之ヲ立テシメシテ假ニ訴訟ヲ爲スナ許スコトヲ得

判決ハ欠缺ヲ補正シ又ハ之ヲ補正スル爲メ裁判所ノ適宜ニ定ムル期間ノ満了後ニ限り之ヲ爲スコトヲ得但欠缺ノ補正ハ判決ニ接著スル口頭辯論ノ終結マテ之ヲ追完スルコトヲ得
第七十一條 原告若クハ被告ハ辯護士ヲ輔佐人ト爲シ又ハ何時ニテモ裁判所ノ取消シ得ヘキ許可ヲ得テ他ノ訴訟能力者ヲ輔佐人ト爲シテ共ニ出頭スルコトヲ得其輔佐人ハ口頭辯論ニ於テ權利ヲ伸張シ又ハ防禦スル爲メ原告若クハ被告ヲ補助スルモノトス
補佐人ノ陳述ハ原告若クハ被告即時ニ之ヲ取消シ又ハ更正セサルトキニ限り原告若クハ被告自ラ陳述シタルモノト看做ス

第五節 訴訟費用

第七十二條 敗訴ノ原告若クハ被告ハ訴訟ノ費用ヲ負擔シ殊ニ訴訟ニ因リ生シタル費用ヲ相手方ニ釋濟ス可シ但其費用ハ裁判所ノ意見ニ於テ相當ナル權利伸張又ハ權利防禦ニ必要ナリト認ムルモノニ限ル
訴訟中ニ訴ヲ取下ケ、請求ヲ抛棄シ又ハ相手方ノ請求ヲ認諾スル原告若クハ被告ハ敗訴ノ原告若クハ被告ニ同シ

第七十三條 當事者ノ各方一分ハ勝訴ト爲リ一分ハ敗訴ト爲ルトキハ其費用ヲ相消シ又ハ割合ヲ以テ之ヲ分擔ス可シ第一ノ場合ニ於テハ各當事者ハ其支出シタル費用ヲ自ラ負擔シ他ノ一方ニ對シ釋濟ヲ請求スルコトヲ得ス
然レトモ裁判所ハ相手方ノ要求格外ニ過分ナルニ非ス且別段ノ費用ヲ生セザリシトキ又ハ判事ノ意見、鑑定人ノ鑑定若クハ相互ノ計算ニ因リ要求額ヲ定ムルニ非サレハ容易ニ過分ノ要求ヲ避ケルコトヲ得サリシトキハ當事者ノ一方ニ訴訟費用ノ全部ヲ負擔セシムルコトヲ得

○民事訴訟法

第七十四條 被告直チニ請求ヲ認諾シ且其作為ニ因リ訴ヲ起スニ至ラシメタルニ非サルトキハ訴訟費用ハ原告ノ勝訴ト爲リタルニ拘ハラス其負擔ニ歸ス

第七十五條 期日若クハ期間ヲ懈怠シ又ハ自己ノ過失ニ因リ期日ノ變更(辯論ノ延期辯論續行ノ爲ニスル期日ノ指定、期間ノ延長其他訴訟ノ遲滯ヲ生セシメタル原告若クハ被告ハ本案ノ勝訴者ト爲リタルニ拘ハラス此力爲ニ生シタル費用ヲ負擔ス可シ

第七十六條 裁判所ハ無益ナル攻撃又ハ防禦ノ方法(證據方法ヲ包含ス)ヲ主張シタル原告若クハ被告ヲシテ本案ノ勝訴者ト爲リタルニ拘ハラス其方法ノ費用ヲ負擔セシムルコトヲ得

第七十七條 無益ナル上訴又ハ取下ケタル上訴ノ費用ハ之ヲ提出シタル原告若クハ被告ノ負擔ニ歸ス第七十八條 上訴ニ因リ裁判ノ全部又ハ一分ヲ廢棄若クハ破毀スルトキハ訴訟ノ總費用(上訴ノ費用ヲ包含ス)ノ裁判ハ本案ノ終局裁判ト併合シテ更ニ之ヲ爲ス可シ

原告若クハ被告カ前審ニ於テ主張スルコトヲ得ヘカリシ事實又ハ攻撃若クハ防禦ノ方法ヲ新ニ提出スルニ因リ勝訴者ト爲ルトキハ其原告若クハ被告ニ上訴費用ノ全部又ハ一部ヲ負擔セシムルコトヲ得

第七十九條 當事者カ訴訟物ニ付キ和解ヲ爲ストキハ其訴訟ノ費用及ヒ和解ノ費用ハ共ニ相消シタルモノト看做ス但當事者別段ノ合意ヲ爲シタルトキハ此限ニ在ラス

第八十條 法律ノ規定ニ從ヒ費用ニ付キ共同訴訟人ノ運籌義務ノ生セサルトキニ限り其共同訴訟人ハ相手方ニ對シ平等ニ費用ヲ負擔ス然レトモ共同訴訟人ノ訴訟ニ於ケル利害ノ關係著シク相異ナルトキハ裁判所ハ其利害關係ノ割合ニ從ヒ費用ヲ負擔セシムルコトヲ得

共同訴訟人中ノ或ル人カ特別ノ攻撃又ハ防禦ノ方法ヲ主張シタルトキハ他ノ共同訴訟人ハ此力爲ニ

生シタル費用ヲ負擔セス

第八十一條 從參加ニ對シ原告若クハ被告カ異議ヲ述フルトキハ其異議ノ決定ニ於テ從參加人ト其原告若クハ被告ト中間訴訟ノ費用ニ付キ第七十二條乃至第七十八條ノ規定ニ從ヒテ裁判ヲ爲ス可シ從參加ヲ許シタルトキ又ハ異議ヲ述ヘサルトキハ本訴訟ノ判決ニ於テ從參加人ト相手方ナル原告若クハ被告トノ間ニ從參加ニ因リ生シタル費用ニ付テモ亦前數條ノ規定ニ從ヒテ裁判ヲ爲ス可シ

第八十二條 費用ノ照ニ限リタル裁判ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコトヲ得然レトモ本案ノ裁判ニ對シ許ス可キ上訴ヲ提出シ且追行スルトキニ限り費用ノ照ニ付キ不服ヲ申立ツルコトヲ得

費用ノ照ニ限リタルトキト雖モ相手方ヨリ提出シタル上訴ニ附帶スル場合ニ於テハ不服ヲ申立ツルコトヲ得

第八十三條 裁判所書記、法律上代理人、辯護士其他ノ代理人及ヒ執達吏ノ過失又ハ懈怠ニ因リ費用ノ生シタルトキハ受託裁判所ハ申立ニ因リ又ハ職務ヲ以テ其費用ノ辨濟ヲ負擔セシムル決定ヲ爲スコトヲ得但其決定前關係人ニ口頭又ハ書面ニテ陳述ヲ爲ス機會ヲ與フ可シ

此裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ得其決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第八十四條 辨濟ス可キ費用額ノ確定ハ申請ニ因リ訴訟ノ第一審ニ屬シタル裁判所ノ決定ヲ以テ之ヲ爲ス

申請ハ第七十二條第二項又ハ上訴取下ノ場合ヲ除ク外執行シ得ヘキ裁判ニ依ルトキニ限り之ヲ爲スコトヲ得

申請ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

申請ニハ費用計算書、相手方ニ付與ス可キ計算書ノ謄本及ヒ各箇費用額ノ説明ニ必要ナル證書ヲ添

◎民事訴訟法

附ス可シ

第八十五條 費用額確定ノ裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ得

裁判所ハ裁判所書記ニ費用計算書ノ計算上ノ檢査ヲ命スルコトヲ得

裁判所ハ費用額確定ノ決定ヲ爲ス前相手方ニ計算書ヲ付與シテ裁判所ノ定ムル期間内ニ陳述ヲ爲ス可キ旨ヲ之ニ催告スルコトヲ得此決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第八十六條 當事者ハ訴訟費用ノ全部又ハ一部ヲ割合ニ從ヒ分擔ス可キトキハ裁判所ハ費用額確定ノ決定ヲ爲ス前相手方ニ裁判所ノ定ムル期間内ニ其費用ノ計算書ヲ差出ス可キ旨ヲ催告ス可シ此期間ヲ徒過シタル後ハ費用額確定ノ決ハ相手方ノ定費用ヲ顧ミス之ヲ爲ス可シ但相手方ハ後ニ自己ノ費用ヲ以テ其費用額確定ノ申請ヲ爲ス妨ト爲ルコト無シ

第六節 保證

第八十七條 訴訟上ノ保證ハ當事者カ別段ノ合意ヲ爲ス場合又ハ此法律ニ於テ保證ヲ定ムルコトヲ裁判所ノ自由ナル意見ニ任スル場合ヲ除ク外裁判所ノ意見ニ於テ擔保ニ十分ナリトスル現金又ハ有價證券ヲ供託シテ之ヲ爲ス

第八十八條 原告又ハ原告ノ從參加人タル外國人ハ被告ニ對シ其求ニ因リ訴訟費用ニ付キ保證ヲ立ツ可シ

左ノ場合ニ於テハ保證ヲ立ツル義務ヲ生セス

第一 國際條約又ハ原告ノ屬スル國ノ法律ニ因リ本邦人カ同一ノ場合ニ於テ保證ヲ立ツル義務ヲキトキ

第二 反訴ノ場合

第三 證書訴訟及ヒ爲替訴訟ノ場合

第四 公示催告ニ基キ起シタル訴ノ場合

第八十九條 裁判所ハ前條第一項ノ場合ニ於テハ保證ヲ立ツ可キ數額ヲ確定ス可シ此數額ヲ確定スルニハ被告ノ訴ヲ受ケタルカ爲メ各審級ニ於テ支出ス可キ訴訟費用ノ額ヲ標準ト爲ス可シ

訴訟中ニ保證ノ不足ヲ生シ且追増保證ヲ立ツ可キコトヲ被告カ求ムルトキハ前項ト同一ノ手續ニ依ル可シ但等ナキ請求ノ部分カ擔保ニ十分ナルトキハ此限ニ在ラス

第九十條 裁判所ハ保證ヲ立ツ可キ期間ヲ定ム可シ此期間ノ經過後裁判アルマテニ保證ヲ立テサル場合ニ於テハ被告ノ申立ニ因リ判決ヲ以テ訴ヲ取下ケタリト宣言シ又原告カ上訴ヲ爲シタルトキハ其上訴ヲ取下ケタリト宣言ス可シ

第七節 訴訟上ノ救助

第九十一條 何人ヲ問ハス自己及ヒ其家族ノ必要ナル生活ヲ害スルニ非サレハ訴訟費用ヲ出タスコト能ハサル者ハ訴訟上ノ救助ヲ求ムルコトヲ得但其目的トスル權利ノ伸張又ハ防禦ノ輕忽ナラス又ハ見込ナキニ非スト見ユルトキニ限ル

第九十二條 外國人ハ國際條約又ハ其屬スル國ノ法律ニ依リ本邦人カ同一ノ場合ニ於テ訴訟上ノ救助ヲ求ムルコトヲ得ルトキニ限リ之ヲ求ムルコトヲ得

第九十三條 訴訟上救助ノ申請ハ訴訟ノ關係ヲ表明シ且證據方法ヲ開示シテ其救助ヲ求ムル審級ノ裁判所ニ之ヲ提出ス可シ其申請ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得原告若クハ被告ハ申請ノ提出ト共ニ管轄市町村長ヨリ發シタル證書ヲ出タスコトヲ要ス其證書ニハ

○民事訴訟法

原告若クハ被告ノ身分、職業、財産並ニ家族ノ實況及ヒ其納ム可キ直税ノ額ヲ開示シテ訴訟費用支拂
ノ無資力ヲ證ス可シ

第九十四條 訴訟上ノ救助ハ各審ニ於テ各別ニ之ヲ付與ス第一審ニ於テハ強制執行ニ付テモ之ヲ付與
スルモノトス

前審ニ於テ訴訟上ノ救助ヲ受ケタルトキハ上級審ニ於テハ無資力ヲ證スルコトヲ要セス相手方上訴
ヲ提出シタルトキハ上級審ニ於テハ訴訟上ノ救助ヲ求ムル原告若クハ被告ノ權利ノ伸張又ハ防禦ノ
輕忽ナラス又ハ見込ナキニ非スト見ユルヤテ調査スルコトヲ要セス

第九十五條 訴訟上ノ救助ハ之ヲ受ケタル條件ノ存セザリシトキ又ハ消滅シタルトキハ何時タリトモ
之ヲ取消スコトヲ得

第九十六條 訴訟上ノ救助ハ之ヲ受ケタル原告若クハ被告ノ死亡ト共ニ消滅ス

第九十七條 訴訟上ノ救助ハ之ヲ受ケタル原告若クハ被告ノ爲ニ左ノ效力ヲ生ス

第一 裁判費用(國庫ノ立替金ヲ包含ス)ヲ濟清スルコトノ假免除

第二 訴訟費用ノ保證ヲ立ツルコトノ免除

第三 送達及ヒ執行行為ヲ爲サシムル爲メ一時無報酬ニテ執達吏ノ附添ヲ求ムル權利
受訴裁判所ハ必要ナル場合ニ於テハ訴訟上ノ救助ヲ受ケタル原告若クハ被告ノ申立ニ因リ又ハ職權
ヲ以テ一時無報酬ニテ辯護士ヲ附添テ命スルコトヲ得

第九十八條 訴訟上ノ救助ハ相手方ニ生シタル費用ヲ濟清スル義務ニ影響ヲ及ボサス

第九十九條 救助ヲ受ケタル原告若クハ被告ノ爲メ假ニ濟清ヲ免除シタル裁判費用ハ訴訟費用ニ付キ
確定裁判ヲ受ケタル相手方又ハ訴若クハ上訴ノ取下、拋棄、認諾若クハ和解ニ因リ訴訟費用ヲ負擔ス

可キ相手方ヨリ之ヲ取立ツルコトヲ得

救助ヲ受ケタル原告若クハ被告ニ附添ヒタル執達吏又ハ辯護士ハ同一ノ條件アルトキハ亦自己ノ權
利ニ依リ費用確定ノ方法ヲ以テ其手数料及ヒ立替金ヲ取立ツルコトヲ得

第一百條 救助ヲ受ケタル原告若クハ被告ハ自己及ヒ其家族ノ必要ナル生活ヲ害セスシテ費用ノ濟清ヲ
爲シ得ルニ至ルトキハ假免除ヲ得タル數額(第九十七條第一號)ヲ直チニ追拂ヒスル義務アリ

第一百一條 裁判所ハ檢事ノ意見ヲ聽キタル後訴訟上救助ノ付與並ニ辯護士附添ノ命令ニ付テノ申請、
訴訟上救助ノ取消及ヒ數額追拂ノ義務ニ付キ決定ヲ爲ス

此裁判ハ口頭辯論ヲ經シテ之ヲ爲スコトヲ得

第一百二條 訴訟上ノ救助ヲ付與シ又ハ其取消ヲ拒ミ若クハ費用追拂ヲ命スルコトヲ拒ム決定ニ對シテ
ハ檢事ニ限り抗告ヲ爲スコトヲ得

辯護士ノ附添ヲ命スル決定ニ對シテハ上訴ヲ爲スコトヲ得ス

訴訟上ノ救助ヲ拒ミ若クハ取消シ又ハ辯護士ノ附添ヲ拒ミ又ハ費用ノ追拂ヲ命スル決定ニ對シテハ
原告若クハ被告ハ抗告ヲ爲スコトヲ得

第三章 訴訟手續

第一節 口頭辯論及ヒ準備書面

第一百三條 判決裁判所ニ於ケル訴訟ニ付テノ當事者ノ辯論ハ口頭ナリトス但此法律ニ於テ口頭辯論ヲ
經スシテ裁判ヲ爲スコトヲ定メタルトキハ此限ニ在ラス

第一百四條 口頭辯論ハ書面ヲ以テ之ヲ準備ス

第一百五條 準備書面ニハ左ノ諸件ヲ掲ク可シ

○民事訴訟法

- 第一 當事者及ヒ其法律上代理人ノ氏名、身分、職業、住所、裁判所、訴訟物及ヒ附屬書類ノ表示
- 第二 原告若クハ被告カ法廷ニ於テ爲サント欲スル申立
- 第三 申立ノ原因タル事實上ノ關係
- 第四 相手方ノ事實上ノ主張ニ對スル陳述
- 第五 原告若クハ被告カ事實上主張ノ證明又ハ攻撃ノ爲メ用ヰントスル證據方法及ヒ相手方ノ申出テタル證據方法ニ對スル陳述
- 第六 原告若クハ被告又ハ其訴訟代理人ノ署名及ヒ捺印
- 第七 年月日
- 第六條 準備書面ニ於テ提出ス可キ事實ハ簡明ニ之ヲ記載ス可シ
此他事實上ノ關係ノ説明並ニ法律上ノ討論ハ書面ニ之ヲ掲クルコトヲ得ス
- 第七條 準備書面ニハ訴訟ヲ爲ス可キ資格ニ付テノ證書ノ原本、正本又ハ謄本其他總テ原告若クハ被告ノ手中ニ存スル證書ニシテ書面中ニ申立ノ原因トシテ引用シタルモノノ謄本ヲ添附ス可シ
證書ノ一部分ノミヲ要用トスルトキハ其冒頭ノ事件ニ属スル部分、終尾、日附、署名及ヒ印章ヲ添寫シタル抄本ヲ添附スルヲ以テ足ル
證書カ既ニ相手方ニ知レタルトキ又ハ大部ナルトキハ其證書ヲ表示シ且相手方ニ之ヲ閲覧セシメント欲スル旨ヲ附記スルヲ以テ足ル
- 第八條 當事者ハ準備書面及ヒ其附屬書類並ニ相手方ニ付與スル爲メ必要ナル謄本ヲ裁判所書記官ニ差出ス可シ
- 第九條 裁判長ハ口頭辯論ヲ開キ且之ヲ指揮ス

- 裁判長ハ發言ヲ許シ又其命ニ從ハサル者ニ發言ヲ禁スルコトヲ得
裁判長ハ事件ニ付キ十分ナル説明ヲ爲サシメ且間斷ナク辯論ノ終了スルコトニ注意ス又必要ナル場合ニ於テハ直チニ辯論續行ノ期日ヲ定ム
裁判所ニ於テ事件ニ付キ十分ナル説明ヲ爲セリト認ムルトキハ裁判長ハ口頭辯論ヲ閉チ及ヒ裁判所ノ判決並ニ決定ヲ宣渡ス
- 第十條 口頭辯論ハ當事者ノ申立ヲ爲スニ因リテ始マル
當事者ノ演述ハ事實上及ヒ法律上ノ點ニ於ケル訴訟關係ヲ包括ス可シ
口頭演述ニ換ヘテ書類ヲ援用スルコトヲ許サス文字上ノ旨趣ヲ要用トスルトキハ其要用ナル部分ニ限り之ヲ朗讀スルコトヲ得
- 第十一條 各當事者ハ相手方ノ主張シタル事實ニ對シ陳述ヲ爲ス可シ
明カニ爭ハサル事實ハ原告若クハ被告ノ他ノ陳述ヨリ之ヲ爭ハントスル意思カ顯レサルトキハ自白シタルモノト看做ス
不知ノ陳述ハ原告若クハ被告ノ自己ノ行爲ニ非ス又自己ノ實驗シタルモノニ非サル事實ニ限り之ヲ許ス此場合ニ於テ不知ヲ以テ答ヘタル事實ハ爭ヒタルモノト看做ス
- 第十二條 裁判長ハ職權上調査ス可キ點ニ關シ相手方ヨリ起ササル疑ノ存スルトキハ其疑ニ付キ注意ヲ爲スコトヲ得
裁判長ハ問ヲ發シテ不明瞭ナル申立ヲ釋明シ主張シタル事實ノ不十分ナル證明ヲ補充シ證據方法ヲ申出テ其他事件ノ關係ヲ定ムルニ必要ナル陳述ヲ爲サシム可シ
陪席判事ハ裁判長ニ告ケテ問ヲ發スルコトヲ得

○民事訴訟法

當事者ハ相手方ニ對シテ自ら問ヲ發スルコトヲ得ス然レトモ其問ヲ發ス可キ旨ヲ裁判長ニ求ムルコトヲ得

若シ其問ニ對シテ答ヘス又ハ判然答ヘサルトキハ相手方ノ利益ト爲ル可キ答ヲ爲シタルモノト看做スコトヲ得

第百十三條 事件ノ指揮ニ關スル裁判長ノ命又ハ裁判長若クハ陪席判事ノ發シタル問ニ對シ辯論ニ與カル者ヨリ不適法ナリトシテ異議ヲ述ヘタルトキハ裁判所ハ其異議ニ付キ直キニ裁判ヲ爲ス

第百十四條 裁判所ハ事件ノ關係ヲ明瞭ナラシムル爲メ原告若クハ被告ノ自身出頭ヲ命スルコトヲ得

第百十五條 裁判所ハ原告若クハ被告ノ採用シタル證書ニシテ其手中ニ存スルモノヲ提出ス可キヲ命スルコトヲ得

裁判所ハ外國語ヲ以テ作りタル證書ニ付テハ其譯書ヲ添附ス可キヲ命スルコトヲ得

第百十六條 裁判所ハ當事者ノ所持スル訴訟記録ニシテ事件ノ經過及ヒ裁判ニ關スルモノヲ提出ス可キヲ命スルコトヲ得

第百十七條 裁判所ハ檢證及ヒ鑑定ヲ命スルコトヲ得

此手續ハ申立ニ因リ命スル檢證及ヒ鑑定ニ付テノ規定ニ從フ

第百十八條 裁判所ハ一箇ノ訴ニ於テ爲シタル數箇ノ請求又ハ本訴及ヒ反訴ニ付テノ辯論ヲ分離シテ爲ス可キヲ命スルコトヲ得

第百十九條 同一ノ請求ニ關シ數箇ノ獨立ナル攻撃及ヒ防禦ノ方法ヲ提出シタルトキハ裁判所ハ此等辯論ヲ其一二ニ制限ス可キヲ命スルコトヲ得

第百二十條 裁判所ハ同一ノ人又ハ別異ノ人ノ數箇ノ訴訟ニシテ其裁判所ニ屬スルモノノ辯論及ヒ

裁判ヲ併合ス可キヲ命スルコトヲ得但其訴訟ノ目的物タル請求ヲ元來一箇ノ訴ニ於テ主張シ得ヘキトキニ限ル

第百二十一條 裁判所ハ訴訟ノ全部又ハ一分ノ裁判カ他ノ關係スル訴訟ニ於テ定マル可キ權利關係ノ成立又ハ不成立ニ關ルトキハ他ノ訴訟ノ完結ニ至ルマテ辯論ヲ中止ス可シ

第百二十二條 裁判所ハ民事訴訟中罰ス可キ行為ノ嫌疑生スルトキハ刑事訴訟手續ノ完結ニ至ルマテ辯論ヲ中止ス可シ但其罰ス可キ行為カ訴訟ノ裁判ニ影響ヲ及ホストキニ限ル

第百二十三條 裁判所ハ分離若クハ併合ニ關シ發シタル命ヲ取消スコトヲ得

第百二十四條 裁判所ハ開キタル辯論ノ再開ヲ命スルコトヲ得

第百二十五條 裁判所ハ辯論ニ與カル者日本語ニ通セサルトキハ通事ヲ立會ハシム但裁判所構成法第百十八條ノ場合ハ此限ニ在ラス

第百二十六條 裁判所ハ辯論ニ與カル者對又ハ啞ナルトキ之ニ文字ヲ以テ理會セシムルコトヲ得ヤル場合ニ限リ通事ヲ立會ハシムルコトヲ得

第百二十七條 裁判所ハ相當ノ演述ヲ爲ス能力ノ缺ケタル原告若クハ被告又ハ訴訟代理人若クハ輔佐人ニ其後ノ演述禁ナシ且新期日ヲ定メ辯護士ヲシテ演述セシム可キコトヲ命ス可シ

裁判所ハ裁判所ニ於テ辯論ヲ業トスル訴訟代理人若クハ輔佐人ヲ退斥セシムルコトヲ得

此場合ニ於テハ新期日ヲ定メ且退斥ノ決定ヲ原告若クハ被告ニ送達ス可シ

本條ノ規定ニ從ヒ爲シタル命ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス

辯護士ニハ本條ノ規定ヲ適用セス

第百二十八條 辯論ニ與カル者秩序維持ノ爲メ辯論ノ場所ヨリ退斥セラレタルトキハ申立ニ因リ本人

○民事訴訟法

ノ任意ニ退去シタル同一ノ方法ヲ以テ之ヲ取扱フコトヲ得但裁判所構成法第百十條ニ依リ中止シタル場合ハ此限ニ在ラス

前條ノ場合ニ於テ禁止又ハ退斥ノ命ヲ受ケタル者再ヒ出頭スルトキハ前項ノ方法ヲ以テ之ヲ取扱フコトヲ得

第百二十九條 口頭辯論ニ付テハ調書ヲ作ル可シ

調書ニハ左ノ諸件ヲ掲ク可シ

第一 辯論ノ場所、年月日

第二 判事、裁判所書記及ヒ立會ヒタル檢事若クハ通事ノ氏名

第三 訴訟物及ヒ當事者ノ氏名

第四 出頭シタル當事者、法律上代理人、訴訟代理人及ヒ輔佐人ノ氏名若シ原告若クハ被告出席シタルトキハ其關係シタルコト

第五 公ニ辯論ヲ爲シ又ハ公開ヲ禁シタルコト

第百三十條 辯論ノ進行ニ付テハ其要領ノミヲ調書ニ記載ス可シ

調書ニ記載シテ明理ニス可キ諸件ハ左ノ如シ

第一 自白、認諾地棄及ヒ和解

第二 明確ニス可キ規定アル申立及ヒ陳述

第三 證人及ヒ鑑定人ノ供述但其供述ハ以前聽カサルモノナルトキ又ハ以前ノ供述ニ異ナルトキニ限ル

第四 檢證ノ結果

第五 書面ニ作り調書ニ添附セサル裁判(判決、決定及ヒ命令)

第六 裁判ノ言渡

附録トシテ調書ニ添附シ且調書ニ附録トシテ表示シタル書類ニ於ケル記載ハ調書ニ於ケル記載ニ同シ

第百三十一條 前條第一號乃至第四號ニ掲ケタル調書ノ部分ハ法廷ニ於テ之ヲ關係人ニ讀聞カセ又ハ閱覽ノ爲メ之ヲ關係人ニ示ス

調書ニハ前項ノ手續ヲ履ミタルコト及ヒ承諾ヲ爲シタルコト又ハ承諾ヲ拒ミタル理由ヲ附記ス可シ

第百三十二條 調書ニハ裁判長及ヒ裁判所書記署名捺印ス可シ

裁判長差支アルトキハ官等最も高キ陪席判事之二代リ署名捺印ス陪席判事差支アルトキハ其裁判所書記ノ署名捺印ヲ以テ足ル

第百三十三條 受命判事若クハ受託判事又ハ陪席判事カ法廷外ニ於テ爲ス審問ニモ亦裁判所書記ヲ立會ハシム

前四條ノ規定ハ右ノ審問調書ニ之ヲ準用ス

第百三十四條 口頭辯論ノ爲メ規定シタル方式ノ遵守ハ調書ヲ以テノミ之ヲ證スルコトヲ得

第百三十五條 此法律ニ從ヒ口頭ヲ以テ訴訟抗告、申立、申請及ヒ陳述ヲ爲シ又ハ證據ヲ拒ム場合ニ於テハ裁判所書記ハ其調書ヲ作ル可シ

第二節 送達

第百三十六條 送達ハ裁判所書記職權ヲ以テ之ヲ爲サシム

裁判所書記ハ執達吏ニ送達ノ施行ヲ委任シ又ハ送達ヲ施行ス可キ地ヲ管轄スル陪席判事ノ書記ニ送

達

○民事訴訟法

丁三十一

達ノ施行ヲ執達更ニ委任ス可キコトヲ囑託ス

裁判所書記ハ郵便ニ依リテモ亦送達ヲ爲サシムルコトヲ得

第二項ノ場合ニ於テハ執達更又第三項ノ場合ニ於テハ郵便配達人ヲ以下ニ規定スル送達更ト爲ス
第三百七條 送達ハ其送達ス可キ書類ノ正本又ハ認證シタル謄本ヲ交付ス可キ規定アルトキハ其正本又ハ其謄本ノ交付ヲ以テ之ヲ爲シ其他ノ場合ニ於テハ謄本ノ交付ヲ以テ之ヲ爲ス
原告若クハ被告數人ノ代理人ニ爲シ又ハ同一ナル原告若クハ被告ノ代理人數人中ノ一人ニ爲ス可キ送達ハ謄本又ハ正本ノ一通ヲ交付スルヲ以テ足ル

第三百十八條 訴訟能力ヲ有セサル原告若クハ被告ニ對スル送達ハ其法律上代理人ニ之ヲ爲ス
公又ハ私人、法人及ヒ其資格ニ於テ訴訟ヘ又ハ訴訟ヘラレルコトヲ得ル會社又ハ社團ニ對スル送達ハ其首長又ハ事務擔當者ニ之ヲ爲スヲ以テ足ル

第三百十九條 豫備、後備ノ軍籍ニ在ラサル下士以下ノ軍人、軍属ニ對スル送達ハ其所屬ノ首長又ハ隊長ニ之ヲ爲ス

第三百十條 囚人ニ對スル送達ハ監獄署ノ首長ニ之ヲ爲ス

第三百十一條 送達ハ財産權上ノ訴訟ニ付テハ總代理人ニ之ヲ爲シ又商業上ヨリ生シタル訴訟ニ付テハ代務人ニ之ヲ爲スヲ以テ原告若クハ被告ノ本人ニ爲シタルト同一ノ效力ヲ有ス

第三百十二條 訴訟代理人アルトキハ送達ハ其代理人委任ノ旨趣ニ依リ原告若クハ被告ノ代理ヲ爲ス權ヲ有スルトキニ限リ其代理人ニ之ヲ爲ス
然レトモ原告若クハ被告ノ本人ニ爲シタル送達ハ其訴訟代理人アルトキト雖モ效力ヲ有ス

第三百十三條 受訴裁判所ノ所在地ニ住居ヲモ事務所ヲモ有セサル原告若クハ被告ハ其所在地ニ假住所ヲ選定シテ之ヲ届出ツ可シ

假住所選定ノ届出ハ運クトモ最近ノ口頭辯論ニ於テ之ヲ爲シ又其前ニ書面ヲ差出ストキハ其書面ヲ以テ之ヲ爲ス可シ

前項ノ届出ヲ爲ササルトキハ裁判所書記又ハ其委任ヲ受ケタル吏員交付ス可キ書類ヲ原告若クハ被告ノ名宛ニテ郵便ニ付シテ送達ヲ爲スコトヲ得此送達ハ其書類ノ原告若クハ被告ニ到達スルト否トナ問ハス又何時ニ到達スルトナ問ハス郵便ニ付シタル時ヲ以テ之ヲ爲シタルモノト看做ス

第三十四條 送達ハ何レノ地ナ問ハス送達ヲ受ク可キ人ニ出會ヒタル地ニ於テ之ヲ爲スコトヲ得然レトモ其人カ其地ニ住居又ハ事務所ヲ有スルトキ其住居又ハ事務所ノ外ニ於テ爲シタル送達ハ其受取ヲ拒マサリシトキニ限リ效力ヲ有ス

第三百十八條第二項ノ場合ニ於テ特別ノ事務所アルトキハ其事務所ノ外ニ於テ法律上代理人又ハ首長若クハ事務擔當者ニ爲シタル送達ハ其受取ヲ拒マサリシトキニ限リ效力ヲ有ス

第三百十五條 送達ヲ受ク可キ人ニ住居ニ於テ出會ハサルトキハ其住居ニ於テスル送達ハ成長シタル同居ノ親族又ハ雇人ニ之ヲ爲スコトヲ得

此規定ニ從ヒ送達ヲ施行スルコトヲ得サルトキハ其送達ハ交付ス可キ書類ヲ其地ノ市町村長ニ預置キ送達ノ告知書ヲ作り之ヲ住居ノ戸ニ貼附シ且近隣ニ住居スル者二人ニ其旨ヲ口頭ヲ以テ通知シテ之ヲ爲スコトヲ得

第三百十六條 住居ノ外ニ事務所ヲ有スル人ニ對スル送達ハ事務所ニ於テ之ニ出會ハサルトキハ其事務所ニ在ル營業使用人ニ之ヲ爲スコトヲ得此規定ハ辯護士ニモ亦之ヲ適用ス但此場合ニ於ケル送達

○民事訴訟法

ハ筆生ニモ亦之ヲ爲スコトヲ得

丁三十四

第四百十七條 第三百十八條第二項ノ場合ニ於テ法律上代理人又ハ首長若クハ事務担当者ニ事務所ニ於テ出會ハス又ハ此等ノ者受取ニ付キ差支アルトキハ送達ハ事務所ニ在ル他ノ役員又ハ雇人ニ之ヲ爲スコトヲ得

第四百十八條 前二條ノ規定ニ從ヒ送達ヲ施行スルコトヲ得サルトキハ第四百十五條第三項ニ準シ送達ヲ爲スコトヲ得但住居ニ於ケル送達ヲ施行スルヲ得サルコトノ明白ナルトキニ限ル

前項ノ場合ニ於テハ送達告知書ノ貼附ハ事務所又ハ住居ノ戸ニ之ヲ爲ス

第四百十九條 法律上ノ理由ナクシテ送達ノ受取ヲ拒ムトキハ交付ス可キ書類ヲ送達ノ場所ニ差置ク可シ

第四百十條 日曜日及ヒ一般ノ祝祭日ニハ執達吏ノ爲スコキ送達ハ裁判官ノ許可ヲ得ルトキニ限リ之ヲ施行スルコトヲ得

前項ノ規定ハ郵便ニ付シテ爲ス送達ヲ除ク外ハ夜間ニ爲スコキ送達ニ之ヲ適用ス夜間トハ日没ヨリ日出マテノ時間ヲ謂フ

右ノ許可ハ受取裁判所ノ裁判長又ハ送達ヲ爲スコキ地ヲ管轄スル區裁判所ノ判事之ヲ與ヘ又ハ受命判事若クハ受託判事ノ完結ス可キ事件ニ在テハ其判事之ヲ與フ

許可ノ命令ハ認證シタル謄本ヲ以テ送達ノ際之ヲ交付ス可シ

本條ノ規定ヲ遵守セサル送達ハ之ヲ受取リタルトキニ限リ効力ヲ有ス

第四百十一條 送達ニ付テハ之ヲ施行スル吏員ハ送達ノ場所、年月日時、方法及ヒ受取人ノ受取證並ニ送達吏ノ署名捺印ヲ具備ニル證書ヲ作ルコトヲ要ス

受取人受取ヲ拒ミ若クハ受取證ヲ出タスコトヲ拒ミタルトキ又ハ受取證ヲ作ルコト能ハサル旨ヲ送達フルトキハ之ヲ送達證書ニ記載ス可シ

第四百十三條第三項ノ場合ニ於テハ郵便ニ付シタル吏員ノ報告書ヲ以テ送達ノ證ト爲スニ足ル

第四百十二條 外國ニ在ル本邦ノ公使及ヒ公使館ノ官吏並ニ其家族、從者ニ對スル送達ハ外務大臣ニ囑託シテ之ヲ爲ス

第四百十三條 前條ノ場合ヲ除ク外外國ニ於テ施行ス可キ送達ハ外國ノ管轄官廳又ハ外國ニ駐在スル帝國ノ公使又ハ領事ニ囑託シテ之ヲ爲ス

第四百十四條 出陣ノ軍隊又ハ役務ニ服シタル軍艦ノ乗組員ニ屬スル人ニ對スル送達ハ上班司令官廳ニ囑託シテ之ヲ爲スコトヲ得

第四百十五條 前三條ノ場合ニ於テ必要ナル囑託書ハ受取裁判所ノ裁判長之ヲ發ス

送達ハ囑託ヲ受ケタル官廳又ハ官吏ノ送達施行濟ノ證書ヲ以テ之ヲ證ス

第四百十六條 原告若クハ被告ノ現在地知レサルトキ又ハ外國ニ於テ爲スコキ送達ニ付テハ其規定ニ從フコト能ハス若クハ之ニ從フモ其效ナキコトヲ豫知スルトキハ其送達ハ公ノ告示ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

第四百十七條 公示送達ハ原告若クハ被告ノ申立ニ因リ裁判所ノ命ヲ以テ裁判所書記之ヲ取扱フ此送達ハ交付ス可キ書類ヲ裁判所ノ掲示板ニ貼附シテ之ヲ爲ス判決及ヒ決定ニ在テハ其裁判ノ部分ノミチ貼附ス可シ

右ノ外裁判所ハ送達ス可キ書類ノ抄本チ一箇又ハ數箇ノ新聞紙ニ一回又ハ數回掲載ス可キヲ命スルコトヲ得其抄本ニハ裁判所ノ當事者並ニ訴訟物及ヒ送達ス可キ書類ノ要示ヲ掲グルコトヲ要ス

◎民事訴訟法

丁三十五

第百五十八條 公示送達ハ書類ノ貼附ヨリ十四日ヲ經過シタル日ヲ以テ之ヲ爲シタルモノト看做ス然レトモ裁判所ハ公示送達ヲ命スルニ際シ此ヨリ長キ期間ヲ必要トスルトキハ相當ナル期間ヲ定ムルコトヲ得

同一ノ事件ニ付キ同一ノ原告若クハ被告ニ對シテ爲ス其後ノ公示送達ハ貼附ヲ以テ之ヲ爲シタルモノト看做ス

第三節 期日及ヒ期間

第百五十九條 期日ハ裁判長日及ヒ時ヲ以テ之ヲ定ム

第百六十條 期日ハ已ムテ得サル場合ニ限リ日曜日及ヒ一般ノ祝祭日ニ之ヲ定ムルコトヲ得

第百六十一條 期日ニ付テノ呼出ハ裁判長ノ命ニ從ヒ裁判所書記正本ノ送達ヲ以テ之ヲ爲ス但在廷シタル者二期日ヲ定メ出頭ヲ命シタルトキハ之ヲ送達スルコトヲ要セス

第百六十二條 期日ハ裁判所内ニ於テ之ヲ開ク但臨檢又ハ裁判所ニ出頭スルニ差支アル人ノ審問其他一裁判所内ニ於テ爲スコトヲ得サル行爲ヲ要スルトキハ此限ニ在ラス

第百六十三條 期日ハ事件ノ呼上ヲ以テ始マル

原告若クハ被告カ期日ノ終ニ至ルマテ辯論ヲ爲ササルトキハ期日ヲ忘リタルモノト看做ス

第百六十四條 裁判所又ハ裁判長ノ定ムル期間ノ進行ハ期間ヲ定メタル書類ノ送達ヲ以テ始マリ又其送達ヲ要セサル場合ニ於テハ期間ノ言渡ヲ以テ始マル但期間指定ノ際此ヨリ遅キ起期ヲ定メタルトキハ此限ニ在ラス

第百六十五條 期間ヲ計算スルニ時ヲ以テスルモノハ即時ヨリ起算シ又日ヲ以テスルモノハ初日ヲ算入セス

第百六十六條 一日ノ期間ハ二十四時トシ一个月ノ期間ハ三十日トシ一今年ノ期間ハ曆ニ從フ期間ノ終カ日曜日又ハ一般ノ祝祭日ニ當ルトキハ其日ヲ期間ニ算入セス

第百六十七條 法律上ノ期間ハ裁判所ノ所在地ニ住居セサル原告若クハ被告ノ爲メ其住居地ト裁判所所在地トノ距離ノ割合ニ應シ海陸路八里毎ニ一日ヲ伸長ス八里以外ノ端數三里ヲ超ユルトキモ亦同シ

裁判所ハ外國又ハ島嶼ニ於テ住所ヲ有スル原告若クハ被告ノ爲メ特ニ附加期間ヲ定ムルコトヲ得

第百六十八條 期間ノ進行ハ裁判所ノ休暇ニ依リテ停止ス其期間ノ殘餘ノ部分ハ休暇ノ終ヲ以テ其進行ヲ始ム期間ノ初カ休暇ニ當ルトキハ其期間ノ進行ハ休暇ノ終ヲ以テ始マル

前項ノ規定ハ不變期間及ヒ休暇事件ノ期間ニハ之ヲ適用セス

不變期間ハ此法律ニ於テ不變期間トシテ掲ケタル期間ニ限ル

休暇事件トハ裁判所構成法第百二十八條、第百二十九條ニ掲ケタル事件ヲ謂フ

第百六十九條 期日ノ變更、辯論ノ延期、辯論續行ノ期日ノ指定ハ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得但申立ニ因レル期日ノ變更ハ合意ノ場合ヲ除ク外顯著ナル理由アルトキニ限り之ヲ許ス

第百七十條 期間ハ不變期間ヲ除ク外當事者ノ合意ノ申立ニ因リ之ヲ短縮シ又ハ伸長スルコトヲ得

裁判所又ハ裁判長ノ定ムル期間及ヒ法律上ノ期間ハ合意ナキモ申立ニ因リ顯著ナル理由アルトキハ之ヲ短縮シ又ハ伸長スルコトヲ得然レトモ法律上ノ期間ノ短縮又ハ伸長ハ此法律ニ特定シタル場合ニ限り之ヲ許ス

伸長ニ係ル新期間ハ前期間ノ満了ヨリ之ヲ起算ス

第百七十一條 期日ノ變更又ハ期間ノ短縮若クハ伸長ニ付テノ申請ノ理由ハ之ヲ説明ス可シ其中論ハ

○民事訴訟法

口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

申請ノ裁判ハ口頭辯論ヲ經シテ之ヲ爲スコトヲ得

同一期日ノ再度ノ變更又ハ同一期間ノ再度ノ伸長ハ相手方ノ承諾書ヲ提出セザルトキハ相手方ヲ容
誦シタル後ニ限り之ヲ許スコトヲ得又相手方カ異議ヲ述フルトキハ顯著ナル差支ノ理由及ヒ其差支
ヲ除去スルコトノ特別ナル困難ヲ生シタルコトヲ證スルトキニ限り之ヲ許スコトヲ得訴訟代理人ノ
差支ニ原因スル期日ノ再度ノ變更又ハ期間ノ再度ノ伸長ハ相手方ノ承諾アルニ非サレハ之ヲ許サス
期日ノ變更又ハ期間ノ伸長ニ付テノ申請ヲ却下スル裁判ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス
第四百七十二條 本節ニ於テ裁判所及ヒ裁判長ニ與ヘタル權ハ受命判事又ハ受託判事モ亦其定ム可キ期
日及ヒ期間ニ付キ之ヲ行フコトヲ得

第四節 懈怠ノ結果及ヒ原狀回復

第四百七十三條 訴訟行為ヲ怠リタル原告若クハ被告ハ其訴訟行為ヲ爲ス權利ヲ失フ但此法律ニ於テ追
完ヲ許ストキハ此限ニ在ラス

法律上懈怠ノ結果ハ當然生スルモノトス但此法律ニ於テ失權ヲ爲サシムルコトニ付キ相手方ノ申立
ヲ要スルトキハ此限ニ在ラス

第四百七十四條 天災其他避ク可カラサル事變ノ爲ニ不變期間ヲ遵守スルコトヲ得サル原告若クハ被告
ニハ申立ニ因リ原狀回復ヲ許ス

原告若クハ被告カ故障期間ヲ懈怠シタルトキハ其過失ニ非スシテ闕席判決ノ送達ヲ知ラザリシ場合
ニ於テモ亦之ニ原狀回復ヲ許ス

第四百七十五條 原狀回復ハ十四日ノ期間内ニ之ヲ申立ツルコトヲ要ス

右期間ハ障碍ノ止ミタル日ヲ以テ始マル此期間ハ當事者ノ合意ニ因リ之ヲ伸長スルコトヲ得ス
懈怠シタル不變期間ノ終ヨリ起算シ一ノ年ノ滿了後ハ原狀回復ヲ申立ツルコトヲ得ス
第四百七十六條 原狀回復ハ追完スル訴訟行為ニ付キ裁判ヲ爲ス權アル裁判所ニ書面ヲ差出シテ之ヲ申
立ツ可シ

此書面ニハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要ス

- 第一 原狀回復ノ原因タル事實
- 第二 原狀回復ノ疎明方法
- 第三 懈怠シタル訴訟行為ノ追完

即時抗告ノ提出ヲ懈怠シタルトキハ原狀回復ノ申立ハ不服ヲ申立テラレタル裁判ヲ爲シタル裁判所
又ハ抗告裁判所ニ之ヲ爲スコトヲ得

第四百七十七條 原狀回復ノ申立ニ付テノ訴訟手續ハ追完スル訴訟行為ニ付テノ訴訟手續ト之ヲ併合ス
然レトモ裁判所ハ先ツ申立ニ付テノ辯論及ヒ裁判ノミニ其訴訟手續ヲ制限スルコトヲ得

申立ノ許否ニ關スル裁判及ヒ其裁判ニ對スル不服ノ申立ニ付テハ追完スル訴訟行為ニ於テ行ハル可
キ規定ヲ適用ス然レトモ申立ヲ爲シタル原告若クハ被告ハ故障ヲ爲スコトヲ得ス

原狀回復ノ費用ハ申立人ノ負擔ス但相手方ノ不當ナル異議ニ因リ生シタルモノハ此限ニ在ラス
第五節 訴訟手續ノ中斷及ヒ中止

第四百七十八條 原告若クハ被告ノ死亡シタル場合ニ於テハ承繼人カ訴訟手續ヲ受繼クマテ之ヲ中斷ス
受繼ヲ遲滯シタルトキハ裁判所ハ申立ニ因リ受繼及ヒ本案辯論ノ爲メ其承繼人ヲ呼出ス
承繼人期日ニ出頭セザルトキハ申立ニ因リ相手方ノ主張シタル承繼ヲ自白シタルモノト看做シ且我

○民事訴訟法

判所ハ關席判決ヲ以テ承繼人訴訟手續ヲ受繼キタリト言渡ス又本案ノ辯論ハ故障期間ノ満了後始メテ之ヲ爲シ又其期間内ニ故障ヲ申立テタルトキハ其完結後始メテ之ヲ爲ス

第七十九條 原告若クハ被告ノ財産ニ付キ破産ノ開始シタル場合ニ於テ訴訟手續カ破産財團ニ關スルトキハ破産ニ付テノ規定ニ從ヒ手續ヲ受繼キ又ハ破産手續ヲ解止スルマテ之ヲ中斷ス

第八十條 原告若クハ被告カ訴訟能力ヲ失ヒ又ハ其法律上代理人カ死亡シ又ハ其代理權カ原告若クハ被告ノ訴訟能力ヲ得ル前ニ消滅シタルトキハ訴訟手續ハ法律上代理人又ハ新法律上代理人カ其任設ヲ相手方ニ通知シ又ハ相手方カ訴訟手續ヲ續行セントスルコトヲ其代理人ニ通知スルマテ之ヲ中斷ス

第八十一條 原告若クハ被告ノ死亡ニ因リ訴訟手續ヲ中斷スル場合ニ於ケル訴訟手續ノ受繼ニ關シ遺産ニ付キ管理人ヲ任設スルトキハ前條ノ規定又遺産ニ付キ破産ヲ開始スルトキハ第七十九條ノ規定ヲ適用ス

第八十二條 戰爭其他ノ事故ニ因リ裁判所ノ行務ヲ止メタルトキハ此事情ノ繼續開訴訟手續ヲ中斷ス

第八十三條 訴訟代理人ヲ以テ訴訟ヲ爲ス場合ニ於テ原告若クハ被告カ死亡シ又ハ訴訟能力ヲ失ヒ又ハ法律上代理人カ死亡シ又ハ其代理權カ消滅スルトキハ委任消滅ノ通知ニ因リ訴訟手續ヲ中斷ス訴訟手續ノ受繼ニ付テハ第七十八條、第八十條、第八十一條ノ規定ニ從フ

第八十四條 原告若クハ被告カ戰時兵役ニ服スルトキ又ハ官廳ノ布令、戰爭其他ノ事變ニ因リ受託裁判ト交通ノ絶エタル地ニ在ルトキハ受託裁判所ハ申立ニ因リ又ハ稱權ヲ以テ障礙ノ消除スルマテ訴訟手續ノ中止ヲ命スルコトヲ得

第八十五條 訴訟手續中止ノ申請ハ受託裁判所ニ之ヲ提出ス其申請ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得此裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ得

第八十六條 訴訟手續ノ中斷及ヒ中止ハ各期間ノ進行ヲ止メ及ヒ中斷又ハ中止ノ終リタル後更ニ全期間ノ進行ヲ始ムル效力ヲ有ス

中斷及ヒ中止ノ間本案ニ付キ爲シタル原告若クハ被告ノ訴訟行為ハ他ノ一方ニ對シ其效力ナシ口頭辯論ノ終結後ニ生シタル中斷ハ其辯論ニ基キテ爲スコトヲ得且チ裁判ノ言渡ヲ妨クルコト無シ

第八十七條 中斷シ又ハ中止シタル訴訟手續ノ受繼及ヒ本節ニ定メタル通知ハ原告若クハ被告ヨリ其書面ヲ受託裁判所ニ差出シ裁判所ハ相手方ニ之ヲ送達ス可シ

第八十八條 當事者ハ訴訟手續ヲ休止ス可キ合意ヲ爲スコトヲ得其合意ハ不停期間ノ進行ニ影響ヲ及ボサス

口頭辯論ノ期日ニ於テ當事者雙方出頭セサルトキハ訴訟手續ハ其一方ヨリ更ニ口頭辯論ノ期日ヲ定ム可キコトヲ申立ツルマテ之ヲ休止ス

一个年内ニ前項ノ申立ヲ爲ササルトキハ本節及ヒ反訴ヲ取下ケタルモノト看做ス

第八十九條 本節ノ規定其他此法律ノ規定ニ基キ訴訟手續ノ中止ヲ命スル裁判ニ對シテハ抗告ヲ爲スコトヲ得其中止ヲ拒ム裁判ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第二編 第一審ノ訴訟手續

第一章 地方裁判所ノ訴訟手續

第一節 判決前ノ訴訟手續

第九十條 訴ノ提起ハ訴狀ヲ裁判所ニ差出シテ之ヲ爲ス

○民事訴訟法

此訴狀ニハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要ス

丁四十二

第一 當事者及ヒ裁判所ノ表示

第二 起シタル請求ノ一定ノ目的物及ヒ其請求ノ一定ノ原因

第三 一定ノ申立

此他訴狀ハ準備書面ニ關スル一般ノ規定ニ從ヒ之ヲ作り且裁判所ノ管轄カ訴訟物ノ價額ニ依リ定ムル場合ニ於テ訴訟物カ一定ノ金額ニ非サルトキハ其價額ヲ掲ク可シ

第百九十一條 同一ノ被告ニ對スル原告ノ請求數箇アル場合ニ於テ其各請求ニ付キ受訴裁判所カ管轄權ヲ有シ且法律ニ於テ同一種類ノ訴訟手續ヲ許ストキハ原告ハ其請求ヲ一箇ノ訴ニ併合スルコトヲ得但民法ノ規定ニ反スルトキハ此限ニ在ラス

第百九十二條 訴狀カ第百九十條第一號乃至第三號ノ規定ニ適セサルトキハ相當ノ期間ヲ定メ裁判長ノ命令ヲ以テ其期間内ニ欠缺ヲ補正ス可キコトヲ命ス若シ原告此命ニ從ハサルトキハ其期間ノ満了後訴狀ヲ差出ス可シ

此差戻ノ命令ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第百九十三條 訴狀カ第百九十條第一號乃至第三號ノ規定ニ適スルトキハ口頭辯論ノ期日ヲ定メテ之ヲ被告ニ送達ス可シ

第百九十四條 訴狀ノ辯論ト口頭辯論ノ期日トノ間ニハ少ナクモ二十日ノ時間ヲ存スルコトヲ要ス外國ニ於テ送達ヲ施行ス可キトキハ裁判長相當ノ時間ヲ定ム

第百九十五條 訴訟物ノ權利拘束ハ訴狀ノ送達ニ因リテ生ス權利拘束ハ左ノ效力ヲ有ス

第一 權利拘束ノ繼續中原告若クハ被告ヨリ同一ノ訴訟物ニ付キ他ノ裁判所ニ於テ本訴又ハ反訴ヲ以テ請求ヲ爲シタルトキハ相手方ハ權利拘束ノ抗辯ヲ爲スコトヲ得

第二 受訴裁判所ノ管轄ハ訴訟物ノ價額ノ増減、住所ノ變更其他管轄ヲ定ムル事情ノ變更ニ因リテ變換スルコト無シ

第三 原告ハ訴ノ原因ヲ變更スル權利ナシ但變更シタル訴ニ對シ本案ノ口頭辯論前被告カ異議ヲ述ヘサルトキハ此限ニ在ラス

第百九十六條 原告カ訴ノ原因ヲ變更セスシテ左ノ諸件ヲ爲ストキハ被告ハ異議ヲ述フルコトヲ得ス

第一 事實上又ハ法律上ノ申述ヲ補充シ又ハ更正スルコト

第二 本案又ハ附帶請求ニ付キ訴ノ申立ヲ擴張シ又ハ減縮スルコト

第三 最初求メタル物ノ滅盡又ハ變更ニ因リ賠償ヲ求ムルコト

第百九十七條 訴ノ原因ニ變更ナシトスル裁判ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス

第百九十八條 訴ノ全部又ハ一分ハ本案ニ付キ被告ノ第一口頭辯論ノ始マルマテハ被告ノ承諾ナクシテ之ヲ取下ケ又其後口頭辯論ノ終結ニ至ルマテハ被告ノ承諾ヲ得テ之ヲ取下クルコトヲ得

訴ノ取下ハ口頭辯論ニ於テ之ヲ爲ササルトキハ書面ヲ以テ之ヲ爲ス可シ

訴狀ヲ既ニ送達シタル場合ニ於テハ訴取下ノ書面ハ之ヲ被告ニ送達ス可シ

適法ナル取下ハ權利拘束ノ總テノ効力ヲ消滅セシムル結果ヲ生ス

取下ケタル訴ヲ再ヒ起シタルトキハ被告ハ前訴訟費用ノ辨濟ヲ受クルマテ應訴ヲ拒ムコトヲ得

第百九十九條 訴狀送達ノ際十四日ノ期間内ニ答辯書ヲ差出ス可キコトヲ被告ニ催告ス可シ

答辯書ニハ準備書面ニ關スル一般ノ規定ヲ適用ス

○民事訴訟法

丁四十三

第二百條 訴カ管轄裁判所ニ於テ權利拘束ト爲リタルトキハ被告ハ原告ニ對シ其裁判所ニ反訴ヲ起スコトヲ得

然レトモ財産權上ノ請求ニ非サル請求ニ係ル反訴又ハ目的物ニ付キ專屬管轄ノ規定アル反訴ハ若シ其反訴カ本訴ナルトキ其裁判所ニ於テ管轄權ヲ有スコトナリ之ヲ爲スコトナリ得

第二百一條 反訴ハ答辯書若クハ特別ノ書面ヲ以テ又ハ口頭辯論中相手方ノ面前ニ於テ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

然レトモ答辯書差出ノ期間内ニ差出シタル書面ヲ以テ起ササル反訴ハ被告ノ請求ノ全部又ハ一分ト相殺ヲ爲スコトナリ得之ニ於テ同時ニ被告カ自己ノ過失ニ因ラスシテ其以前反訴ヲ起スヲ得サリシコトヲ疎明スルトキニ限り之ヲ爲スコトナリ得

第二百二條 訴ニ關スル此法律ノ規定ハ反訴ニ之ヲ適用ス但其規定ニ因リ差異ノ生スコトキハ此限ニ在ラス

第二百三條 裁判長ハ申立ニ因リ其命令ヲ以テ第九十九條ニ定メタル期間ヲ相當ニ短縮若クハ延長シ又第九十四條ニ定メタル時間ヲ切迫ナル危險ノ場合ニ限り二十四時マテニ短縮スルコトヲ得前項時間ノ短縮ハ此カ爲メ答辯書ヲ差出スコトヲ得サルトキト雖モ亦之ヲ爲スコトヲ得

第二百四條 各當事者ハ訴狀又ハ答辯書ニ掲ケサリシ事實上ノ主張若クハ證據方法又ハ申立ニ付キ相手方カ豫メ穿鑿ヲ爲スニ非サレハ陳述ヲ爲ス能ハスト豫知スル事項アルキハ口頭辯論ノ前ニ書面ニテ差出スコトナリ得但其書面ヲ相手方ニ送達スル時間及ヒ相手方チシテ必要ナル穿鑿ヲ爲ス時間ヲ得セシム可シ

ム可シ

口頭辯論ノ延期ヲ爲ストキハ裁判所ハ爾後必要ナル準備書面ヲ差出スコト期間ヲ定ムルコトヲ得

第二百五條 口頭辯論ハ一般ノ規定ニ從ヒテ之ヲ爲ス

第二百六條 妨訴ノ抗辯ハ本案ニ付テノ被告ノ辯論同時ニ之ヲ提出ス可シ

- 第一 無訴權ノ抗辯
- 第二 裁判所管轄權ノ抗辯
- 第三 權利拘束ノ抗辯
- 第四 訴訟能力ノ欠缺又ハ法律上代理ノ欠缺ノ抗辯
- 第五 訴訟費用保證ノ欠缺ノ抗辯
- 第六 再訴ニ付キ前訴訟費用未済ノ抗辯
- 第七 延期ノ抗辯

本案ニ付キ被告ノ口頭辯論ノ始マリタル後ハ妨訴ノ抗辯ハ被告ノ有效ニ拋棄スルコトヲ得サルモノナルトキ又ハ被告ノ過失ニ非スシテ本案ノ辯論前ニ其抗辯ヲ主張スル能ハサリシコトヲ疎明スルトキニ限り之ヲ主張スルコトヲ得

第二百七條 被告カ妨訴ノ抗辯ニ基キ本案ノ辯論ヲ拒ムトキ又ハ裁判所カ申立ニ因リ若クハ管轄權ヲ以テ別ニ辯論ヲ命スルトキハ其抗辯ニ付キ別ニ辯論ヲ爲シ及ヒ判決ヲ以テ裁判ヲ爲スコトナリ得

○民事訴訟法

第二百八條 裁判所ハ計算事件、財産分別及ヒ此ニ類スル訴訟ニ於テハ口頭辯論ヲ延期シ準備手續ヲ命スルコトヲ得但妨礙ノ抗辯アリタルトキハ其完結後之ヲ爲ス

第二百九條 攻撃及ヒ防禦ノ方法(反訴、抗辯、再抗辯等)ハ第二百一一條ニ規定スル制限ヲ以テ判決ニ接著スル口頭辯論終結ニ至ルマテ之ヲ提出スルコトヲ得

第二百十條 被告ヨリ時機ニ後レテ提出シタル防禦ノ方法ハ裁判所カ若シ之ヲ許スニ於テハ訴訟ヲ延ス可ク且被告ハ訴訟延延セシメントスル故意ヲ以テ又ハ甚シキ怠慢ニ因リ早ク之ヲ提出セザリシコトノ心證ヲ得タルトキハ申立ニ因リ之ヲ却下スルコトヲ得

第二百一一條 訴訟ノ進行中ニ争ト爲リタル權利關係ノ成立又ハ不成立カ訴訟ノ裁判ノ全部又ハ一分ニ影響ヲ及ホストキハ判決ニ接著スル口頭辯論ノ終結ニ至ルマテ原告ハ既ノ申立ノ擴張ニ依リ又被告ハ反訴ノ提起ニ依リ前決ヲ以テ其權利關係ヲ確定センコトヲ申立ツルコトヲ得

第二百二條 既狀其他ノ準備書面ニ於テ主張セサル請求ノ權利拘束ハ口頭辯論ニ於テ其請求ヲ主張シタル時ヲ以テ始マル

第二百三條 各當事者ハ事實上ノ主張ヲ證明シ又ハ之ヲ辯駁セン爲ニ用弁トスル證據方法ヲ開示シ且相手方ヨリ開示シタル證據方法ニ付キ陳述ス可シ

各箇ノ證據方法ニ付テノ證據申出及ヒ之ニ關スル陳述ハ第六節乃至第十節ノ規定ニ從フ
第二百十四條 證據方法及證據抗辯ハ判決ニ接著スル口頭辯論ノ終結ニ至ルマテ之ヲ主張スルコトヲ得

證據方法及ヒ證據抗辯ノ時機ニ後レタル提出ニ付テハ第二百十條ノ規定ヲ準用ス
第二百十五條 證據調查ニ證據決定ヲ以テスル特別ノ證據調手續ノ命令ハ第五節乃至第十節ノ規定ニ

從フ

第二百十六條 當事者ハ訴訟ノ關係ヲ表明シ證據調ノ結果ニ付キ辯論ヲ爲ス可シ
受命判事又ハ受託判事ノ面前ニ於テ證據調ヲ爲シタルトキハ當事者ハ證據調ニ關スル審問調書ニ基キ其結果ヲ演述ス可シ

第二百十七條 裁判所ハ民法又ハ此法律ノ規定ニ反セサル限りハ辯論ノ全旨趣及ヒ或ル證據調ノ結果ヲ斟酌シ事實上ノ主張ヲ眞實ナリト認ム可キヤ否ヤヲ自由ナル心證ヲ以テ判斷ス可シ

第二百十八條 裁判所ニ於テ顯著ナル事實ハ之ヲ證スルコトヲ要セス
第二百十九條 地方慣習法、商慣習及ヒ規約又ハ外國ノ現行法ハ之ヲ證ス可シ裁判所ハ當事者カ其證明ヲ爲スト否トニ拘ハラズ職權ヲ以テ必要ナル取調ヲ爲スコトヲ得

第二百二十條 此法律ノ規定ニ依リ事實上ノ主張ヲ説明ス可キトキハ裁判官ヲシテ其主張ヲ眞實ナリト認メシム可キ證據方法ヲ申出ツルヲ以テ足ル但即時ニ爲スコトヲ得サル證據調ハ説明ノ方法トシテ之ヲ許サス

第二百二十一條 裁判所ハ事件ノ如何ナル程度ニ在ルヲ問ハス自ラ又ハ受命判事若クハ受託判事ニ依リ訴訟又ハ或ル争點ノ和解ヲ試ムル權アリ和解ヲ試ムル爲ニハ當事者ノ自身出頭ヲ命スルコトヲ得

第二百二十二條 判決ヲ受ク可キ事項ノ申立ハ書面ニ基キ之ヲ爲スコトヲ要ス
書面ニ掲ケタル申立アルトキハ調書ニ附録トシテ添附ス可キ書面ヲ差出シテ之ヲ爲スコトヲ要ス
重要ノ點ニ於テ以前申立テタルモノト異ナル申立ニ付テモ亦同シ
本條ノ規定ヲ遵守セザルトキハ申立ナキモノト看做ス

第二百二十三條 前條ノ申立ヲ除ク外書面ニ掲ケサル重要ナル陳述又ハ其書面ノ旨趣ト重要ノ點ニ於

○民事訴訟法

ヲ違異ノ存スル事項ハ其差異カ附加、削除其他ノ變更ニ係ルチ開ハス申立ニ因リ又ハ裁權ヲ以テ罰
書若クハ其附録トシテ添附ス可キ爲メ差出シタル書面ニ依リテ之ヲ明確ニス可シ

第二百二十四條 當事者ハ訴訟記録ヲ閲覧シ且裁判所書記ヲシテ其正本、抄本及ヒ謄本ヲ付與セシム
ルコトヲ得

裁判長ハ第三者カ權利上ノ利害ヲ疎明スルトキニ限り當事者ノ承諾ナクシテ訴訟記録ノ閲覧及ヒ其
抄本並ニ謄本ノ付與ヲ許スコトヲ得

判決、決定、命令ノ草案及ヒ其準備ニ供シタル書類並ニ評議又ハ處罰ニ關スル書類ハ其原本ナルト
本ナルトナ開ハス之ヲ閲覧スルコトヲ許サス

第三節 判決

第二百二十五條 訴訟カ裁判ヲ爲スニ熟スルトキハ裁判所ハ終局判決ヲ以テ裁判ヲ爲ス同時ニ辯論及
ヒ裁判ヲ爲ス爲メ併合シタル數箇ノ訴訟中ノ一ノミ裁判ヲ爲スニ熟スルトキモ亦同シ

第二百二十六條 一ノ訴ヲ以テ起シタル數箇ノ請求中ノ一箇又ハ一箇ノ請求中ノ一分又ハ反訴ヲ起シ
タル場合ニ於テハ本訴者クハ反訴ノミ裁判ヲ爲スニ熟スルトキハ裁判所ハ終局判決(一分判決)ヲ以
テ裁判ヲ爲ス

然レトモ裁判所ハ事件ノ事情ニ從ヒテ一分判決ヲ相當トセサルトキハ之ヲ爲ササルコトヲ得

第二百二十七條 各箇ノ獨立ナル攻撃若クハ防禦ノ方法又ハ中間ノ争カ裁判ヲ爲スニ熟スルトキハ中
間判決ヲ以テ裁判ヲ爲スコトヲ得

第二百二十八條 請求ノ原因及ヒ數額ニ付キ争アルトキハ裁判所ハ先ツ其原因ニ付キ裁判ヲ爲スコト
ヲ得

請求ノ原因ヲ正常ナリトスル判決ハ上訴ニ關シテハ終局判決ト看做シ其判決確定ニ至ルマテ以後ノ
手續ヲ中止ス然レトモ裁判所ハ申立ニ因リ其數額ニ付キ辯論ヲ爲ス可キヲ命スルコトヲ得

第二百二十九條 口頭辯論ノ際原告其訴ヘタル請求ヲ拋棄シ又ハ被告之ヲ認諾スルトキハ裁判所ハ申
立ニ因リ其拋棄又ハ認諾ニ基キ判決ヲ以テ却下又ハ敗訴ノ旨渡ヲ爲ス可シ

第二百三十條 判決ハ辯論ヲ經タル總テノ攻撃及ヒ防禦ノ方法ヲ包括ス
然レトモ數箇ノ獨立ナル攻撃又ハ防禦ノ方法中其一箇ヲ適切ナリトスルトキハ裁判所ハ他ノ方法ニ
付キ判断スル義務ナシ

第二百三十一條 裁判所ハ申立テサル事物ヲ原告若クハ被告ニ歸セシムル權ナシ
裁判所ハ終局判決ヲ爲ス場合ニ於テハ訴訟費用ノ負擔ニ限リ申立アラサルモ判決ヲ爲ス可シ然レト
モ一分判決ヲ爲ス場合ニ於テハ費用ノ裁判後ノ判決ニ隨ルコトヲ得

第二百三十二條 判決ハ其基本タル口頭辯論ニ應席シタル判事ニ限り之ヲ爲ス

第二百三十三條 判決ハ口頭辯論ノ終結スル期日又ハ直チニ指定スル期日ニ於テ之ヲ言渡ス但其期日
ハ七日ヲ過クルコトヲ得ス

第二百三十四條 判決ノ言渡ハ判決主文ノ朗讀ニ因リ之ヲ爲ス朗讀判決ノ言渡ハ其主文ヲ作ラサル前
ト雖モ之ヲ爲スコトヲ得

裁判ノ理由ヲ言渡スコトヲ至當ト認ムルトキハ判決ノ言渡ト同時ニ其理由ヲ朗讀シ又ハ口頭ニテ其
要領ヲ告ク可シ

第二百三十五條 判決ノ言渡ハ當事者又ハ其一方ノ在廷スルト否トニ拘ハラズ其効力ヲ有ス

言渡アリタル判決ニ基キ訴訟手續ヲ續行シ又ハ他ニ其判決ヲ使用スル原告若クハ被告ノ權ハ此法條

○民事訴訟法

ニ特定シタル場合ヲ除ク外相手方ニ其判決ヲ送達スルト否トニ拘ハラサルモノトス
第二百三十六條 判決ニハ左ノ附件ヲ掲ク可シ

第一 當事者及ヒ其法律上代理人ノ氏名、身分、職業及ヒ住所

第二 事實及ヒ争點ノ揭示但し其揭示ハ當事者ノ口頭演述ニ基キ殊ニ其提出シタル申立ヲ表示シテ之ヲ爲ス

第三 裁判ノ理由

第四 判決主文

第五 裁判所ノ名稱、裁判ヲ爲シタル判事ノ官氏名

第二百三十七條 判決ノ原本ニハ裁判ヲ爲シタル判事署名捺印ス若シ陪席判事署名捺印スルニ差支アルトキハ其理由ヲ開示シテ裁判長其旨ヲ附記シ裁判長差支アルトキハ官等最モ高キ陪席判事之ヲ附記ス

判決ノ原本ハ言渡ノ日ヨリ起算シテ七日内ニ裁判所書記ニ之ヲ交付ス可シ

裁判所書記ハ言渡ノ日及ヒ原本領收ノ日ヲ原本ニ附記シ且其附記ニ署名捺印ス可シ

第二百三十八條 各當事者ハ判決ノ送達アラントキ申立ツルコトヲ得其申立アリタルトキハ判決ノ正本ヲ送達ス可シ

第二百三十九條 未タ判決ヲ言渡サヌ又ハ未タ判決ノ原本ニ署名捺印セサル間ハ裁判所書記ハ其正本、抄本及ヒ勝本ヲ付與スルコトヲ得ス

裁判所書記ハ判決ノ正本、抄本及ヒ勝本ニ署名捺印シ且裁判所ノ印ヲ捺シテ之ヲ認認ス可シ

第二百四十條 裁判所ハ其言渡シタル終局判決及ヒ中間判決ノ中ニ含シタル裁判ニ覆束セラル

第二百四十一條 裁判所ハ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ何時ニテモ判決中ノ遺漏、誤謬及ヒ其ニ類スル著シキ誤謬ヲ更正ス

此更正ニ付テハ口頭辯論ヲ經シテ裁判ヲ爲スコトヲ得

右更正ノ申立ヲ却下スル決定ニ對シテハ上訴ヲ爲スコトヲ得ス更正ヲ宣言スル決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第二百四十二條 主タル請求若クハ附帶ノ請求又ハ費用ノ全部若クハ一分ノ裁判ヲ爲スニ際シ脱漏シタルトキハ申立ニ因リ追加ノ裁判ヲ以テ判決ヲ補充ス可シ

判決ノ言渡後直チニ追加裁判ノ申立ヲ爲ササルトキハ遅クモ判決ノ正本ヲ送達シタル日ヨリ起算シテ七日ノ期間内ニ之ヲ爲スコトヲ要ス

追加裁判ノ申立アルトキハ即時ニ又ハ新期日ヲ定メテ口頭辯論ヲ爲サシム可シ其辯論ハ既訟ノ完結セサル部分ニ限り之ヲ爲ス

第二百四十三條 判決ヲ更正シ又ハ補充スル裁判ハ判決ノ原本及ヒ正本ニ之ヲ追加シ若シ正本ニ之ヲ追加スルコトヲ得サルトキハ更正又ハ補充ノ裁判ノ正本ヲ作ル可シ

第二百四十四條 判決ハ其主文ニ包含スルモノニ限り確定力ヲ有ス

第二百四十五條 口頭辯論ニ基キ爲ス裁判所ノ決定ハ之ヲ言渡スコトヲ要ス

第二百三十三條 第二百三十四條ノ規定ハ裁判所ノ決定ニ之ヲ準用シ又第二百三十五條、第二百三十九條及ヒ第二百四十條ノ規定ハ裁判所ノ決定及ヒ裁判長並ニ受命判事又ハ受託判事ノ命令ニ之ヲ準用ス

言渡ヲ爲ササル裁判所ノ決定及ヒ言渡ヲ爲ササル裁判長並ニ受命判事又ハ受託判事ノ命令ハ職務ヲ以テ之ヲ當事者ニ送達ス可シ

第三節 關席判決

第二百四十六條 原告若クハ被告口頭辯論ノ期日ニ出頭セサル場合ニ於テハ出頭シタル相手方ノ申立ニ因リ關席判決ヲ爲ス

第二百四十七條 出頭セサル一方カ原告ナルトキハ裁判所ハ關席判決ヲ以テ其訴ノ却下ヲ言渡ス可シ

第二百四十八條 出頭セサル一方カ原告ナルトキハ裁判所ハ被告カ原告ノ事實上ノ口頭供述ヲ自白シタルモノト看做シ原告ノ請求ヲ正當ト爲ストキハ關席判決ヲ以テ被告ノ敗訴ヲ言渡シ又其請求ヲ正當ト爲ササルトキハ其訴ノ却下ヲ言渡ス可シ

第二百四十九條 延期シタル口頭辯論ノ期日又ハ口頭辯論ヲ續行スル爲ニ定ムル期日モ亦第二百四十六條ノ辯論期日ニ同シ

第二百五十條 原告若クハ被告出頭スルモ辯論ヲ爲ササルトキ又ハ辯論ヲ爲サスシテ任意ニ退廷シタルトキハ出頭セサルモノト看做ス

第二百五十一條 原告若クハ被告カ本案ノ辯論ヲ爲シタルトキハ各箇ノ事實、證據又ハ發問ニ付キ陳述ヲ爲サス又ハ任意ニ退廷スルモ本節ノ規定ヲ適用セス

第二百五十二條 左ノ場合ニ於テハ關席判決ノ申立ヲ却下ス然レトモ出頭シタル原告若クハ被告ハ口頭辯論ノ延期ヲ申立ツルコトヲ得

第一 出頭シタル原告若クハ被告カ裁判所ノ職務上調査ス可キ事情ニ付キ必要ナル證明ヲ爲ス能ハサルトキ

第二 出頭セサル原告若クハ被告ニ口頭上事實ノ供述又ハ申立ヲ適當ナル時期ニ書面ヲ以テ通知セサルトキ

辯論ヲ延期シタルトキハ出頭セサル原告若クハ被告ヲ新期日ニ呼出ス可シ

第二百五十三條 關席判決ノ申立ヲ却下スル決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得又其決定ヲ取消シタルトキハ出頭セサル原告若クハ被告ヲ新期日ニ呼出サスシテ關席判決ヲ爲ス

第二百五十四條 裁判所ハ左ノ場合ニ於テハ職務ヲ以テ關席判決ノ申立ニ付テノ辯論ヲ延期スルコトヲ得

第一 出頭セサル原告若クハ被告カ合式ニ呼出サレザリシトキ

第二 出頭セサル原告若クハ被告カ天災其他避ク可カラサル事變ノ爲ニ出頭スル能ハサルコトノ眞實ト認ム可キ事情アルトキ

出頭セサル原告若クハ被告ハ新期日ニ之ヲ呼出ス可シ

第二百五十五條 關席判決ヲ受ケタル原告若クハ被告ハ其判決ニ對シテ故障ヲ申立ツルコトヲ得

故障申立ノ期間ハ十四日トス此期間ハ不變期間ニシテ關席判決ノ送達ヲ以テ始マル

故障申立ハ判決ノ送達前ト雖モ之ヲ爲スコトヲ得

外國ニ於テ送達ヲ爲スコトキ又ハ公ノ告示ヲ以テ之ヲ爲スコトキハ裁判所ハ關席判決ニ於テ故障期間ヲ定メ又ハ後日決定ヲ以テ之ヲ定ム此決定ハ口頭辯論ヲ終スシテ爲スコトヲ得

第二百五十六條 故障申立ハ關席判決ヲ爲シタル裁判所ニ書面ヲ差出シテ之ヲ爲ス

此書面ニハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要ス

第一 故障ヲ申立テラレタル關席判決ノ表示

○民事訴訟法

丁五十三

第二 其判決ニ對スル故障ノ申立

此書面ニハ本案ニ付テノ口頭辯論準備ノ爲ニ必要ナル事項アルトキモ亦之ヲ因ク可シ

第二百五十七條 判然許ス可カラサル故障又ハ判然法律上ノ方式ニ適セス若クハ其期間ノ經過後ニ起シタル故障ハ裁判所ノ命令ヲ以テ之ヲ却下ス可シ

此却下ノ命令ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第二百五十八條 前條ノ場合ヲ除ク外裁判所ハ故障申立ノ書面ヲ相手方ニ送達シ且故障ニ付キ口頭辯論ノ新期日ヲ定メ當事者ノ雙方ヲ呼出ス可シ

第二百五十九條 裁判所ハ職權ヲ以テ故障ヲ許ス可キヤ否ヤ又法律上ノ方式ニ從ヒ若クハ其期間ニ於テ故障ヲ申立テタルヤ否ヤヲ調査ス可シ

若シ此要件ノ一ヲ缺クトキハ判決ヲ以テ故障ヲ不適法トシテ棄却ス

第二百六十條 故障ヲ適法トスルトキハ訴訟ハ開席前ノ程度ニ復ス

第二百六十一條 新辯論ニ基キ爲ス可キ判決ハ開席判決ト符合スルトキハ開席判決ヲ維持スルコトヲ言渡シ其符合セサル場合ニ於テハ新判決ニ於テ開席判決ヲ廢棄ス

第二百六十二條 法律ニ從ヒ開席判決ヲ爲シタルトキ開席ニ因リテ生ザル費用ハ相手方ノ不常ナル異議ニ因リ生セサルモノニ限り故障ノ爲メ開席判決ヲ變更スル場合ニ於テモ其開席シタル原告若クハ被告ニ之ヲ負擔セシム

第二百六十三條 故障ヲ申立テタル原告若クハ被告口頭辯論ノ期日又ハ辯論延期ノ期日ニ出頭セサルトキハ第二百五十二條及ヒ第二百五十四條ニ規定シタル場合ヲ除ク外出頭シタル相手方ノ申立ニ因リ故障ヲ棄却スル新開席判決ヲ言渡ス

新開席判決ニ對シテハ故障ヲ申立ツルコトヲ得ス

第二百六十四條 故障ノ拋棄及ヒ其取下ニ付テハ控訴ノ拋棄及ヒ其取下ニ付テノ規定ヲ適用ス

第二百六十五條 本節ノ規定ハ反訴又ハ既ニ原因ノ確定シタル請求ノ數額ノ定テ目的物トスル訴訟手續ニ之ヲ準用ス

中間訴訟ノ辯論ノ爲メ期日ヲ定メタルトキハ其開席訴訟手續及ヒ開席判決ハ其中間訴訟ヲ完結スルニ止マリ本節ノ規定ヲ之ニ準用ス

第四節 計算事件、財産分別及ヒ此ニ類スル訴訟ノ準備手續

第二百六十六條 計算ノ當否、財産ノ分別又ハ此ニ類スル關係ヲ目的トスル訴訟ニ於テ計算書又ハ財産目錄ニ對シ許多ノ爭アル請求ノ生シ又ハ許多ノ爭アル異議ノ生シタルトキハ受訴裁判所ハ受命判事ノ面前ニ於ケル準備手續ヲ命スルコトヲ得

第二百六十七條 準備手續ヲ命スル決定ヲ言渡スニ際シ裁判長ハ受命判事ヲ指定シ決定施行ノ期日ヲ定ム可シ若シ裁判長此期日ヲ定メサルトキハ受命判事之ヲ定ム又受命判事其委任ヲ施行スルニ差支アルトキハ裁判長更ニ他ノ判事ヲ任ス

第二百六十八條 準備手續ニ於テハ調書ヲ以テ左ノ諸件ヲ明確ニス可シ

- 第一 如何ナル請求ヲ爲スヤ及ヒ如何ナル攻撃、防禦ノ方法ヲ主張スルヤ
- 第二 如何ナル請求及ヒ如何ナル攻撃、防禦ノ方法ヲ爭フヤ又ハ之ヲ爭ハサルヤ
- 第三 爭ト爲リタル請求及ヒ爭ト爲リタル攻撃、防禦ノ方法ニ付テハ其實上ノ關係及ヒ當事者ノ表示シタル證據方法、主張シタル證據抗辯、證據方法並ニ證據抗辯ニ關シテ爲シタル陳述及ヒ提出シタル申立

○民事訴訟法

此手續ハ受訴裁判所ニ於テ訴訟又ハ中間訴訟カ判決又ハ證據決定ヲ爲スニ熟スルマテ之ヲ續行ス可シ
第二百六十九條 原告若クハ被告カ期日ニ於テ受命判事ノ面前ニ出頭セサルトキハ受命判事ハ前條ノ
規定ニ依リ調書ヲ以テ出頭シタル原告若クハ被告ノ提供ヲ明確ニシ且新期日ヲ定メ出頭セサル原告
若クハ被告ニハ調書ノ原本ヲ付與シテ新期日ニ之ヲ呼出ス可シ

原告若クハ被告カ新期日ニモ亦出頭セサルトキハ送達セシ調書ニ掲ケタル相手方ノ事實上ノ主張ヲ
自由シタリト看做シ其主張ニ付テノ準備手續ハ完結シタルモノトス

第二百七十條 受訴裁判所ハ準備手續ノ終結後ニ口頭辯論ノ期日ヲ定メ之ヲ當事者ニ通知ス可シ

第二百七十一條 當事者ハ口頭辯論ニ於テ準備手續ノ結果ヲ調書ニ基キ演述ス可シ

原告若クハ被告カ出頭セサルトキハ準備手續ニ於テ争ハサル請求ハ一分判決ヲ以テ之ヲ完結ス其他
ニ付テハ申立ニ因リテ闕席判決ヲ爲ス可シ

第二百七十二條 受命判事ノ調書ヲ以テ明確ニス可キ事實又ハ證書ニ付キ陳述ヲ爲サス又ハ之ヲ拒ミ
タルトキハ口頭辯論ニ於テ之ヲ追完スルコトヲ得ス

請求、攻撃若クハ防禦ノ方法、證據方法及ヒ證據抗辯ニシテ受命判事ノ調書ヲ以テ之ヲ明確ニセサル
モノニ付テハ後日ニ至リ始メテ生シ又ハ後日ニ至リ始メテ原告若クハ被告ノ知りタルコトヲ疎明ス
ルトキニ限り口頭辯論ニ於テ之ヲ主張スルコトヲ得

第五節 證據調ノ總則

第二百七十三條 證據調ハ受訴裁判所ニ於テ之ヲ爲スヲ以テ通例トス

證據調ハ此法律ニ定メタル場合ニ限り受訴裁判所ノ部員一名ニ之ヲ命シ又ハ區裁判所ニ之ヲ囑託ス
ルコトヲ得

此證據調ヲ命スル決定ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス

第二百七十四條 當事者ノ申立テタル數多ノ證據中其調フ可キ限度ハ裁判所之ヲ定ム

當事者ノ演述ニ引續キ直チニ證據調ヲ爲サスシテ受訴裁判所ニ於テ新期日ニ之ヲ爲シ又ハ受命判事
若クハ受託判事ノ面前ニ於テ之ヲ爲ス可キトキハ證據決定ニ因リ之ヲ命ス可シ

第二百七十五條 證據調ニ付キ不定時間ノ賦得アルトキハ申立ニ因リ相當ノ期間ヲ定ム可シ此期間ノ
滿了後ト雖モ訴訟手續ヲ遲滞セシメサル限リハ其證據方法ヲ用ヰルコトヲ得

第二百七十六條 證據決定ニハ左ノ諸件ヲ拘ク可シ

第一 證ス可キ係爭事實ノ表示

第二 證據方法ノ表示殊ニ證人又ハ鑑定人ヲ誦問ス可キトキハ其表示

第三 證據方法ヲ申出テタル原告若クハ被告ノ表示

第二百七十七條 證據決定ノ變更ハ其決定ノ施行完結前ニ在リテ新ナル辯論ニ基クトキニ限り之ヲ申
立ツルコトヲ得

證據決定ノ施行ハ職權ヲ以テ之ヲ爲ス

第二百七十八條 受訴裁判所ノ部員カ證據調ヲ爲ス可キトキハ裁判長證據決定旨通シ際受命判事ヲ指
名シ且證據調ノ期日ヲ定ム若シ其期日ヲ定メサルトキハ受命判事之ヲ定ム

受命判事其命ヲ施行スルニ差支アルトキハ裁判長更ニ他ノ部員ヲ命ス

第二百七十九條 他ノ裁判所ニ於テ證據調ヲ爲ス可キトキハ裁判長ハ其囑託書ヲ發ス可シ

證據調ニ關スル書類ハ原本ヲ以テ受託判事ヨリ受訴裁判所書記ニ之ヲ送致シ其書記ハ之ヲ受領シタ
ルコトヲ當事者ニ通知ス可シ

○民事訴訟法

第二百八十條 受命判事又ハ受託判事カ證據調ノ期日ヲ定メタルトキハ其期日及ヒ場所ヲ當事者ニ通知ス可シ

第二百八十一條 外國ニ於テ爲ス可キ證據調ハ外國ノ管轄官廳又ハ其國駐在ノ帝國ノ公使若クハ領事ニ囑託シテ之ヲ爲ス其囑託ニ付テハ第五百五十二條及ヒ第五百五十五條ノ規定ヲ準用ス

第二百八十二條 受命判事又ハ受託判事ハ他ノ裁判所ニ於テ證據調ヲ爲ス可キコトノ至當ナル原因ノ爾後ニ生シタルトキハ其裁判所ニ證據調ヲ囑託スルコトヲ得此囑託ヲ爲シタルトキハ當事者ニ之ヲ通知ス可シ

第二百八十三條 受命判事又ハ受託判事ノ面前ニ於テ證據調ノ際ニ争ヲ生シ其争ノ完結スルニ非サルハ證據調ヲ續行スルコトヲ得且其判事ノ裁量スル權ナキトキハ其完結ハ受託裁判所之ヲ爲ス
第二百八十四條 當事者ノ一方又ハ雙方證據調ノ期日ニ出頭セサル事件ノ程度ニ因リ爲シ得ヘキ限リハ證據調ヲ爲ス可シ

原告若クハ被告ノ出頭セサルカ爲ニ證據調ノ全部又ハ一分ヲ爲スコトヲ得サル場合ニ於テハ其追完又ハ補充ハ此カ爲メ訴訟手續ノ遲滞セサルトキ又ハ舉證者其過失ニ非スシテ前期日ニ出頭スル能ハサリシコトヲ疏明スルトキニ限り判決ニ據テ著スル口頭辯論ノ終結ニ至ルマテ申立ニ因リ之ヲ命ス
第二百八十五條 裁判所ハ事件ノ未タ判決ヲ爲スニ熟セスト認ムルトキハ證據調ノ補充ヲ決定スルコトヲ得

第二百八十六條 證據調又ハ其續行ノ爲メ新期日ヲ定ムル必要アルトキハ舉證者又ハ當事者雙方前期日ニ出頭セサリシトキト雖モ職權ヲ以テ之ヲ定ム

第二百八十七條 受託裁判所ニ於テ證據調ヲ爲ストキハ其期日ハ同時ニ口頭辯論ヲ續行スル期日ナ

トス

受命判事又ハ受託判事ノ面前ニ於テ證據調ヲ爲ス可キコトヲ命シタルトキハ受命裁判所ハ證據調定中ニ併セテ口頭辯論ヲ續行ノ期日ヲ定ムルコトヲ得若シ之ヲ定メサルトキハ證據調ノ終結後職權ヲ以テ其期日ヲ定メ之ヲ當事者ニ通知ス可シ

第二百八十八條 舉證者ハ裁判所ノ定ムル期間内ニ證據調ノ費用ヲ豫納ス可シ若シ其期間内ニ豫納セサルトキハ證據調ヲ爲サス但期間ノ滿了後ト雖モ豫納シタルトキハ訴訟手續ノ遲滞ヲ生セサル場合ニ限り證據調ヲ許ス

第六節 人證

第二百八十九條 何人ヲ問ハス法律ニ別段ノ規定ナキ限りハ民事訴訟ニ關シ裁判所ニ於テ證言スル義務アリ

第二百九十條 官吏、公使ハ退職ノ後ト雖モ其職務上默秘ス可キ義務アル事情ニ付テハ其所屬國又ハ其最後ノ所屬國ノ許可ヲ得タルトキニ限り證人トシテ之ヲ訊問スルコトヲ得大臣ニ付テハ勅許ヲ得ルコトヲ要ス

此許可ハ證言カ國家ノ安寧ヲ害スル恐アルトキニ限り之ヲ拒ムコトヲ得
右許可ハ受託裁判所ヨリ之ヲ求メ且證人ニ之ヲ通知ス可シ

第二百九十一條 人證ノ申出ハ證人ヲ指名シ及ヒ證人ノ訊問ヲ受ク可キ事實ヲ表示シテ之ヲ爲ス
第二百九十二條 證人ノ呼出狀ニハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要ス

- 第一 證人及ヒ當事者ノ表示
- 第二 證據決定ノ旨趣ニ依リ訊問ヲ爲ス可キ事實ノ表示

○民事訴訟法

第三 證人ノ出頭ス可キ場所及ヒ日時

第四 出頭セサルトキハ法律ニ依リ處罰ス可キ旨

第五 裁判所ノ名稱

第二百九十三條 豫備(後備)ノ軍籍ニ在ラサル軍人、軍屬ヲ證人トシテ呼出スニハ其所屬ノ長官又ハ隊長ニ囑託シテ之ヲ爲ス其長官又ハ隊長ハ期日ヲ遵守セシムル爲ニ其呼出ヲ受ケタル者ノ關聯ヲ許ス可シ若シ軍務上之ヲ許ス能ハサルトキハ其旨ヲ裁判所ニ通知シ且他ノ期日ヲ定ムル求テ爲ス義務アリ

第二百九十四條 合式ニ呼出ラレタル證人ニシテ正當ノ理由ナク出頭セサル者ニ對シテハ申立ナシト雖モ決定ヲ以テ其不參ニ因リ生シタル費用ノ賠償及ヒ貳拾圓以下ノ罰金ヲ言渡ス可シ

證人リ再度出頭セサル場合ニ於テハ更ニ費用ノ賠償及ヒ罰金ヲ言渡ス可シ又其勾引ヲ命スルコトヲ得

證人ハ右ノ決定ニ對シテ抗告ヲ爲スコトヲ得此抗告ハ執行ヲ停止スル効力ヲ有ス

豫備(後備)ノ軍籍ニ在ラサル軍人、軍屬ニ對スル罰金ノ言渡及ヒ執行ハ軍事裁判所又ハ所屬ノ長官又ハ隊長ニ囑託シテ之ヲ爲ス其勾引ニ付テモ亦同シ

第二百九十五條 證人其出頭セザリシコトヲ後日ニ正當ノ理由ヲ以テ辯解スルトキハ罰金及賠償ノ決定ヲ取消ス可シ

證人ノ不參屆及ヒ決定取消ノ申請ハ書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

第二百九十六條 皇族證人ナルトキハ受命判事又ハ受託判事ハ其所在ニ就キ訊問ヲ爲ス

各大臣ニ付テハ其官廳ノ所在地ニ於テ之ヲ訊問ス若シ其所在地外ニ滞在スルトキハ其現在地ニ於テ之ヲ訊問ス

帝國議會ノ議員ニ付テハ開會期間其議會ノ所在地ニ滞在中ハ其所在地ニ於テ之ヲ訊問ス

第二百九十七條 左ニ掲グル者ハ證言ヲ拒ムコトヲ得

第一 原告若クハ被告又ハ其配偶者ト親族ナルトキ但姻族ニ付テハ婚姻ノ解除シタルトキト雖モ亦同シ

第二 原告若クハ被告ノ後見ヲ受クル者

第三 原告若クハ被告ト同居スル者又ハ雇人トシテ之ニ任フル者

裁判長ハ訊問前ニ前項ノ者ニ證言ヲ拒ム權利アル旨ヲ告ケ可シ

第二百九十八條 左ノ場合ニ於テハ證言ヲ拒ムコトヲ得

第一 官吏、公吏又ハ官吏、公吏タリシ者カ其職務上默秘ス可キ義務アル事情ニ臨スルトキ

第二 醫師、藥師、産婆、辯護士、公證人、神職及ヒ僧侶カ其身分又ハ職業ノ爲メ委託ヲ受ケタルニ因リテ知リタル事實ニシテ默秘ス可キモノニ關スルトキ

第三 問ニ付テノ答辯カ證人又ハ前條ニ掲ケタル者ノ耻辱ニ歸スルカ又ハ其刑罰上ノ派迫ヲ招ク恐アルトキ

第四 問ニ付テノ答辯カ證人又ハ前條ニ掲ケタル者ノ爲メ直接ニ財産權上ノ損害ヲ生セシム可キトキ

第五 證人カ其技術又ハ職業ノ秘密ヲ公ニスルニ非サレハ答辯スルコト能ハサルトキ

第二百九十九條 證人ハ第二百九十七條第一號及ヒ第二百九十八條第四號ノ場合ニ於テ左ノ事項ニ付キ證言ヲ拒ムコトヲ得ス

第一 家族ノ出產、婚姻又ハ死亡

○民事訴訟法

第二 家族ノ關係ニ因リ生スル財産事件ニ關スル事實

第三 證人トシテ立會ヒタル場合ニ於ケル權利行為ノ成立及ヒ旨趣

第四 原告若クハ被告ノ前主又ハ代理人トシテ係争ノ權利關係ニ關シ爲シタル行為

前條第一號、第二號ニ掲ケタル者其黙秘ス可キ義務ヲ免除セラレタルトキハ證言ヲ拒ムコトヲ得ス

第三百條 證言ヲ拒ム證人ハ其誦問ノ期日前ニ書面又ハ口頭ヲ以テ又ハ期日ニ於テ其拒絕ノ原因タル事實ヲ開示シ且之ヲ説明ス可シ

期日前ニ證言ヲ拒ミタル證人ハ期日ニ出頭スル義務ナシ

裁判所書記ハ拒絕ノ書面ヲ受領シ又ハ其陳述ニ付キ調書ヲ作りタルトキ之ヲ當事者ニ通知ス可シ

第三百一條 拒絕ノ當否ニ付テハ受訴裁判所當事者ヲ審訊シタル後決定ヲ以テ其裁判ヲ爲ス但第二百九十八條第一號ノ場合ニ於テ爲シタル拒絕ノ當否ニ付テハ所屬廳又ハ最後ノ所屬廳ノ裁定ニ任ス

原告若クハ被告カ出頭セサルトキハ出頭シタル者ノ申述ヲ斟酌シテ決定ヲ爲ス

右決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得此抗告ハ執行ヲ停止スル效力ヲ有ス

第三百二條 原因ヲ開示セスシテ證言ヲ拒ミ又ハ開示シタル原因ノ棄却確定シタル後ニ之ヲ拒ミタルトキハ申立テ要セスシテ決定ヲ以テ證人ニ對シ其拒絕ニ因リテ生シタル費用ノ賠償及ヒ四十圓以下ノ罰金ヲ曾渡ス

證人ハ費用ノ賠償及ヒ罰金ノ曾渡ニ對シ抗告ヲ爲スコトヲ得此抗告ハ執行ヲ停止スル效力ヲ有ス

豫備ノ後備ノ軍籍ニ在ラサル軍人、軍屬ニ對スル罰金ノ曾渡及ヒ執行ハ軍事裁判所ニ囑託シテ之ヲ爲ス

第三百三條 原告若クハ被告ハ相手方ト相手方ノ證人トノ間ニ第二百九十七條第一號乃至第三號ノ關

係アルトキハ其證人ヲ忌避スルコトヲ得

第三百四條 忌避ノ申請ハ證人ノ誦問前ニ之ヲ爲スコトヲ得此期限後ハ其前ニ忌避ノ原因ヲ主張スルヲ得

サリシコトヲ説明スルトキニ限り其證人ヲ忌避スルコトヲ得

忌避ノ申請ハ書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

忌避ノ原因ハ之ヲ説明ス可シ

第三百五條 忌避ノ申請ニ付テノ裁判ハ口頭辯論ヲ經シテ之ヲ爲スコトヲ得

忌避ノ原因アリト宣言スル決定ニ對シテハ上訴ヲ爲スコトヲ得忌避ノ原因ナシト宣言スル決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第三百六條 各證人ニハ其腕帶ス可キ呼出狀其他適當ノ方法ヲ以テ人違ナラサルコトヲ判然ナラシメ

タル後誦問前各別ニ宣誓ヲ爲サシム可シ

然レトモ宣誓ハ特別ノ原因アルトキ殊ニ之ヲ爲サシム可キヤ否ヤニ付キ疑ノ存スルトキハ誦問ノ終

ルマテ之ヲ延フルコトヲ得

第三百七條 證人ハ誦問前ニ宣誓ヲ爲スコキ場合ニ於テハ良心ニ從ヒ眞實ヲ述ヘ何事ヲモ黙秘セス又

何事ヲモ附加セサル旨ヲ誓テ宣フ可シ

又誦問後ニ宣誓ヲ爲スコキ場合ニ於テハ良心ニ從ヒ眞實ヲ述ヘ何事ヲモ黙秘セス又何事ヲモ附加セ

サリシ旨ヲ誓テ宣フ可シ

第三百八條 判事ハ宣誓前ニ相當ナル方法ヲ以テ宣誓者ニ偽證ノ罰ヲ諭示ス可シ

第三百九條 宣誓ヲ拒ム證人ニ付テハ第三百條乃至第三百二條ノ規定ヲ適用ス

第三百十條 左ノ者ハ宣誓ヲ爲サシメスシテ參考ノ爲メ之ヲ誦問スルコトヲ得

○民事訴訟法

丁六十三

- 第一 証問ノ時未タ満十六歳ニ達セサル者
- 第二 宣誓ノ何物タルヤチ了解スルニ必要ナル精神上ノ發達ノ缺クル者
- 第三 刑事上ノ判決ニ因リ公權ヲ剝奪又ハ停止セラレタル者
- 第四 第二百九十七條及ヒ第二百九十八條第三號並ニ第四號ノ規定ニ依リ證書ヲ拒絶スル權利アリテ之ヲ行使セサル者但第二百九十八條第三號並ニ第四號ノ場合ニ於テハ拒絶ノ權利ニ關スル事實ニ付キ證書ヲ爲スコトヲ申立テラレタルトキニ限ル
- 第五 訴訟ノ成務ニ直接ノ利害關係ヲ有スル者
- 第三百十一條 証人証問ハ後ニ証問ス可キ証人ノ在ラサル場所ニ於テ各別ニ之ヲ爲ス
- 証人ノ供述互ニ齟齬シタルトキハ之ヲ對質セシムルコトヲ得
- 第三百十二條 証人証問ハ証人ニ其氏名、年齢、身分、職業及ヒ住居ヲ開フヲ以テ始マル又必要ナル場合ニ於テハ其事件ニ於テ證書ノ信用ニ關スル事情殊ニ當事者トノ關係ニ付テノ問ヲ爲スコシ
- 第三百十三條 証人ニハ其証問事項ニ付キ知りタルモノヲ率直ニテ供述セシム可シ
- 証人ノ供述ヲ明白及ヒ完全ナラシメ且其知り得タル原因ヲ察覺スル爲メ必要ナル場合ニ於テハ尙ホ他ノ問ヲ發スコシ
- 第三百十四條 証人ハ其供述ニ換ヘテ書類ヲ朗讀シ其他證書ヲ用ヰルコトヲ得ス但筆談ノ關係ニ限リ證書ヲ用ヰルコトヲ得
- 第三百十五條 陪席判事ハ裁判長ニ告ケテ証人ニ問ヲ發スルコトヲ得
- 當事者ハ証人ニ對シ自ラ問ヲ發スルコトヲ得然レトモ當事者ハ証人ノ供述ヲ明白ナラシムル爲ニ其必要ナリトスル問ヲ發センコトヲ裁判長ニ申立ツルコトヲ得

發問ノ許否ニ付キ異議アルトキハ裁判所ハ直チニ之ヲ裁判ス

第三百十六條 調書ニハ証人カ其証問ノ前若クハ後ニ宣誓シタルヤ又ハ宣誓セシテ証問ヲ受ケタルヤチ記載ス可シ

第三百十七條 受訴裁判所ハ左ノ場合ニ於テ証人ノ再証問ヲ命スルコトヲ得

- 第一 証人証問カ法律上ノ規定ニ違ヒタルトキ
- 第二 証人証問ノ完全ナラザルトキ
- 第三 証人ノ供述カ明白ナラス又ハ兩義ニ涉ルトキ
- 第四 証人カ其供述ノ補充又ハ更正ヲ申立ツルトキ
- 第五 此他裁判所カ再証問ヲ必要トスルトキ

第三百十八條 左ノ場合ニ於テ証人ニ依レル證據調ハ受訴裁判所ノ部員一名ニ之ヲ命シ又ハ區裁判所ニ之ヲ囑託スルコトヲ得

- 第一 眞實ヲ探知スル爲メ現場ニ就キ証人ヲ証問スルノ必要ナルトキ
- 第二 証人カ疾病其他ノ事由ノ爲メ受訴裁判所ニ出頭スル能ハサルトキ
- 第三 証人カ受訴裁判所ノ所在地ヨリ遠隔ノ地ニ在リテ其裁判所ニ出頭スルニ付キ不相應ノ時日及ヒ費用ヲ要スルトキ

第三百十九條 第二百九十四條、第二百九十五條、第三百二條及ヒ第三百九條ニ掲ケタル証人ニ對スル受訴裁判所ノ權ハ受命判事又ハ受託判事ニモ屬ス

証人カ受命判事又ハ受託判事ノ面前ニ於テ理由ヲ開示シテ證書ヲ拒ミ又ハ宣誓ヲ拒ミ又ハ宣誓若クハ申立ニ因リ發シタル問ニ答フルコトヲ拒ムトキハ此拒絶ノ當否ニ付キ裁判ヲ爲ス權ハ受訴裁判所

○民事訴訟法

受命判事又ハ受託判事カ原告若クハ被告ヨリ申立テタル間ヲ發スルコトヲ否ムトキハ原告若クハ被告ハ其當否ニ付キ受託判事ノ裁判ヲ求ムルコトヲ得

證人ノ再開問ハ受命判事又ハ受託判事ノ意見ヲ以テ之ヲ命スルコトヲ得

第三百二十條 証人ヲ申出テタル原告若クハ被告ハ其開問ノ開始マテハ此証據方法ヲ拋棄スルコトヲ得其後ハ相手方ノ承諾ヲ得ルトキニ限り之ヲ拋棄スルコトヲ得

第三百二十一條 各證人ハ日當ノ辨濟及ヒ其出頭ノ爲ニ旅行ヲ要スルトキハ旅費ノ辨濟ヲ請求スルコトヲ得

此金額ノ拂渡ハ開問期日ノ終リタル後直チニ之ヲ求ムルコトヲ得
察証者ノ豫納シタル金額不足スルトキハ職權ヲ以テ其不足額ヲ取立ツ可シ

第七節 鑑定

第三百二十二條 鑑定ニ付テハ以下數條ニ於テ別段ノ規定ヲ設ケサル限りハ人証ニ付テノ規定ヲ準用ス

第三百二十三條 鑑定ノ申出ハ鑑定ス可キ事項ヲ表示シテ之ヲ爲ス

第三百二十四條 立會フ可キ鑑定人ノ選定及ヒ其員數ノ指定ハ受託判事ノ爲ス其裁判所ハ鑑定人ノ任命ヲ一名マテニ制限シ又ハ何時ニテモ既ニ任命シタル者ニ代ヘ他ノ鑑定人ヲ任命スルコトヲ得
裁判所ハ鑑定人トシテ開問ヲ受クルニ適當ナル者ヲ指名ス可キ旨ヲ當事者ニ催告スルコトヲ得
當事者カ一定ノ者ヲ鑑定人ニ爲スコトヲ合意シタルトキハ裁判所ハ其合意ニ從フ可シ然レトモ裁判所ハ當事者ノ爲スコキ選定ヲ一定ノ員數ニ制限スルコトヲ得

第三百二十五條 外國ノ書類又ハ產物ノ審査ヲ要スル場合ニ於テ必要ナル能力ヲ有スル本邦人ノ在リサルトキハ裁判所ハ外國人ヲ鑑定人ニ任命スルコトヲ得

第三百二十六條 左ニ掲クル者鑑定ヲ命セラレタルトキハ之ヲ爲ス義務アリ

第一 必要ナル種類ノ鑑定ヲ爲ス爲ニ公ニ任命セラレタル者

第二 鑑定ヲ爲スニ必要ナル學術、技藝若クハ職業ニ當ニ從事スル者又ハ學術、技藝若クハ職業ニ從事スル爲ニ公ニ任命セラレ若クハ授權セラレタル者

右ノ外鑑定ヲ爲スコキ旨ヲ裁判所ニ於テ述ハタル者ハ鑑定人タル義務ナキトモ雖モ鑑定ヲ爲ス義務アリ

第三百二十七條 鑑定人ハ證人カ證言ヲ拒ムコトヲ得ルト同一ノ原因ニ依リ鑑定ヲ拒ム權利アリ
官吏、公吏ハ其所屬ニ於テ異議アルトキハ之ヲ鑑定人トシテ開問スルコトヲ得ス

第三百二十八條 鑑定ヲ爲ス義務アル鑑定人出頭セヌ又ハ鑑定ヲ拒ミタル場合ニ於テハ其者ニ對シ此

カ爲ニ生シタル費用ノ賠償及ヒ罰金ヲ言渡スコシ但し其鑑定人ヲ勾引スルコトヲ得ス

第三百二十九條 鑑定人ハ其鑑定ヲ爲ス前ニ其鑑定人タル義務ヲ公平且誠實ニ履行スコキ旨ノ誓ヲ宜フ可シ

第三百三十條 受託裁判所ハ其意見ヲ以テ左ノ條件ヲ定ム可シ

第一 鑑定人ノ意見ハ口頭又ハ書面ニテ之ヲ述ヘシム可キヤ

第二 數名ノ鑑定人ヲ開問スコキ場合ニ於テ各意見カ異ナルトキハ共同ニテ鑑定書ヲ作ラシム可キヤ又ハ各別ニ之ヲ作ラシム可キヤ

第三 口頭辯論ノ際鑑定人ノ總員又ハ其一名ヲシテ鑑定書ヲ説明セシム可キヤ

○民事訴訟法

第四 鑑定ノ結果カ不十分ナルトキハ同一又ハ他ノ鑑定人ヲシテ再ヒ鑑定ヲ爲サシム可キヤ
第三百三十一條 受託裁判所ハ鑑定人ノ任命ヲ受命判事又ハ受託判事ニ委任スルコトヲ得此場合ニ於テハ受命判事又ハ受託判事ハ第三百二十四條及ヒ第三百三十條第一號又ニ第二號ノ規定ニ依リ受託裁判所ニ属スル權ヲ有ス

第三百三十二條 鑑定人ハ口實(旅費及ヒ立替金)ノ辨濟ヲ請求スルコトヲ得
此場合ニ於テハ第三百二十一條ノ規定ヲ適用ス

第三百三十三條 特別ノ智識ヲ要セシ過去ノ事實又ハ事情ニシテ其實驗アル者ノ開問ニ因リテ確定ス可キトキハ人證ニ付テノ規定ヲ適用ス

第八節 書證

第三百三十四條 書證ノ申出ハ書證ヲ提出シテ之ヲ爲ス

第三百三十五條 舉證者其使用セントスル書證ヲ相手方ノ手ニ存スル旨ヲ主張ストキハ書證ノ申出ハ相手方ニ其書證ノ提出ヲ命センコトヲ申立テ之ヲ爲ス可シ

第三百三十六條 相手方ハ左ノ場合ニ於テ書證ヲ提出スル義務アリ

- 第一 舉證者カ民法ノ規定ニ從ヒ訴訟外ニ於テモ書證ノ引渡又ハ其提出ヲ求ムルコトヲ得ルトキ
- 第二 書證カ其旨趣ニ因リ舉證者及ヒ相手方ニ共通ナルトキ
- 第三百三十七條 相手方ハ其手ニ存スル書證ニシテ其訴訟ニ於テ舉證ノ爲メ引用シタルモノヲ提出スル義務アリ準備書面中ニノミ引用シタルトキト雖モ亦同シ
- 第三百三十八條 書證ノ提出ヲ命センコトノ申立ニハ左ノ條件ヲ掲ク可シ
- 第一 書證ノ表示

第二 書證ニ依リ證ス可キ事實ノ表示

第三 書證ノ旨趣

第四 書證ヲ相手方ノ手ニ存スル旨ヲ主張スル理由タル事情

第五 書證ヲ提出ス可キ義務ノ原因ノ表示

第三百三十九條 裁判所ハ書證ニ依リ證ス可キ事實ノ重要ニシテ且申立テ正當ナリト認ムル場合ニ於テ相手方カ書證ノ其手ニ存スルコトヲ自白スルトキ又ハ申立ニ對シ陳述セザルトキハ證據決定ヲ以テ書證ノ提出ヲ命ス

第三百四十條 相手方カ書證ヲ所持セザル旨ヲ申立ツルトキハ此申立ノ眞實ナルヤ否ヤヲ定ムル爲メ又ハ書證ノ所在ヲ穿鑿スル爲メ又ハ舉證者ノ使用ヲ妨グル目的ヲ以テ故意ニ書證ヲ隱匿シ若クハ使用ニ耐ヘサラシメタルヤ否ヤヲ穿鑿スル爲メ本章第十節ノ規定ニ從ヒテ相手方本人ヲ開問ス可シ
相手方カ官廳ナルトキハ書證カ其官廳ノ保護ニ係ラス又ハ其所在ヲ開示スルコトヲ得ザル旨ノ眞實ノ證明書ヲ以テ開問ニ換フ裁判所ハ此證明書ヲ差出サシムル爲メ相當ノ期間ヲ定ム可シ

第三百四十一條 書證ヲ所持スルコトヲ自白シ又ハ之ヲ所持セスト申立テザル相手方カ其書證ヲ提出ス可シトノ命ニ從ハス又ハ相手方カ所持セスト申立テタル書證ニ付キ開問ヲ受ケテ供述ヲ爲スコトヲ拒ミタルトキ又ハ舉證者ノ使用ヲ妨グル目的ヲ以テ故意ニ書證ヲ隱匿シ若クハ使用ニ耐ヘサラシメタルコトノ明確ナルトキハ舉證者ノ差出シタル書證ノ原本ヲ正當ナルモノト看做ス若シ原本ヲ差出ササルトキハ裁判所ハ其意見ヲ以テ書證ノ性質及ヒ旨趣ニ付キ舉證者ノ主張ヲ正當ナリト認ムルコトヲ得

前條第二項ニ掲ケタル證明書ヲ裁判所ノ定メタル期間内ニ差出ササルトキハ相手方タル官廳ニ對シ

○民事訴訟法

前項ト同一ノ結果ヲ生ス

丁七十

第三百四十二條 舉証者其使用セントスル証書カ第三者ノ手ニ存スル旨ヲ主張スルトキハ其証ノ申出ハ其証書ヲ取寄スル爲メ期間ヲ定メンコトヲ申立テ、之ヲ爲ス

第三百四十三條 第三者ハ舉証者ノ相手方ニ於ケルト同一ナル理由ニ因リ証書ヲ提出スル義務アリ然レトモ強テ証書ヲ提出セシムルコトハ訴ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

第三百四十四條 第三百四十二條ニ從ヒ申立テ爲スニハ第三百三十八條第一號乃至第三號及ニ第五號ノ要件ヲ履ミ且証書カ第三者ノ手ニ存スルコトヲ疎明ス可シ

第三百四十五條 証書ニ依リ証ス可キ事實ノ重要ニシテ且其申立カ前條ノ規定ニ適スルトキハ裁判所ハ証書提出ノ期間ヲ定ム可シ

第三百四十六條 舉証者其使用セントスル証書カ官廳又ハ公吏ノ手ニ存スル旨ヲ主張スルトキハ其証ノ申出ハ該書ノ送付ヲ官廳又ハ公吏ニ囑託セラレンコトヲ申立テ之ヲ爲ス

此規定ハ當事者カ法律上ノ規定ニ從ヒ裁判所ノ助力ナクシテ取寄スルコトヲ得ヘキ証書ニハ之ヲ適用セス

官廳又ハ公吏カ第三百三十六條ノ規定ニ基キ証書ヲ提出スル義務アル場合ニ於テ其送付ヲ拒ムトキハ第三百四十二條乃至第三百四十五條ノ規定ヲ適用ス

第三百四十七條 證據決定ヲ爲シタル後第三百四十二條及ニ第三百四十六條ノ規定ニ從ヒ証書ヲ申出テタル場合ニ於テ證據取寄ノ手續ノ爲ニ訴訟ノ完結ヲ遲延スルニ至ル可ク且裁判所ニ於テ原告若ク

ハ被告カ訴訟ヲ遲延スル故意ヲ以テ又ハ甚シキ怠慢ニ因リ証書ヲ早く申出テサリシコトノ心証ヲ得タルトキハ申立ニ因リ其証書ノ申出ヲ却下スルコトヲ得

第三百四十八條 口頭辯論ノ際証書ヲ提出スルニ於テハ其毀損若クハ紛失ノ恐アリ又ハ他ノ顯著ナル障礙アルトキハ受命判事又ハ受託判事ノ面前ニ證據ヲ提出ス可キ日ヲ命スルコトヲ得

受命判事又ハ受託判事ハ証書ノ明細書及ヒ其原本ヲ調書ニ添附シ又証書ノ一分ノミ必要ナルトキハ第三百七條第二項ノ規定ニ從ヒテ作りタル抄本ヲ之ニ添付ス可シ

第三百四十九條 公正証書ハ正本又ハ認證ヲ受ケタル原本ヲ以テ之ヲ提出スルコトヲ得然レトモ裁判所ハ舉証者ニ正本ノ提出ヲ命スルコトヲ得

私署証書ハ原本ヲ以テ之ヲ提出ス可シ若シ當事者ヨリ未タ提出セサル原本ノ真正ニ付キ一致シ只其証書ノ効力又ハ解釋ニ付ゾノミ爭テ爲ストキハ原本ヲ提出スルヲ以テ足ル然レトモ裁判所ハ職權ヲ以テ舉証者ニ原本ノ提出ヲ命スルコトヲ得

提出シタル原本ニ換ヘテ正本又ハ原本ヲ提出ス可キ旨ノ命ニ從ハサルトキハ裁判所ハ心証ヲ以テ原本ニ如何ナル證據力ヲ付ス可キヤヲ裁判ス

第三百五十條 舉証者ハ証書ヲ提出シタル後ハ相手方ノ承諾ヲ得ルトキニ限リ此證據方法ヲ拋棄スルコトヲ得

第三百五十一條 公正証書又ハ檢具ヲ經タル私署証書ヲ偽造若クハ變造ナリト主張スル者ハ其証書ノ眞否ヲ確定センコトノ申立ヲ爲ス可シ

此場合ニ於テハ裁判所ハ其証書ノ眞否ニ付キ中間判決ヲ以テ裁判ヲ爲ス可シ

第三百五十二條 私署証書ノ眞否ニ付キ爭アルトキハ裁判所ハ舉証者ノ申立ニ因リ檢具ヲ爲スコトヲ得

○民事訴訟法

丁七十一

得

第三百五十三條 私署証書ノ檢査ハ總テノ証據方法及ヒ手跡若クハ印章ノ對照ニ因リテ之ヲ爲ス
証書ノ眞否ヲ証セントスル當事者ハ裁判所ノ定ムル期間内ニ手跡若クハ印章ヲ對照スル爲ニ適當ナル書類ヲ提出ス可シ

眞正ナリト自白又ハ證明シタル適當ノ對照書類ナキトキハ對照ノ爲メ原告若クハ被告ニ對シ裁判所ニ於テ一定ノ語辭ノ手記ヲ命スルコトヲ得其手記シタル語辭ハ圖畫ノ附録トシテ之ニ添付ス可シ
裁判所ハ手跡若クハ印章ヲ對照シタル結果ニ付キ自由ナル心證ヲ以テ裁判ヲ爲シ又必要ナル場合ニ於テハ鑑定ヲ爲サシメタル後之ヲ爲ス

原告若クハ被告カ裁判所ノ定メタル期間内ニ對照書類ヲ提出セザルトキ又ハ對照ス可キ語辭ヲ手記ス可キ裁判所ノ命ニ對シ十分ナル辨解ヲ爲サシメテ之ニ從ハザルトキ又ハ書様ヲ變シテ手記シタルトキハ證據ノ眞否ニ付テノ相手方ノ主張ハ其他ノ證據ヲ要セスシテ之ヲ眞正ナリト看做スコトヲ得
第三百五十四條 提出シタル証書ハ直チニ之ヲ還付シ又適當ナル場合ニ於テハ其原本ヲ記録ニ留メテ之ヲ還付ス可シ

然レトモ証書ノ偽造又ハ變造ナリト爭フトキハ檢事ノ意見ヲ聽キタル後ニ非サレハ之ヲ還付スルコトヲ得ス

第三百五十五條 公正証書ノ偽造若クハ變造ナルコトヲ眞實ニ反キテ主張シタル原告若クハ被告ニ惡意若クハ重過失ノ責アルトキハ五十圓以下ノ過料ヲ言渡ス
又私署証書ノ眞正ナルコトヲ眞實ニ反キテ爭フトキハ前項ト同一ナル條件ヲ以テ二十圓以下ノ過料ヲ言渡ス

第三百五十六條 本節ノ規定ハ事件ノ性質ニ於テ許ス限リハ事跡ノ紀念又ハ權利ノ証據ノ爲メ作リタル劃符、界標等ノ如キモノニモ之ヲ適用ス

第九節 檢証

第三百五十七條 檢証ノ申出ハ檢証物ヲ表示シ及ヒ証ス可キ事實ヲ開示シテ之ヲ爲ス

第三百五十八條 受訴裁判所ハ檢証ヲ爲スニ際シ鑑定人ノ立會ヲ命スルコトヲ得

受訴裁判所ハ檢証及ヒ鑑定人ノ任命ヲ其部員一名ニ命シ又ハ區裁判所ニ囑託スルコトヲ得

第三百五十九條 檢証ヲ爲ス際發見シタル事項ハ調書ニ記載シテ之ヲ明確ナラシメ又必要ナル場合ニ於テハ調書ノ附録トシテ添付ス可キ圖面ヲ作り之ヲ明確ナラシム可シ

若シ既ニ記録ニ圖面ノ存スルトキハ之ヲ檢証物ニ對照シ必要ナル場合ニ於テハ之ヲ更正ス可シ

第十節 當事者本人ノ訊問

第三百六十條 當事者ノ提出シタル許ス可キ證據ヲ調へタル結果ニ因リ設ス可キ事實ノ眞否ニ付キ裁判所カ心證ヲ得ルニ足ラザルトキハ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ原告若クハ被告ノ本人ヲ訊問スルコトヲ得

第三百六十一條 裁判所ハ原告若クハ被告ヲ訊問スルコトヲ決定シ且原告若クハ被告ノ自身カ決定書渡ノ際在廷スルトキハ直チニ其訊問ヲ爲スヲ以テ通例トス

第三百六十二條 訊問ヲ受クル原告若クハ被告ハ供述ニ換ヘテ書類ヲ朗讀シ其他覺書ヲ用井ルコトヲ得ス但算數ノ關係ニ限り覺書ヲ用井ルコトヲ得

第三百六十三條 原告若クハ被告カ十分ナル理由ナクシテ供述スルコトヲ拒ミ又ハ訊問期日ニ出頭セザルトキハ裁判所ハ其意見ヲ以テ訊問ニ因リテ舉証ス可キ相手方ノ主張ヲ正當ナリト認ムルコトヲ得

○民事訴訟法

得

丁七十四

第三百六十四條 訴訟無能力者ノ法律上代理人カ訴訟ヲ爲ストキハ法律上代理人若クハ訴訟無能力者
ヲ訪問ス可キヤ又ハ此等ノ者ヲ共ニ訪問ス可キヤ裁判所ノ意見ヲ以テ之ヲ決定ス
法律上代理人數人アルトキハ其一人ヲ訪問ス可キヤ又ハ數人ヲ訪問ス可キヤモ亦前項ニ同シ

第十一節 證據保全

第三百六十五條 證據ヲ紛失スル恐アリ又ハ之ヲ使用シ難キ恐アルトキハ證據保全ノ爲メ証人若クハ
鑑定人ノ訪問又ハ檢証ヲ申立ツルコトヲ得

第三百六十六條 訴訟カ既ニ繫屬シタルトキハ此申請ハ受訴裁判所ニ之ヲ爲ス可シ

切迫ナル危険ノ場合ニ於テハ訪問ヲ受ク可キ者ノ現在地又ハ檢証ス可キ物ノ所在地ヲ管轄スル區裁
判所ニ申請ヲ爲スコトヲ得

訴訟ノ未タ繫屬セサルトキハ前項ニ記載シタル區裁判所ニ申請ヲ爲スコトヲ得

右申請ハ書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

第三百六十七條 申請ニハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要ス

第一 相手方ノ表示

第二 證據調ヲ爲ス可キ事實ノ表示

第三 證據方法殊ニ証人若クハ鑑定人ノ訪問ヲ爲ス可キトキハ其表示

第四 證據ヲ紛失スル恐アリ又ハ之ヲ使用シ難キ恐アル理由此理由ハ之ヲ説明ス可シ

第三百六十八條 申請ニ付テハ決定ハ口頭辯論ヲ經シテ之ヲ爲スコトヲ得

申請ヲ許容スル決定ニハ證據調ヲ爲ス可キ事實及ヒ證據方法殊ニ訪問ス可キ証人若クハ鑑定人ノ氏

名ヲ記載ス可シ此決定ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス

第三百六十九條 證據調ノ期日ニハ申立人ヲ呼出シ又決定及ヒ申請ノ原本ヲ送達シテ其權利防衛ノ爲
ニ相手方ヲモ呼出ス可シ

切迫ナル危険ノ場合ニ於テハ適當ナル時間ニ相手方ヲ呼出スコトヲ得サリントキト雖モ證據調ヲ妨
クルコト無シ

第三百七十條 證據調ハ本章第六節、第七節及ヒ第九節ノ規定ニ從ヒテ之ヲ爲ス

證據調ノ調書ハ證據調ヲ命シタル裁判所ニ之ヲ保存ス可シ各當事者ハ證據調ノ調書ヲ訴訟ニ於テ使
用スル權利アリ

受訴裁判所ハ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ再度ノ證據調ヲ命シ又ハ既ニ調ヘタル證據ノ補充ヲ命スル
コトヲ得

第三百七十一條 證據調ハ第三百六十五條ノ條件ナキトキト雖モ相手方ノ承諾ニ因リ之ヲ許スコトヲ
得

第三百七十二條 申立人カ相手方ヲ指定セサルトキハ申立人自己ノ過失ニ非スシテ相手方ヲ指定シ能
ハサルコトヲ説明スル場合ニ限リ其申請ヲ許ス

申請ヲ許容シタルトキハ裁判所ハ其知レサル相手方ノ權利防衛ノ爲ニ臨時代理人ヲ任スルコトヲ得

第二章 區裁判所ノ訴訟手續

第一節 通常ノ訴訟手續

第三百七十三條 區裁判所ノ通常ノ訴訟手續ニ付テハ區裁判所ノ構成又ハ第一編及ヒ本節ノ規定ニ依
リ差異ノ生セサル限リハ地方裁判所ノ訴訟手續ニ付テノ規定ヲ適用ス

○民事訴訟法

丁七十五

第三百七十四條 訴ハ書面又ハ口頭ヲ以テ裁判所ニ之ヲ爲スコトヲ得

第三百七十五條 起訴アリタルトキハ裁判所書記ハ訴狀ヲ被告ニ送達スル手續ヲ爲ス
準備書面ノ交換ハ之ヲ爲スコトヲ要セス

第三百七十六條 原告若クハ被告ハ其申立及ヒ事實上ノ主張ニシテ豫メ通知スルニ非サレハ相手方ニ
於テ之ニ對シ陳述ヲ爲シ得ヘカラサルモノヲ口頭辯論ノ前直接ニ相手方ニ通知スルコトヲ得

第三百七十七條 口頭辯論ノ期日ト訴狀送達トノ間ニ少ナクトモ三日ノ時間ヲ存スルコトヲ要ス
送達ヲ外國ニ於テ爲スヘキトキハ事情ニ應ジテ時間ヲ定ム可シ

第三百七十八條 當事者ハ通常ノ裁判日ニ於テハ豫メ期日ノ指定ナクシテ裁判所ニ出頭シ訴訟ニ付キ
辯論ヲ爲スコトヲ得

此場合ニ於テ訴ノ提起ハ口頭ノ演述ヲ以テ之ヲ爲ス

第三百七十九條 數箇ノ妨訴ノ抗辯ヲ本案ノ辯論前同時ニ提出ス可キ規定ハ裁判所管轄處ノ抗辯ニ限
リ之ヲ適用ス

被告ハ妨訴ノ抗辯ニ基キ本案ノ辯論ヲ拒ム權利ナシ然レトモ裁判所ハ職權ヲ以テ右抗辯ニ付キ分
シタル辯論ヲ命スルコトヲ得

第三百八十條 第二百二十二條第二百六十六條乃至第二百七十二條ノ規定ハ區裁判所ノ訴訟手續ニ之
ヲ適用セス

然レトモ原告若クハ被告ノ申立及ヒ陳述ハ裁判所ノ意見ニ從ヒ訴訟關係ヲ十分ニ明確ナラシムル爲
メ必要ナルモノニ限り調書ヲ以テ之ヲ明確ナラシム可シ

第三百八十一條 訴ヲ起サントスル者ハ和解ノ爲メ請求ノ目的物ヲ開示シテ相手方ヲ其普通裁判籍ヲ
有スル區裁判所ニ呼出ス可キコトヲ申立ツルコトヲ得其申立ハ書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ
得

當事者雙方出頭シ和解ノ調ヒタルトキハ調書ヲ以テ之ヲ明確ナラシム可シ
和解ノ調ハサルトキハ當事者雙方ノ申立ニ因リ其訴訟ニ付キ直チニ辯論ヲ爲ス此場合ニ於ケル訴ノ
提起ハ口頭ノ演述ヲ以テ之ヲ爲ス

相手方カ出頭セス又ハ和解ノ調ハサルトキハ此カ爲ニ生シタル費用ハ訴訟費用ノ一分ト看做ス

第二節 督促手續

第三百八十二條 一定ノ金額ノ支拂其他ノ代替物若クハ有價證券ノ一定ノ數量ノ給付ヲ目的トスル請
求ニ付キ債權者ハ通常ノ訴訟手續ニ依ラスシテ督促手續ニ依リ條件附ノ支拂命令ヲ債務者ニ對シ發
センコトヲ申立ツルコトヲ得

申請ノ旨趣ニ依レハ申請者反對給付ヲ爲スニ非サレハ其請求ヲ主張スルコトヲ得サルトキ又ハ支拂
命令ノ送達ヲ外國ニ於テ爲シ若クハ公示送達ヲ以テ爲ス可キトキハ督促手續ヲ許サス

第三百八十三條 支拂命令ハ區裁判所之ヲ發ス
此命令ハ區裁判所ノ第一審ノ事物ノ管轄ノ制限ナキモノト看做シ通常ノ訴訟手續ニ於ケル訴ノ提起
ニ付キ普通裁判籍又ハ不動産上裁判籍ノ屬ス可キ區裁判所ノ管轄ニ專屬ス

第三百八十四條 支拂命令ヲ發スルコトノ申請ハ書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得
此申請ハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要ス

第一 當事者及ヒ裁判所ノ表示

○民事訴訟法

第二 請求ノ一定ノ數額ノ目的物及ヒ原因ノ表示若シ請求ノ數額ナルトキハ其各額ノ一定ノ數額、
目的物及ヒ原因ノ表示

第三 支拂命令ヲ發センコトノ申立

第三百八十五條 裁判所ハ申請ヲ調査シ其申請力前三條ノ規定ニ適當セス又ハ申請ノ旨趣ニ於テ請求
ノ理由ナク又ハ現時理由ナキコトノ顯ハルルトキハ其申請ヲ却下ス

請求ノ一分ノミニ付キ支拂命令ヲ發スルコトヲ得サルトキハ亦其申請ヲ却下ス然レトモ數箇ノ請求
中或ルモノニ理由ナクシテ其他ノモノニ理由アリト見ユルトキハ其理由アリト見ユルモノニ限り申
請ヲ許容ス

右却下ノ命令ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス然レトモ通常ノ訴訟手續ニ依リ戻進スルヲ妨
ルコト無シ

第三百八十六條 支拂命令ハ豫メ債務者ヲ審問セスシテ之ヲ發ス

支拂命令ニハ第三百八十四條第一號及ヒ第二號ニ掲ケタル申請ノ要件ヲ記載シ且即時ノ強制執行ヲ
避ケント欲セハ此命令送達ノ日ヨリ十四日ノ期間内ニ請求ヲ満足セシメ及ヒ其手續ノ費用ニ付キ定
ムル數額ヲ債權者ニ納済ス可ク又ハ裁判所ニ異議ヲ申立ツ可キ旨ノ債務者ニ對スル命令ヲ記載ス可
シ

前項ノ期間ハ爲替ヨリ生スル請求ニ付テハ二十四時間其他ノ請求ニ付テハ申立ニ因リ三日マテニ之
ヲ短縮スルコトヲ得

第三百八十七條 權利拘束ノ效力ハ支拂命令ヲ債務者ニ送達スルヲ以テ始マル
支拂命令ノ送達ハ之ヲ債權者ニ通知ス可シ

第三百八十八條

債務者ハ支拂命令ニ對シ書面又ハ口頭ヲ以テ異議ノ申立ヲ爲スコトヲ得

第三百八十九條

債務者カ請求ノ全部又ハ一分ニ對シ適當ナル時間ニ異議ヲ申立ツルトキハ支拂命令
ノ效力ヲ失フ然レトモ權利拘束ノ效力ヲ存続ス

數箇ノ請求中或ルモノニ對シ異議ヲ申立テタルトキハ支拂命令ハ其他ノ請求及ヒ之ニ相當スル費用
ノ部分ニ付キ效力ヲ有ス

第三百九十條

適當ナル時間ニ異議ヲ申立テタル場合ニ於テハ請求ニ付キ起ス可キ裁判所ノ管
轄ニ屬スルトキハ其裁判所ハ支拂命令ノ送達ト同時ニ區裁判所ニ之ヲ起シタルモノト看做ス其口頭辯論
ノ期日ハ第三百七十七條ノ規定ニ從ヒテ之ヲ定ム

第三百九十一條

請求ニ付キ起ス可キ裁判所ノ管轄ニ屬スル場合ニ於テハ適當ナル時間ニ異
議ノ申立アリタルコトヲ債權者ニ通知ス可シ

債權者其通知書ノ送達アリタル日ヨリ起算シ一個月ノ期間内ニ管轄裁判所ニ訴ヲ起ササルトキハ權
利拘束ノ效力ヲ失フ

第三百九十二條

督促手續ノ費用ハ適當ナル時間ニ異議ノ申立アリタル場合ニ於テハ起ス可キ訴訟ノ
費用ノ一分ト看做ス

前條ノ場合ニ於テ期間内ニ訴ヲ起ササルトキハ手續ノ費用ハ債權者ノ負擔ニ歸ス

第三百九十三條 支拂命令ハ其命令中ニ掲ケタル期間ノ經過後債權者ノ申請ニ因リ之ヲ假ニ執行シ得
ヘキコトヲ宣言ス但假執行ノ宣言前債務者異議ヲ申立テサルトキニ限ル

右假執行ノ宣言ハ支拂命令ニ付ス可キ執行命令ヲ以テ之ヲ爲ス其執行命令ニハ債權者ニ於テ計算ス
ル手續ノ費用ヲ掲ケ可シ

○民事訴訟法

債權者ノ申請ヲ却下スル決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第三百九十四條 執行命令ハ假執行ノ宣言ヲ付シタル關席判決ト同一ナリトス其執行命令ニ對シテハ
第二百五十五條乃至第二百六十四條ノ規定ニ從ヒテ故障ヲ申立ツルコトヲ得請求カ區裁判所ノ管轄
ニ屬セサルトキハ區裁判所ハ其故障ヲ法律上ノ方式及ヒ期間ニ於テ申立テタルヤノ點ノミニ付キ辯
論及ヒ裁判ヲ爲ス此場合ニ於テハ第三百九十一條第二項ニ定メタル期間ハ故障ヲ許ス判決ノ確定ヲ
以テ始マル

第三百九十五條 時期ニ後レテ申立テタル異議ハ命令ヲ以テ之ヲ却下ス

此却下ノ命令ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス

第三編 上訴

第一章 控訴

第三百九十六條 控訴ハ區裁判所又ハ地方裁判所ノ第一審ニ於テ爲シタル終局判決ニ對シテ之ヲ爲ス

第三百九十七條 終局判決前ニ爲シタル裁判ハ亦控訴裁判所ノ判斷ヲ受ク但此法律ニ於テ不服ヲ申立
ツルコトヲ得スト明記シタルトキ又ハ抗告ヲ以テ不服ヲ申立ツルコトヲ得ルトキハ此限ニ在ラス

第三百九十八條 關席判決ニ對シテハ期日ヲ懈怠シタル者ヨリ控訴ヲ以テ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス
但故障ヲ許ササル關席判決ニ對シテハ懈怠ナカリシコトヲ理由トスルトキニ限り控訴ヲ以テ不服ヲ
申立ツルコトヲ得

第三百九十九條 控訴ハ口頭辯論ノ前ニ於テハ被控訴人ノ承諾ナクシテ之ヲ取下クルコトヲ得
控訴ノ取下ハ上訴權ヲ喪失スル結果ヲ生ス

第四百條 控訴期間ハ一个月トス此期間ハ不變期間ニシテ判決ノ送達ヲ以テ始マル

判決ノ送達前ニ提起シタル控訴ハ無効トス

第二百四十二條ノ規定ニ從ヒ控訴期間内ニ追加裁判ヲ以テ判決ヲ補充シタルトキハ控訴期間ノ進行
ハ最初ノ判決ニ對スル控訴ニ付テモ追加裁判ノ送達ヲ以テ始マル

第四百一條 控訴ノ提起ハ控訴狀ヲ控訴裁判所ニ差出シテ之ヲ爲ス
此控訴狀ニハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要ス

- 第一 控訴セラルル判決ノ表示
- 第二 此判決ニ對シ控訴ヲ爲ス旨ノ陳述

此他控訴狀ハ準備書面ニ關スル一般ノ規定ニ從ヒテ之ヲ作り且判決ニ對シ如何ナル程度ニ於テ不服
ナルヤ及ヒ判決ニ付キ如何ナル變更ヲ爲ス可キヤノ申立ヲ掲ク若シ新ニ主張セントスル事實及ヒ證
據方法アルトキハ其新ナル事實及ヒ證據方法ヲモ掲ク可シ

第四百二條 判然許ス可カラサル控訴又ハ判然法律上ノ方式ニ適セス若クハ其期間ノ經過後ニ起シ
ル控訴ハ裁判長ノ命令ヲ以テ之ヲ却下ス

第四百三條 此却下ノ命令ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得
第四百四條 控訴狀ノ送達ト口頭辯論ノ期日トノ間ニ存スルコトヲ要スル時間ニ付テハ第三百九十四條
ノ規定ヲ適用シ答辯書ヲ差出ス可キ期間ノ催告ニ付テハ第三百九十九條ノ規定ヲ適用ス

前項ノ場合ニ於テモ亦第三百三條ノ規定ヲ適用スルコトヲ得
第四百四條 答辯書ハ準備書面ニ關スル一般ノ規定ニ從ヒテ之ヲ作り且被控訴人ノ一定ノ申立及ヒ其
主張セントスル新ナル事實及ヒ證據方法ヲ掲ク可シ

第四百五條 被控訴人ハ自己ノ控訴ヲ拋棄シタルトキ又ハ控訴期間ノ經過シタルトキト雖モ附帶控訴
○民事訴訟法

ヲ爲スコトヲ得

丁八十二

假令判決ニ對シテ附帶控訴ヲ以テ不服ヲ申立ツルコトニ付テハ第三百九十八條ノ規定ニ從フ

第四百六條 左ノ場合ニ於テハ附帶控訴ハ其効力ヲ失フ
第一 控訴ヲ不適法トシテ判決ヲ以テ棄却シタルトキ
第二 控訴ヲ取下ケタルトキ

然レトモ被控訴人カ控訴期間内ニ附帶控訴ヲ爲シタルトキハ之ヲ獨立ノ控訴ト看做ス

第四百七條 答辯書ニハ新ナル事實若クハ證據方法ヲ掲ケ又ハ附帶控訴ヲ爲ス旨ノ陳述ヲ掲ケタルトキハ之ヲ控訴人ニ送達ス可シ

第四百八條 右ノ外控訴ノ訴訟手續ニハ地方裁判所ノ第一審ノ訴訟手續ノ規定ヲ準用ス但本章ノ規定ニ依リ差異ノ生スルモノハ此限ニ在ラス

第四百九條 當事者ノ雙方ヨリ控訴ヲ起シタルトキハ其兩控訴ニ付キ辯論及ヒ裁判ヲ同時ニ爲スヲ以テ通例トス

第四百十條 口頭辯論ハ其期日ニ於テ被控訴人ノ控訴期間ノ未タ經過セサルトキハ其申立ニ因リ期間ノ満了マテ之ヲ延期ス

假令判決ヲ受ケタル原告若クハ被告ヨリ其判決ニ對シテ故障ヲ申立テ相手方ヨリ控訴ヲ起シタルトキハ控訴ニ付テノ辯論及ヒ裁判ハ故障ノ完結マテ躊躇ヲ以テ之ヲ延期ス

第四百十一條 控訴裁判所ニ於ケル訴訟ハ不服ノ申立ニ因リ定マリタル範圍内ニ於テ更ニ之ヲ辯論ス
第四百十二條 當事者ハ其控訴ノ申立及ヒ不服ヲ申立テラレタル裁判ノ當否ヲ明瞭ナラシムル爲メ必要ナル限リハ口頭辯論ノ際第一審ニ於ケル辯論ノ結果ヲ演述ス可シ

演述ノ不正確又ハ不完全ナル場合ニ於テハ裁判長ハ其更正若クハ補充ヲ爲サシム又必要ナル場合ニ於テハ辯論ヲ再開シテ之ヲ爲サシム可シ

第四百十三條 訴ノ變更ハ相手方ノ承諾アルトキト雖モ之ヲ許サス

第四百十四條 妨訴ノ抗辯ハ職權ヲ以テ調査ス可カラサルモノニシテ且原告若クハ被告カ其過失ニ非スシテ第一審ニ於テ提出シ能ハサリシコトヲ疏明スルトキニ限リ之ヲ主張スルコトヲ得

本案ノ辯論ハ妨訴ノ抗辯ニ基キ之ヲ拒ムコトヲ得ス然レトモ裁判所ハ職權ヲ以テ妨訴ノ抗辯ニ付キ分離シタル辯論ヲ命スルコトヲ得

第四百十五條 當事者ハ第一審ニ於テ主張セザリシ攻撃防禦ノ方法殊ニ新ナル事實及ヒ證據方法ヲ提出スルコトヲ得

第四百十六條 新ナル請求ハ第九十六條第二號及ヒ第三號ノ場合又ハ相殺スルコトヲ得ヘキモノニシテ且原告若クハ被告カ其過失ニ非スシテ第一審ニ於テ提出シ能ハサリシコトヲ疏明スルトキニ限リ之ヲ起スコトヲ得

第四百十七條 事實又ハ證書ニ付キ第一審ニ於テ爲ササリシ陳述又ハ拒ミタル陳述ハ第二審ニ於テ之ヲ爲スコトヲ得

第四百十八條 第一審ニ於テ爲シタル裁判上ノ自白ハ第二審ニ於テモ亦其効力ヲ有ス

第四百十九條 控訴裁判所ハ控訴ヲ許ス可キヤ否ヤ又控訴ヲ法律上ノ方式ニ從ヒ若クハ其期間ニ於テ起シタルヤ否ヤヲ職權ヲ以テ調査ス可シ若シ此要件ノ一ヲ缺クトキハ判決ヲ以テ控訴ノ不適法トシテ棄却ス可シ

第四百二十條 第一審ノ裁判ハ變更テ申立アタル部分ニ限リ之ヲ變更スルコトヲ得

○民事訴訟法

丁八十三

第四百二十一條 第一審ニ於テ是認シ又ハ非認シタル請求ニ關スル總テノ爭點ニシテ申立ニ從ヒ辯論及ヒ裁判ヲ必要トスルモノハ第一審ニ於テ此爭點ニ付キ辯論及ヒ裁判ヲ爲ササルトキト雖モ控訴或判所ニ於テ其辯論及ヒ裁判ヲ爲ス

第四百二十二條 控訴辯論ハ左ノ場合ニ於テ事件ニ付キ尙ホ辯論ヲ必要トスルトキハ其事件ヲ第一審裁判所ニ差戻ス可シ

第一 不服ヲ申立テラレタル判決カ廢席判決ナルトキ

第二 不服ヲ申立テラレタル判決カ關席判決ニ對スル故障ヲ不適法トシテ棄却シタルモノナルトキ

第三 不服ヲ申立テラレタル判決カ妨訴ノ抗辯ノミニ付キ裁判ヲ爲シタルモノナルトキ

第四 請求カ其原因及ヒ數額ニ付キ爭アル場合ニ於テ不服ヲ申立テラレタル判決カ先ツ其原因ニ付キ裁判ヲ爲シタルモノナルトキ

第五 不服ヲ申立テラレタル判決カ證據訴訟及ヒ爲替訴訟ニ於テ敗訴ノ被告ニ別添訟ヲ以テ追行ヲ爲ス權ヲ留保シタルモノナルトキ

第四百二十三條 第一審ニ於テ訴訟手續ニ付テノ規定ニ違背シタルトキハ控訴裁判所ハ其判決及ヒ違背シタル訴訟手續ノ部分ヲ廢棄シ事件ヲ第一審裁判所ニ差戻スコトヲ得

第四百二十四條 控訴ノ理由ナシトスルトキハ判決ヲ以テ控訴ノ棄却ヲ言渡スコトヲ得

第四百二十五條 判決ヲ控訴人ノ不利益ニ變更スルコトハ相手方リ控訴又ハ附帶控訴ノ方法ヲ以テ判決ニ付キ不服ヲ申立テタル部分ニ限り之ヲ爲スコトヲ得

第四百二十六條 第二百十條ノ規定ニ從ヒテ防禦ノ方法ヲ却下スルトキハ其防禦ノ方法ヲ主張スル權

ハ之ヲ被告ニ留保ス可シ

判決ニ此留保ヲ掲ケサルトキハ第二百四十二條ノ規定ニ從ヒテ判決ノ補充ヲ申立ツルコトヲ得
留保ヲ掲ケタル判決ハ上訴及ヒ強制執行ニ付テハ終局判決ト看做ス

第四百二十七條 防禦ノ方法ニシテ被告ニ其主張ヲ留保スルモノニ付テハ其訴訟ハ第二審ニ廢席ス
爾後ノ手續ニ於テ訴ヲ以テ主張シタル請求ノ理由ナカリシコトノ顯ハル、トキハ前判決ヲ廢棄シテ其訴ヲ棄却シ且申立ニ因リ判決ニ基キ支拂ヒタルモノ又ハ給付シタルモノヲ返還ス可キコトヲ言渡シ並ニ費用ニ付キ裁判ヲ爲スコトヲ得

第四百二十八條 控訴人カ口頭辯論ノ期日ニ出頭セサルトキハ出頭シタル被控訴人ノ申立ニ因リ廢席判決ヲ以テ控訴ノ棄却ヲ言渡スコトヲ得

第四百二十九條 被控訴人口頭辯論ノ期日ニ出頭セサル場合ニ於テ出頭シタル控訴人ヨリ關席判決ノ申立ヲ爲ストキハ第一審裁判ノ憑據ト爲リタルモノニ抵觸セサル控訴人ノ事實上ノ供述ハ被控訴人之ヲ自白シタルモノト看做シ且第一審裁判所ノ事實上ノ確定ヲ補充シ若クハ辯論スル爲メ控訴人ノ申立テタル適法ノ證據調ハ既ニ之ヲ爲シ及ヒ其結果ヲ得タルモノト看做シ關席判決ヲ爲ス

第四百三十條 辯論中ノ事實ノ揭示ニ付テハ前審ノ辯論ヲ引用スルコトヲ得

第四百三十一條 控訴裁判所ノ書記ハ控訴狀ノ提出ヨリ二十四時間ニ第一審裁判所ノ書記ニ訴訟記録ノ送付ヲ求ム可シ

控訴完結ノ後其記録ハ第二審ニ於テ爲シタル辯論ノ認證アル際本ト共ニ第一審裁判所ノ書記ニ之ヲ返還ス可シ

第二章 上告

○民事訴訟法

第四百三十二條 上告ハ地方裁判所及ヒ控訴院ノ第二審ニ於テ爲シタル終局辯論ニ對シテ之ヲ爲ス
 第四百三十三條 終局判決前ニ爲シタル裁判ハ亦上告裁判所ノ判斷ヲ受ク但此法律ニ於テ不服ヲ申立
 ツルコトヲ得スト明記シタルトキ又ハ抗告ヲ以テ不服ヲ申立ツルコトヲ得ルトキハ此限ニ在ラス
 第四百三十四條 上告ハ法律ニ違背シタル裁判ナルコトヲ理由トスルトキハ此限リ之ヲ爲スコトヲ得
 第四百三十五條 法則ヲ適用セス又ハ不當ニ適用シタルトキハ法律ニ違背シタルモノトス
 第四百三十六條 裁判ハ左ノ場合ニ於テハ常ニ法律ニ違背シタルモノトス

第一 規定ニ從ヒ判決裁判所ヲ構成セザリシトキ

第二 法律ニ依リ職務ノ執行ヨリ除外セラレタル判事カ裁判ニ參與シタルトキ但忌避ノ申請又ハ

上訴ヲ以テ除外ノ理由ヲ主張シタルモ其効ナカリシトキハ此限ニ在ラス

第三 判事カ忌避セラレ且忌避ノ申請ヲ理由アリト認メタルニ均ハラズ裁判ニ參與シタルトキ

第四 裁判所カ其管轄又ハ管轄違テ不當ニ認メタルトキ

第五 訴訟手續ニ於テ原告若クハ被告カ法律ノ規定ニ從ヒ代理セラレザリシトキ

第六 訴訟手續ノ公行ニ付テノ規定ニ違背シタル口頭辯論ニ基キ裁判ヲ爲シタルトキ

第七 裁判ニ理由ヲ付セザルトキ

第四百三十七條 上告期間ハ一个月トス此期間ハ不變期間ニシテ裁判ノ送達ヲ以テ始マル

判決ノ送達前ニ提起シタル上告ハ無効トス

第四百三十八條 上告ノ提起ハ上告狀ヲ上告裁判所ニ差出シテ之ヲ爲ス

此上告狀ニハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要ス

第一 上告セラルル判決ノ表示

第二 此判決ニ對シ上告ヲ爲ス旨ノ陳述

此他上告狀ハ準備書面ニ關スル一般ノ規定ニ從ヒテ之ヲ作り特ニ判決ニ對シ如何ナル程度ニ於テ不
 服ナルヤ及ヒ判決ニ付キ如何ナル程度ニ於テ破毀ヲ爲ス可キヤノ申立ヲ掲ケ且法則ヲ適用セス若ク
 ハ不當ニ適用シタルコトヲ上告ノ理由トスルトキハ其法則ノ表示又ハ訴訟手續ニ付テノ規定ニ違背
 シタルコトヲ上告ノ理由トスルトキハ其欠缺ヲ明カニスル事實ノ表示又ハ法律ニ違背シテ事實ヲ確
 定シ若クハ遺脱シ若クハ提出シタリト看做シタルコトヲ上告ノ理由トスルトキハ其事實ノ表示ヲ掲
 ク可シ

第四百三十九條 上告裁判所ハ上告人ヲ呼出シ其陳述ヲ聽キ上告ヲ許ス可カラサルモノナルトキ又ハ
 法律上ノ方式及ヒ期間ニ於テ起ササルトキ又ハ第四百三十四條ノ規定ニ依ラサルトキハ判決ヲ以テ
 之ヲ棄却ス可シ

上告人カ呼出ノ期日ニ出頭セザルトキハ上告ヲ取下ケタルモノト看做ス但出頭セザリシコトヲ期日
 ヨリ七日ノ期間内ニ十分ナル理由ヲ以テ解釋シタルトキハ更ニ期日ヲ定ム

第四百四十條 上告狀ノ送達ト口頭辯論ノ期日トノ間ニ存スルコトヲ要スル時間ニ付テハ第四百九十四
 條ノ規定ヲ適用シ答辯書ヲ差出ス可キ期間ノ催告ニ付テハ第四百九十九條ノ規定ヲ適用ス

前項ノ場合ニ於テモ亦第二百三條ノ規定ヲ適用スルコトヲ得

第四百四十一條 答辯書ハ準備書面ニ關スル一般ノ規定ニ從ヒテ之ヲ作り且一定ノ申立ヲ掲ク可シ

第四百四十二條 被上告人ハ附帶上告ヲ爲スコトヲ得

此附帶上告ニ付テハ附帶控訴ノ規定ヲ準用ス

第四百四十三條 答辯書ニ附帶上告ヲ爲ス旨ノ陳述ヲ掲ケタルトキハ之ヲ上告人ニ送達ス可シ

○民事訴訟法

第四百四十四條 右ノ外上告ノ訴訟手續ニハ地方裁判所ノ第一審ノ訴訟手續ノ規定ヲ準用ス但本章ノ規定ニ依リ差異ノ生スルモノハ此限ニ在ラス

第四百四十五條 上告裁判所ハ當事者ノ爲シタル申立ノミニ付キ調査ヲ爲ス

第四百四十六條 上告裁判所ハ裁判ヲ爲スニ付キ控訴裁判所カ其裁判ノ根據トシタル事實ヲ標準トス此事實ノ外ハ第四百三十八條第三項ニ掲ケタル事實ニ限り之ヲ斟酌スルコトヲ得
證據ヲ必要トスルトキハ上告裁判所ハ之ヲ命ス可シ

第四百四十七條 上告ヲ理由アリトスルトキハ不服ヲ申立テラレタル判決ヲ破毀ス可シ

訴訟手續ニ關スル規定ニ違背シタルニ因リ判決ヲ破毀スルトキハ其違背シタル部分ニ限り訴訟手續ヲモ亦破毀ス可シ

第四百四十八條 判決ヲ破毀スル場合ニ於テハ第四百五十一條ノ規定ヲ除ク外更ニ辯論及ヒ裁判ヲ爲サシムル爲メ事件ヲ控訴裁判所ニ差戻シ又ハ之ヲ他ノ同等ナル裁判所ニ移送ス可シ

事件ノ差戻又ハ移送ヲ受ケタル裁判所ハ新口頭辯論ニ基キ裁判ヲ爲スコトヲ要ス

第四百四十九條 當事者ハ破毀セラレタル判決ノ以前ニ於ケル口頭辯論ニ當リ提出スルコトヲ得ヘカリシ事項ヲ新口頭辯論ニ際シ提出スル權利アリ

第四百五十條 事件ノ差戻又ハ移送ヲ受ケタル裁判所ハ上告裁判所ノ爲シタル法律ニ係ル判斷ニシテ判決ヲ破毀スル基本ト爲シタルモノヲ以テ新ナル辯論及ヒ裁判ノ基本ト爲ス義務アリ

第四百五十一條 上告裁判所ハ左ノ場合ニ於テ事件ニ付キ裁判ヲ爲ス可シ

第一 確定シタル事實ニ法律ヲ適用スルニ當リ法律ニ違背シタル爲ニ判決ヲ破毀シ且其事件カ裁判ヲ爲スニ熟スルトキ

第二 無罪辯ノ爲メ又ハ裁判所ノ管轄違ナル爲ニ判決ヲ破毀スルトキ

第四百五十二條 上告ヲ理由ナシトスルトキハ之ヲ棄却ス可シ

第四百五十三條 裁判カ其理由ニ於テ法律ニ違背シタルトキト雖モ他ノ理由ニ因リ裁判ノ正當ナルトキハ上告ヲ棄却ス可シ

第四百五十四條 左ノ諸件ニ關スル控訴ノ規定ハ上告ニ之ヲ準用ス

第一 關席判決ニ對スル不服ノ申立

第二 控訴ノ取下

第三 當事者ノ雙方ヨリ控訴ヲ起シタル場合ニ於ケル訴訟手續及ヒ控訴ト故障トナ同時ニ爲シタルトキノ訴訟手續

第四 口頭辯論ノ延期

第五 口頭辯論ノ際ニ於ケル當事者ノ演述

第六 妨訴ノ抗辯ニ付テノ辯論

第七 控訴ヲ起シタル者ノ不利益ト爲ル裁判ヲ爲スコカラサルコト

第八 記録ノ送付並ニ返還

第三章 抗告

第四百五十五條 抗告ハ訴訟手續ニ關スル申請ヲ口頭辯論ヲ經スシテ却下シタル裁判ニ對シ其他此法律ニ於テ特ニ掲ケタル場合ニ限り之ヲ爲スコトヲ得

第四百五十六條 抗告ニ付テハ直近ノ上級裁判所其裁判ヲ爲ス

抗告裁判所ノ裁判ニ對シテハ其裁判ニ因リ漸ナル獨立ノ抗告理由ヲ生シタルトキニ非サレハ更ニ抗

○民事訴訟法

告ヲ爲スコトヲ得ス

第四百五十七條 抗告ハ不服ヲ申立テラレタル裁判ヲ爲シタル裁判所又ハ裁判長ノ屬スル裁判所ニ抗告狀ヲ差出シテ之ヲ爲ス

訴訟カ區裁判所ニ屬屬シ若クハ管テ屬屬シタルトキ又ハ證人、鑑定人ヨリ若クハ證據ヲ提出スル義務アリト宣言ヲ受ケタル第三者ヨリ抗告ヲ爲ストキハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

第四百五十八條 抗告ハ新ナル事實及ヒ證據方法ヲ以テ憑據ト爲スコトヲ得

第四百五十九條 不服ヲ申立テラレタル裁判ヲ爲シタル裁判所又ハ裁判長カ再度ノ考案若クハ新ナル提供ニ基キ抗告ヲ理由アリトスルトキハ不服ノ撤テ更正シ又理由ナシトスルトキハ裁判所又ハ裁判長ハ意見ヲ付シテ三日ノ期間内ニ抗告ヲ抗告裁判所ニ送付シ又適當トスル場合ニ於テハ訴訟記録ヲモ送付ス可シ

第四百六十條 抗告ハ此法律ニ於テ別段ノ規定ヲ設ケタル場合ニ限り執行停止ノ效力ヲ有ス然レトモ不服ヲ申立テラレタル裁判ヲ爲シタル裁判所又ハ裁判長ハ抗告ニ付テノ裁判アルマテ其執行ノ中止ヲ命スルコトヲ得

抗告裁判所ハ抗告ニ付テノ裁判ヲ爲ス前ニ不服ヲ申立テラレタル裁判ノ執行中止ヲ命スルコトヲ得

第四百六十一條 抗告ハ急迫ナル場合ニ限り直チニ抗告裁判所ニ之ヲ爲スコトヲ得

抗告裁判所ハ裁判ヲ爲ス前ニ不服ヲ申立テラレタル裁判ヲ爲シタル裁判所又ハ裁判長ノ意見及ヒ記録ヲ要求スルコトヲ得

抗告裁判所ハ事件ヲ急迫ナラスト認ムルトキハ不服ヲ申立テラレタル裁判ヲ爲シタル裁判所又ハ裁判長ニ其事件ヲ送付シ且其旨ヲ抗告人ニ通知ス可シ

第四百六十二條 抗告裁判所ハ口頭辯論ヲ經スシテ裁判ヲ爲スヲ以テ通例トス

抗告裁判所ハ抗告人ト反對ノ利害關係ヲ有スル者ニ抗告ヲ通知シテ書面上ノ陳述ヲ爲サシムルコトヲ得

陳述ハ口頭ヲ以テ抗告ヲ爲シ得ヘキ場合ニ於テハ亦口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

第四百六十三條 抗告裁判所ハ抗告ヲ許ス可キヤ否ヤ又法律上ノ方式ニ從ヒ若クハ其期間ニ於テ提出シタルヤ否ヤヲ職權ヲ以テ調査ス可シ

若シ此要件ノ一ヲ缺クトキハ抗告ヲ不適法トシテ棄却ス可シ

第四百六十四條 抗告ヲ適法ニシテ且理由アリトスルトキハ抗告裁判所ハ不服ヲ申立テラレタル裁判ヲ廢棄シテ自ら更ニ裁判ヲ爲シ又ハ不服ヲ申立テラレタル裁判ヲ爲シタル裁判所又ハ裁判長ニ委任シテ裁判ヲ爲サシムルコトヲ得

抗告裁判所ノ裁判ハ不服ヲ申立テラレタル裁判ヲ爲シタル裁判所又ハ裁判長ニ之ヲ通知ス可シ

第四百六十五條 受命判事若クハ受託判事ノ裁判又ハ裁判所書記ノ處分ノ變更ヲ求ムルニハ先ツ受命裁判所ノ裁判ヲ求ム可シ

抗告ハ受命裁判所ノ裁判ニ對シテ之ヲ爲スコトヲ得

第一項ノ規定ハ大審院ニモ亦之ヲ適用ス

第四百六十六條 即時抗告ノ場合ニ於テハ左ノ特別ノ規定ニ從フ

○民事訴訟法

ルトキハ急迫ナラスト認メタル場合ニ於テモ亦不變裁判ヲ保存ス
再審ヲ求ムル訴ニ付テノ要件存スルトキハ不變期間ノ満了後ト雖モ此訴ノ爲メ定メタル期間内ハ抗
告ヲ爲スコトヲ得

前條第一項ノ場合ニ於テハ抗告提出ノ爲メ定メタル方法ニ依リ不變期間内ニ受訴裁判所ノ裁判ヲ求
ムルコトヲ要ス受訴裁判所ハ其申請ヲ正當ト認メサルトキハ之ヲ抗告裁判所ニ送付ス可シ

第四編 再審

第四百六十七條 確定ノ終局判決ヲ以テ終結シタル訴訟ハ取消ノ訴又ハ原狀回復ノ訴ニ因リ之ヲ再審
スルコトヲ得

當事者ノ一方又ハ雙方ヨリ此兩訴ヲ起シタルトキハ原狀回復ノ訴ニ付テノ辯論及ヒ裁判ハ取消ノ訴
ニ付テノ裁判カ確定スルマテ之ヲ中止ス可シ

第四百六十八條 左ノ場合ニ於テハ取消ノ訴ニ因リ再審ヲ求ムルコトヲ得

第一 規定ニ從ヒ判決裁判所ヲ構成セザリシトキ

第二 法律ニ依リ職務ノ執行ヨリ除外セラレタル判事カ裁判ニ參與シタルトキ但忌避ノ申請又ハ
上訴ヲ以テ除外ノ理由ヲ主張シタルモ其効ナカリシトキハ此限ニ在ラス

第三 判事カ忌避セラレ且忌避ノ申請カ理由アリト認メラレタルニ拘ハラヌ裁判ニ參與シタリシ
トキ

第四 訴訟手續ニ於テ原告若クハ被告カ法律ノ規定ニ從ヒ代理セラレザリシトキ

第一號及ヒ第三號ノ場合ニ於テ上訴若クハ故障ヲ以テ取消ヲ主張シ得ヘカリシトキハ取消ノ訴ヲ許
サス

第四百六十九條 左ノ場合ニ於テハ原狀回復ノ訴ニ因リ再審ヲ求ムルコトヲ得

第一 刑法ニ拘ケタル職務上ノ義務ニ違背シタル罪ヲ訴訟ニ關シタル判事カ裁判ニ參與シタ
リシトキ

第二 原告若クハ被告ノ法律上代理人若クハ訴訟代理人又ハ相手方若クハ其法律上代理人若クハ
訴訟代理人カ罰セラル可キ行為ヲ訴訟ニ關シテ爲シタリシトキ

第三 判決ノ憑據ト爲リタル證書カ偽造又ハ變造ナリシトキ

第四 證人若クハ鑑定人カ供述ニ因リ又ハ通事カ判決ノ憑據ト爲リタル通譯ニ因リ偽證ノ罪ヲ犯
シタリシトキ

第五 判決ノ憑據ト爲リタル刑事上ノ判決カ他ノ確定ト爲リタル刑事上ノ判決ヲ以テ廢棄若クハ
破毀セラレタリシトキ

第六 原告若クハ被告カ同一ノ事件ニ付テノ判決ニシテ前ニ確定ト爲リタルモノヲ發見シ其判決
カ不服ヲ申立テラレタル判決ト抵觸スルトキ

第七 相手方若クハ第三者ノ所爲ニ依リ以前ニ提出スルコトヲ得サリシ證書ニシテ抗告若クハ被
告ノ利益ト爲ル可キ裁判ヲ爲スニ至ラシム可キモノヲ發見シタルトキ

第一號乃至第四號ノ場合ニ於テハ罰セラル可キ行為ニ付テ判決カ確定ト爲リタルトキ又ハ證據欠缺
外ナル理由ヲ以テ刑事訴訟手續ノ開始若クハ實行ヲ爲シ得サルトキニ限り再審ヲ求ムルコトヲ得

第四百七十條 原狀回復ノ訴ハ原告若クハ被告カ自己ノ過失ニ非スシテ前訴訟手續ニ於テ殊ニ故障又
ハ控訴若クハ附帶控訴ニ依リ原狀回復ノ理由ヲ主張スルコト能ハサリシトキニ限り之ヲ爲スコトヲ
得

○民事訴訟法

第四百七十一條 不服ヲ申立テラレタル判決前ニ同一ノ裁判所又ハ下級ノ裁判所ニ於テ爲シタル裁判ニ關スル不服ノ理由ハ再審ヲ求ムル際ト共ニ之ヲ主張スルコトヲ得但不服ヲ申立テラレタル判決カ其裁判ニ根據スルトキニ限ル

第四百七十二條 再審ヲ求ムル際ハ不服ヲ申立テラレタル裁判ヲ爲シタル裁判所ノ管轄ニ專屬ス同一ノ事件ニ付キ一分ハ下級ノ裁判所又一分ハ上級ノ裁判所ニ於テ爲シタル數箇ノ判決ニ對スル際ハ上訴ノ裁判所ノ管轄ニ專屬ス

督促手續ニ依リテ區裁判所ノ發シタル執行命令ニ對シ再審ヲ求ムル際ハ其命令ヲ發シタル區裁判所ノ管轄ニ專屬ス然ントモ其請求カ區裁判所ノ管轄ニ屬セサルトキハ請求ニ付テハ訴訟ヲ管轄スル裁判所ニ專屬ス

第四百七十三條 訴ノ提起及ヒ其後ノ訴訟手續ニハ以下數條ニ於テ別段ノ規定ヲ設ケサル限リハ其訴ニ付キ辯論及ヒ裁判ヲ爲ス可キ裁判所ノ訴訟手續ニ關スル規定ヲ準用ス

第四百七十四條 訴ハ一个月ノ不變期間内ニ之ヲ起ス可シ此期間ハ原告若クハ被告カ不服ノ理由ヲ知リタル日ヲ以テ始マル若シ原告若クハ被告カ判決ノ確定前ニ不服ノ理由ヲ知リタルトキハ判決ノ確定ヲ以テ始マル

判決確定ノ日ヨリ起算シテ五年ノ滿了後ハ訴ヲ爲スコトヲ得ス前二項ノ規定ハ第四百六十八條第四號ノ場合ニ之ヲ適用セス此場合ニ於テ其訴ノ提起ノ期間ハ原告若クハ被告又ハ其法律上代理人カ選擇ニ因リ判決アリタルコトヲ知リタル日ヲ以テ始マル

第四百七十五條 訴狀ニハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要ス
第一 取消又ハ原狀回復ノ訴ヲ受クル判決ノ表示

第二 取消又ハ原狀回復ノ訴ヲ起ス旨ノ陳述

此他訴狀ハ準備書面ニ關スル一般ノ規定ニ從ヒテ之ヲ作り且不服ノ理由ノ表示、此理由及ヒ不變期間ノ遵守ヲ明白ナラシムル事實ニ付テハ證據方法又如何ナル程度ニ於テ不服ヲ申立テラレタル判決ヲ廢棄若クハ破毀ス可キヤノ申立又本案ニ付キ更ニ如何ナル裁判ヲ爲ス可キヤノ申立ヲモ掲ケ可シ

第四百七十六條 判然許ス可カラサル訴又ハ判然法律上ノ方式ニ適セス若クハ其期間ノ經過後ニ起シタル訴ハ裁判長ノ命令ヲ以テ之ヲ却下ス可シ此却下ノ命令ニ對シ即テ時抗告ヲ爲スコトヲ得

第四百七十七條 原告ハ口頭辯論ノ期日ニ於テ相手方ノ陳述ノ有無ニ拘ハラズ再審ヲ求ムル理由及ヒ法律上ノ期間ノ遵守ヲ明白ニスル事實ヲ疏明ス可シ

第四百七十八條 許ス可カラサル訴又ハ法律上ノ方式ニ適セス若クハ其期間ノ經過後ニ起シタル訴ハ職權ヲ以テ判決ニ因リ不適法トシテ之ヲ棄却ス可シ

第四百七十九條 本案ニ付テハ辯論及ヒ裁判ハ不服申立ノ理由ノ存スル部分ニ限リ更ニ之ヲ爲ス可シ裁判所ハ本案ニ付テハ辯論前ニ再審ヲ求ムル理由及ヒ許否ニ付キ辯論及ヒ裁判ヲ爲スコトヲ得此場合ニ於テハ本案ニ付テハ辯論ハ再審ヲ求ムル理由及ヒ許否ニ付テハ辯論ノ續行ト看做ス

第四百八十條 原告ノ不利益ト爲ル判決ノ變更ハ相手方カ再審ヲ求ムル際ヲ起シテ變更ヲ申立テタルトキニ非サレハ之ヲ爲スコトヲ得ス

第四百八十一條 訴カ上告裁判所ニ屬スルトキハ上告裁判所ハ再審ヲ求ムル理由及ヒ其許否ニ付テハ辯論ノ完結カ係爭事實ノ確定及ヒ斟酌ニ關ルトキト雖モ其完結ヲ爲ス可シ

第四百八十二條 上訴ハ訴ニ付キ裁判ヲ爲シタル裁判所ノ判決ニ對シ一般ニ爲スコトヲ得ヘキトキニ

○民事訴訟法

限り之ヲ爲スコトヲ得

丁九十六

第四百八十三條 第三者カ原告及ヒ被告ノ共謀ニ因リ第三者ノ債權ヲ侵害スル目的ヲ以テ判決ヲ爲サシメタリト主張シ其判決ニ對シ不服ヲ申立ツルトキハ原狀回復ノ訴ニ因レル再審ノ規定ヲ適用ス此場合ニ於テハ原告及ヒ被告ヲ共同被告ト爲ス

第五編 證書訴訟及ヒ爲替訴訟

第四百八十四條 一定ノ金額ノ支拂其他ノ代替物若クハ有價證券ノ一定ノ數量ノ給付ヲ目的トスル請求ハ其請求ヲ起ス理由タル總テノ必要ナル事實ヲ證書ニ依リ證スルコトヲ得ヘキトキハ證書訴訟ヲ以テ之ヲ主張スルコトヲ得

第四百八十五條 訴狀ニハ證書訴訟トシテ訴フル旨ノ陳述ヲ掲ケ且證書ノ原本又ハ謄本ヲ添フルコトヲ要ス

第四百八十六條 本案ノ辯論ハ妨訴ノ抗辯ニ基キ之ヲ拒ムコトヲ得ス然レトモ裁判所ハ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ此抗辯ニ付キ辯論ノ分離ヲ命スルコトヲ得

第四百八十七條 反訴ハ之ヲ爲スコトヲ得ス
證書ノ眞否及ヒ第四百八十四條ニ掲ケタル以外ノ事實ニ關シテハ書証ノミヲ以テ適法ノ證據方法ト爲スコトヲ得

書証ノ申出ハ證書ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

第四百八十八條 原告ハ口頭辯論ノ終結ニ至ルマテハ被告ノ承諾ヲ要セスシテ通常ノ手續ニテ訴訟ヲ繫屬セシメテ證書訴訟ヲ止ムルコトヲ得

第四百八十九條 訴ヲ以テ主張シタル請求カ理由ナシト見エ又ハ被告ノ抗辯ニ因リ理由ナシト見ユル

トキハ原告ノ請求ヲ却下ス可シ

證書訴訟ヲ許ス可カラサルトキ殊ニ適法ノ證據方法ヲ以テ原告ノ義務タル證據ヲ申出テス又ハ完全ニ之ヲ舉ケサル場合ニ於テハ被告カ口頭辯論ノ期日ニ出頭セス又ハ法律上ノ理由ナキ異議若クハ證書訴訟ニ於テ許ササル異議ノミヲ以テ訴ニ對シ抗辯シタルトキト雖モ此訴訟ニ於テハ其訴ヲ許ササルモノトシテ之ヲ却下ス可シ

第四百九十條 證書訴訟ニ於テ適法ノ證據方法ヲ以テ被告ノ義務タル證據ヲ申出テス又ハ完全ニ之ヲ舉ケサルトキハ被告ノ異議ハ證書訴訟ニ於テ許ササルモノトシテ之ヲ却下ス可シ

第四百九十一條 主張シタル請求ヲ争ヒタル被告ニハ敗訴ノ言渡ヲ受ケタル總テノ場合ニ於テ其權利ノ行使ヲ留保ス可シ

判決ニ此留保ヲ掲ケサルトキハ第二百四十二條ノ規定ニ依リ判決ノ補充ヲ申立ツルコトヲ得
留保ヲ掲ケタル判決ハ上訴及ヒ強制執行ニ付テハ之ヲ終局判決ト看做ス

第四百九十二條 被告ニ權利ノ行使ヲ留保シタルトキハ訴訟ハ通常ノ訴訟手續ニ於テ繫屬ス

此手續ニ於テ證書訴訟ヲ以テ主張シタル請求ノ理由ナカリシコトノ顯ハルトキハ前判決ヲ廢棄シ原告ノ請求ヲ却下シ且其生セシメタル費用ノ全部又ハ一分ノ辨濟ヲ原告ニ言渡シ又前判決ニ基キ被告ヨリ支拂ヒ又ハ給付シタルモノノ辨濟ヲ申立ニ因リ原告ニ言渡ス可シ

右手續ニ於テ原告若クハ被告カ出頭セサルトキハ關席判決ニ關スル規定ヲ適用ス

第四百九十三條 第四百二十六條及ヒ第四百二十七條ノ規定ハ證書訴訟ニ之ヲ適用セス

第四百九十四條 商法ニ規定シタル手形ニ因ル請求ヲ證書訴訟ヲ以テ主張スルトキハ爲替訴訟トシテ以下二條ニ掲ケル特別ノ規定ヲ適用ス

○民事訴訟法

丁九十七